会　報

第36号

平成20年度

東京都立高等学校副校長会

会報第36号の発刊によせて

会　長　　錦　織　政　晴
（東京都立武蔵高等学校・附属中学校）

平成20年度の「会報」第36号を発刊するにあたり、会員の皆様とともに副校長会の意義を再確認し合いたいと存じます。本会は、昭和38年1月24日に発足しました。まもなく、50周年を迎えようとしております。本会の目的は、「副校長の職務および身分など共通の問題に関する調査・研究をし、会員相互の向上を図り、必要に応じ提言を行うことにより、もって東京都立高等学校教育の進展に資する。」とあります。「会員相互の向上を図」るとは、当然、副校長としての資質・能力の向上を研鑽し合うことにほかなりません。かつては、調査・研究を行う「管理・高校・生徒委員会」や地区別の会合がその役割を担っていました。また、「必要に応じ提言を行うこと」の場として、「研究協議会」が設定されていました。指導部の校閲を経て研究協議会に発表するとは、「必要に応じ提言を行うこと」であったわけです。

かつて、平成16年度と17年度の2か年を都会長としてつとめ、会費の改定、会計規定に関する会則・規約の改正を実施し、従来の「教頭会」を会計的に自立した組織へと転換し、会の名称も「東京都立高等学校副校長会」に変更させていただきました。学校経営支援センターの発足する平成18年度に向けて、「学校経営支援チーム」ごとの副校長連絡会開催による研修・研究組織の見直しを行いました。しかし、「副校長の職務および身分など共通の問題に関する調査・研究をし、会員相互の向上を図り、必要に応じ提言を行うこと」は、必ずしも機能していないのではないでしょうか。その後、平成18年度から全国会長へと転出し、10年に1度の全国大会を都副校長会で主催し、平成20年度には全国組織の名称も「全国高等学校教頭・副校長会」に改めることとなりました。東京都の抱えている問題・課題は、「会員相互の研究と経験の交流を行う」という緩やかな組織でありながら、少しずつ全国組織としての問題・課題となりつつあります。

さて、平成20年度は、副校長会としては異例な体制をとらざるを得ない1年でありましたが、とにかく、1年間を終えようとしています。そもそも都会長として予定していた方が、急きょ、校長として発令されることとなり、止むを得ず、結果として全国会長が都会長を兼務することとなりました。しかし、全国会長としての分担もあり、実務は、玉井篤全国副会長に「会長代行」を委嘱する形とならざるを得ませんでした。都の会長・副会長などの役員には、年間15～20回ほどの会合が夜間にあります。加えて、全国の会長・副会長などの役員には、年間10回程度の会合が午後にあります。玉井副会長には、昼夜を問わずご尽力をいただいたことになります。

たまさか、平成15年度に、都副会長に予定されていた方が学校の都合により、副会長に就任できない状況が生じました。「校務に支障のないかぎり」というのは当然の前提条件であると言えましょう。しかし、考えてみますと、平成15年度に「誰かが引き受けざるを得ない。」ところから、副会長を引き受けてしまったために今日に至っているという思いは、玉井副会長ともども実感しているところでもあるのです。人が良いばかりではないということであります。今一度、「副校長の職務および身分など共通の問題に関する調査・研究をし、会員相互の向上を図り、必要に応じ提言を行うことにより、もって東京都立高等学校教育の進展に資する。」という目的を、皆様に再認識していただけたならばと思います。

なお、「会報」第36号を発刊するにあたり、東京都教育委員会、とりわけ教育庁指導部高等学校教育指導課、都公立高等学校長協会をはじめとする関係機関の諸先生方に、この1か年の活動へご指導・ご助言・ご支援をたまわりましたことに御礼を申し上げたいと存じます。また、編集・発刊の実務に従事されました事務局の先生方、常任幹事を筆頭とする関係各位のご協力に感謝を申し上げます。

最後に、創立50周年と全国大会に向けて、「東京都立高等学校副校長会」が新たな態勢の整備を今こそ必要としていることを申し上げて、発刊のことばとさせていただきます。

目　　次

会長あいさつ（発刊によせて）

1. 教頭会・副校長会のあゆみ
1．本会創設以前の教頭会 …… 1
2．会員数と会費の変遷 …… 3
3．本会のあゆみ …… 7
4．本会のあゆみ一覧 …… 11

2. 総務部会報告
1．本部の活動 …… 16
2．平成20年度予算 …… 17
3．平成20年度事業報告 …… 19
4．総会 …… 20
5．幹事会 …… 20
6．総務部会 …… 21
7．特別委員会 …… 23

3. 主な活動報告
1．全国高等学校教頭・副校長会 … 24
2．都立高校副校長研究協議会 …… 25
3．関東大会報告 …… 26

4. 地区別支部副校長会報告
1．東部A地区副校長会 …… 28
2．東部B地区副校長会 …… 29
3．東部C地区副校長会 …… 30
4．東部D地区副校長会 …… 31
5．中部A地区副校長会 …… 32
6．中部B地区副校長会 …… 33
7．中部C地区副校長会 …… 34
8．中部D地区副校長会 …… 35
9．西部A地区副校長会 …… 36
10．西部B地区副校長会 …… 38
11．西部C地区副校長会 …… 39
12．西部D地区副校長会 …… 40

5．学科別副校長会報告
1．工業科副校長会 …… 41
2．商業科副校長会 …… 43
3．農業科副校長会 …… 45

6．研究部会報告
1．管理運営研究部会 …… 46
第1委員会（学校管理関係） …… 47
第2委員会（職務、待遇関係） 48
2．高校教育研究部会 …… 49
第1委員会（教育課程） …… 50
第2委員会（教育対策） …… 51
3．生徒指導研究部会 …… 52
第1委員会（生活指導・進路指導） …… 54
第2委員会（教科以外の教育指導） …… 55

7．退任者の声 …… 57

8．転任者の声 …… 60

9．新任者の声 …… 69

10.(1) 講話「心で走る」
東京都教育委員会委員
瀬古　利彦 先生 …… 85

(2) 講話「先輩元副校長から現役の副校長へのアドバイス」
元都立松原高等学校副校長
大河内　保雪 先生 …… 88

12. 会員異動
会員異動 …… 98

編集後記

1. 教頭会・副校長会のあゆみ

1. 本会創立以前の教頭会

明治19年10月勅令65号「尋常師範学校官制」第3条「教頭ハ教諭中ヨリ之ニ兼任し、学校長ノ監督ニ属シ、教務ヲ整理シ教室ノ秩序ヲ保持スルコトヲ掌ル」とあり、また昭和16年3月勅令第148号「国民学校令」で「学校長及び教頭ハ其ノ学校の訓導ノ中ヨリ之ヲ補ス、教頭ハ学校長ヲ補佐シ校務ヲ掌ル」と定めるなど、戦前は教頭職制度があった。その当時の教育制度は5年制の中学校・高等女学校・工業学校・商業学校・農業学校などに分かれていた。戦前の教頭会は関係の深い学校同志が校務連絡と親睦のため集まる程度の会はあったが教頭会としての組織化されたものはなかった。

戦後の昭和22年3月法律第26号「学校教育法」公布により、教頭職は法制的になくなったので、校長の命ずる校務分掌の一部とし名ばかりの教頭が存在していた。昭和30年都教委は、「校務主任」の制度を設け、教頭全員に「校務主任」の辞令を渡し、12月1日付で任命した。このようなことから普・工・商・農などの教頭会は規約をもうけるなどし、各々「校務主任会」を組織、やや教頭会的活動を行うようになった。その後昭和38年に全都の高校で組織する本会を創設した。本会が創立する以前の教頭会の歴史は次の通りである。(昭和49年2月内山調)

東教会（普通科）

昭和12年創立。昭和38年本会の創立により、昭和38年発展的解散

昭和12年春、府立第7高女に府立高女全校の教頭10名が集り親睦と校務連絡を目的に会を創設した（故松岡忍岡高女教頭の日記より）。昭和18年に都政がしかれ、府立高女も市立高女も全部都立高女と呼ばれるようになった。そのとき全都立高等女学校25校が忍岡高女に集り総会を開き組織を強化した。その後、戦争のため会は開けなかったが、昭和24年より開けるようになり、昭和30年頃より男子系高校の入会も増加し会は発展してきた。昭和32年に都立高校校務主任会が発足したがこれと並行して会は存続、昭和38年都立高校教頭会が創立したので昭和39年1月23日、南多摩高校で最後の総会を開き発展的解散した。

年度	昭12年	昭13年	昭18年	昭19年	昭24年	昭25年
会員数	10校	10校	25校	25校	31校	35校
会費	——	——	——	戦争のため昭和24年まで中断する	300円	300円
当番幹事校と会場	府立第7高女	昭14～17年 不明	忍岡		駒場、富士、忍岡、足立	竹台、井草、千歳、鷲宮

昭26年	昭27年	昭28年	昭29年	昭30年	昭31年	昭32年
35校	35校	35校	38校	40校	42校	46校
300円	300円	300円	300円	300円	300円	300円
八潮、市谷、紅葉川、明正	京橋、本所、台東、三田	不明	不明	豊島、玉川、桜町、深川	雪谷、武蔵、北野、大崎	南多摩、目黒、神代、江北

昭33年	昭34年	昭35年	昭36年	昭37年	昭38年	昭39年
48校	50校	50校	60校	63校	63校	63校
300円	300円	300円	300円	300円	300円	300円
千歳丘、一橋、足立、荻窪	白鷗、南多摩、富士森、府中	竹早、本所、広尾、青山	志村、板橋北多摩	不明	不明	不明

会合は毎年5回を目標にし、4回は学校、1回は外部の会場を選んだ。

（昭和49年2月神藤調、昭和50年神藤訂正）

東京都立高等学校校務主任会（普通科）

昭和32年創立。昭和38年本会創立全校入会、その後普通科高校教頭会支部となる。

昭和32年1月17日駒場高校で普通科高校が集り、各学区から幹事を出し、その中から代表幹事をきめる組織で創立総会を行った。目的は親睦と校務連絡が主なもので、第1回の総会と年2〜3回の幹事会を行う程度の会であった。組織は普通科高校全体であるが、大島・三宅・八丈の島関係は未加入、昭和35年府中高、昭和38年は深沢・小岩・小平・南・大山の5校新設入会とし、86校となる。

年度	昭32年	昭33年	昭34年	昭35年	昭36年	昭37年
会員数	76校	76校	76校	77校	77校	77校
会費	500円	500円	500円	500円	500円	500円
代表幹事	鈴木　菊雄（駒　場）	森本久次郎（日比谷）	岸田　文男（　西　）	渡辺　元（板　橋）	細沼　清（白　鷗）	田代清三郎（両　国）

（昭和49年2月神藤、内山調、昭和50年2月神藤、内山訂正）

東京都立工業高等学校教頭会

昭和25年創立。昭和38年本会創立全校入会、その後工業高校教頭会支部となる。

はじめは校長会主催の教頭をねぎらう親睦の会であったが、昭和31年に校務主任会と名称を変え、会則を設けるなどし、会長と幹事3名で運営するようになり、昭和38年には幹事長と副幹事長、幹事4名に変更され現在に至っている。組織は工業高校全校であるが、昭和31年共同実習所入会、昭和34年一橋工と羽田工が合併、同年烏山工新設、昭和38年は練馬・荒川・足立・葛西・田無・多摩・砧・杉並・町田・府中の新設10校、同年航空工廃止し、共同実習所を含めて29校となる。

年度	昭25年	昭26年	昭27年	昭28年	昭29年	昭30年	昭31年	昭32年	昭33年	昭34年
会員数	19校	19校	19校	19校	19校	19校	20校	20校	20校	20校
会費	会場校の負担から必要に応じ徴収するようになる						500円	500円	500円	500円
備考	校長会主催の会から教頭会に発展						都立工業高校校務主任会			

昭35年	昭36年	昭37年
20校	20校	20校
500円	500円	500円
都立工業高校校務主任会		

（昭和19年2月内山・遊佐調、昭和50年2月内山・元田訂正）

東京都立商業高等学校教頭会

創立は昭和26年頃らしい。昭和38年本会創立時に全校入会。その後商業高校教頭会支部となる。

はじめのうちは記録がないので不明であるが、昭和32年に組織を強化し、幹事長制度を設け、年に数回の会合を行っている。

その後、昭和38年に四谷・赤羽の2校新設入会し、25校となった。

年度	昭32年	昭33年	昭34年	昭35年	昭36年	昭37年
会員数	不明					25校
会費	不明					1,000円
備考	都立商業高校校務主任会					

（昭和49年2月八田調）

東京都立農業高等学校教頭会

昭和24年創立。昭和38年本会創立時に全校入会。その後農業高校教頭会支部となる。

はじめは記録がないので不明であるが、教頭の集まる会はあった。昭和30年に会則を設け、持ち廻り幹事で運営していたが、昭和36年に幹事を2名に強化し、毎年6回の会合を行っている。会員数は昭和32年に農産高が独立、昭和36年大島・三宅・八丈の農業科3校入会、昭和40年瑞穂農芸高独立し、9校となる。

年　度	昭24年	昭25年	昭26年	昭27年	昭28年	昭29年	昭30年	昭31年	昭32年	昭33年
会員数	4校	4校	4校	4校	4校	4校	4校	4校	4校	5校
会　費	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	500円	500円	500円	500円
備　考	教頭の集まる会はあったが細部不明									

昭34年	昭35年	昭36年	昭37年
5校	5校	8校	8校
500円	500円	500円	500円
都立農業高校校務主任会			

（昭和49年2月池田調、昭和50年2月山本訂正）

2. 会員数と会費の変遷

本会創立から現在まで、学校数・会員数・会費・新設校のあゆみを次の表にまとめた。

＜変遷表について＞

1．本会が設立した昭和38年度は新設17校と廃校1校があるので125校から140校となった。

2．昭和38年～昭和45年は普＋商・普＋農・本校＋分校・共同実習所など各々1校として入会、会員数は実際の学校数より多い。

3．昭和38年大森高馬込分校（定）は南高として新設、同年代々木高（定）は3部制となり入会。

4．昭和40年浅草高（定）は東高（全）に変り新設、昭和46年大島高差木地分校は大島南校に変り新設。

5．昭和44年秋川高、昭和48年大島南高に舎監長制度が新設され入会、昭和48年だけ世田谷工高は2人教頭であった。　（昭和52年2月神藤・内山調、その後追加）

〔会員数と会費の一覧表〕　（昭和38年以降）

年度	学校数	会員数（人） 普通	工業	商業	農業	計	年会費（円） 都費	私費	個人	計	新設高校名 ※ 募集停止校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
昭和38年	140校	86人	28人	25人	8人	148人	—	500円	—	500円	深沢　小岩　小平　南 大　山　四谷商　赤羽商 荒川工　杉並工　砧　工 練馬工　足立工　葛西工 田無工　多摩工　町田工 府中工　（計17校）	杉並共実　北多摩　三宅　代々木 五日市　八丈　赤坂　大島 （計8）
〃39	141	88	30	25	8	151	—	500	—	500	練　馬　（計1校）	杉並共実　赤　坂　浅草(定)　八丈 江東共実　北多摩　大　島 代々木　五日市　三　宅（計10）
〃40	144	90	30	24	9	153	—	500	—	500	秋　川　久留米　東 瑞穂農芸　（計4校）	杉並共実　赤　坂　大　島 江東共実　北多摩　三　宅 代々木　五日市　八　丈（計9）
〃41	145	91	30	20	6	147	—	500	—	500	日　野　（計1校）	杉並共実　江東共実　（計2）

年度	学校数	会員数（人） 普通	工業	商業	農業	計	年会費（円） 都費	私費	個人	計	新設高校名 ※ 募集停止校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
昭和42年	146	92	29	20	6	147	—	1,000	—	1,000	羽田 （計1校）	杉並共実 （計1）
〃 43	147	94	29	20	6	149	—	1,000	—	1,000	東村山 （計1校）	秋川（舎監長） 杉並共実（計2）
〃 44	149	97	28	20	6	151	—	1,000	—	1,000	国分寺 小笠原 （計2校）	秋川（舎監長） 差木地分校（大島） （計2）
〃 45	149	97	28	20	6	151	1,000	—	—	1,000	—— （な し）	前年に同じ （計2）
〃 46	155	102	28	20	6	156	1,000	—	—	1,000	淵江 福生 新島 東大和 忠生 大島南 （計6校）	秋川（舎監長） （計1）
〃 47	161	108	28	20	6	162	1,000	—	—	1,000	片倉 府中東 神津 永山 保谷 芸術 （計6校）	前年に同じ （計1）
〃 48	164	112	29	20	6	167	9,000	—	—	9,000	葛西南 狛江 清瀬 （計3校）	秋川（舎監長） 大島南（舎監長） 世田谷工（2人制） （計3）
〃 49	168	116	28	20	6	170	9,000	—	—	9,000	高島 足立西 調布北 久留米西 （計4校）	秋川（舎監長） 大島南（舎監長） （計2）
〃 50	172	120	28	20	6	174	9,000	—	2,000	11,000	水元 府中西 武蔵村山 野津田 （計4校）	前年に同じ （計2）
〃 51	177	125	28	20	6	179	9,000	—	5,000	14,000	光丘 八王子東 青梅東 足立東 武蔵村山東 （計5校）	前年に同じ （計2）
〃 52	184	132	28	20	6	186	9,000	—	5,000	14,000	青井 調布南 稲城 羽村 篠崎 小平西 秋留台 （計7校）	前年に同じ （計2）
〃 53	191	139	28	20	6	193	9,000	—	6,000	15,000	蒲田 八王子北 昭島 大泉北 成瀬 城東 清瀬東 （計7校）	前年に同じ （計2）
〃 54	196	144	28	20	6	198	9,000	—	6,000	15,000	永福 足立新田 南野 砂川 武蔵野北 （計5校）	前年に同じ （計2）
〃 55	202	150	28	20	6	204	9,000	—	6,000	15,000	大森東 大泉学園 館 小川 日野台 小金井北 （計6校）	前年に同じ （計2）
〃 56	202	152	28	20	6	206	9,000	—	6,000	15,000	田柄 松ヶ谷 （計2校）	前年に同じ （計2）
〃 57	204	152	28	20	6	206	9,000	—	6,000	15,000	—— （な し）	前年に同じ （計2）
〃 58	207	155	28	20	6	209	9,000	—	6,000	15,000	小平南 田無 山崎 （計3校）	前年に同じ （計2）
〃 59	209	157	28	20	6	211	9,000	—	6,000	15,000	東大和南 東村山西 （計2校）	前年に同じ （計2）
〃 60	210	159	28	20	6	213	11,300	—	6,000	15,000	南平（計1校）	秋川（舎監長）大島南（舎監長） 紅葉川中央校舎 （計3）
〃 61	210	160	28	20	6	214	11,300	—	6,000	17,300	—— （な し）	秋川（舎監長）大島南（舎監長） 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 （計4）

年度	学校数	会員数（人）					年会費（円）				新設高校名 ※ 募集停止・閉課程校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
		普通	工業	商業	農業	計	都費	私費	個人	計		
昭和62年	210	160	28	20	6	214	11,300	—	6,000	17,300	―― （なし）	前年に同じ （計4）
〃 63	211	162	28	20	6	216	11,300	—	8,000	19,300	八王子高陵 （計1校））	秋川（舎監長）大島南（舎監長） 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 国際（開設） （計5）
平成元	212	162	28	20	6	216	11,300	—	8,000	19,300	国際 ※赤城台 （計1校）	秋川（舎監長）大島南（舎監長） 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 （計4）
〃 2	213	163	28	21	6	218	11,300	—	8,000	19,300	単位制 （計1校）	秋川（舎監長）大島南（舎監長） 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 単位制（普・商） （計5）
〃 3	212	162	28	21	6	217	11,300	—	8,000	19,300	単位制を新宿山吹と改称	秋川（舎監長）大島南（舎監長） 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 新宿山吹（普・商） （計5）
〃 4	212	160	28	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	※紅葉川中央校舎 ○赤坂（普→商） ○五日市（普→商）	前年に同じ （計5）
〃 5	212	160	29	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	―― （なし）	前年に同じ （計5）
〃 6	213	160	28	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	（公立学校開設）	秋川（舎監長）大島南（舎監長） 隅田川堤校舎、新宿山吹（普・商） （計4）
〃 7	214	161	28	23	6	218	11,300	—	10,000	21,300	※北京橋、京橋南 飛鳥開設	前年に同じ （計4）
〃 8	214	161	28	23	6	218	11,300	—	10,000	21,300	晴海総合高校開設 （計1校）	前年に同じ （計4）
〃 9	211	159	28	22	6	215	11,300	—	10,000	21,300	―― （なし）	前年に同じ （計4）
〃 10	211	159	28	22	6	215	11,300	—	10,000	21,300	※江東工	前年に同じ （計4）
〃 11	211	158	28	22	6	214	11,300	—	10,000	21,300	――	新宿山吹2名から1名となる
〃 12	212	167	33	21	6	230	11,300	—	10,000	21,300	桐ヶ丘南工開設 ※羽田、城北、秋川	教頭複数配置校大幅増 （計18）
〃 13	208	169	40	21	6	239	11,300	—	10,000	21,300	※明正、墨田川堤、 桜水商、牛込商、 清瀬東（英語コース） ○町田工（機械・電気情報・ 工業化学→総合情報） 墨田工（自動車科新設）	教頭複数配置校31校 （計31）
〃 14	207	170	39	20	6	238	11,300	—	10,000	21,300	つばさ総合 ※城南、大森東、永福、 大泉北、館、武蔵村山東、 稲城、八王子高陵、 池袋商、港工業、 大泉学園（国際教養コース）	同上 （計31）
〃 15	207	173	37	19	9	238	11,300	—	10,000	21,300	芦花 ※南、大泉学園、南野 新宿（進学重視型単位制）	同上 （計31）
〃 16	200	167	37	18	9	231	0	—	19,000	19,000	六郷工科、千早、大江戸 上水、杉並総合 ※忍岡、北野、青梅東 砂川、本所工業	同上 （計31）

年度	学校数	会員数（人）						年会費（円）				新設高校名 ※ 募集停止 ▲ 閉校名 △ 閉課程校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
		普通	工業	商業	農業	その他	計	都費	私費	個人	計		
平成17	194	165	34	18	8		225	0	—	19,000	19,000	一橋、六本木、美原 大泉桜、上野（一橋分校） 翔陽、砂川、若葉総合	副校長複数配置校 （計 26）
〃18	212	177	32	17	8		234	0	—	19,000	19,000	桜修館中等、小石川中等 両国附属中学、浅草、 青梅総合、総合工科 ※水元、深川商業、四谷商業 第二商業（全日）	同　上 （計 29）
〃19	191	167	26	12	7		214	0	—	19,000	19,000	板橋有徳、橘 八王子桑志、葛飾総合 東久留米総合 ※九段（普通科）、玉川 忠生（普通科）、第二商業（定） 王子工業（工業科） 赤坂（商業科） 市ヶ谷商業（商業科）	同　上 （計 23）
〃20	201	138	23	12	7	29	209	0	—	19,000	19,000	世田谷総合 ※小金井工業（工業科） ▲九段、忠生、王子工業 赤坂、市ヶ谷商業 農林、世田谷工業 王子工業、台東商業	同　上 （計 17）

「その他」には総合学科、産業、芸術、国際、中等教育学校等を含む。

3. 本会のあゆみ

昭和32年度 12月：文部省は「学校教育法施行規則」を改正、第22条に教頭職を位置づけた。

昭和35年度 4月：都教委は「東京都公立学校の管理運営に関する規則」に教頭職を設け、「校務主任」を「教頭」に改め、辞令を渡した。

4月：文部省は教頭を「管理または監督の地位にある管理職手当支給対象」に入れた。都教委は教頭を管理職と位置づけ、はじめて管理職手当 7%を支給した。

昭和37年度 38年1月：全国高等学校教頭会は、都立両国高校で創立総会を開催した。

昭和38年度 6月20日：都立高校校務主任会(普通科教頭会)と各職業高校校務主任会(各職業科教頭会)が合同し、「東京都立高等学校教頭会」が誕生した。当時の会員数は140校148人であった。

昭和39年度 40年1月：「ＩＬＯ78号条約批准にともなう国内法の改正」により「人事院規則17-0」を改正した。都教委は管理職手当を8%に増額した。

昭和41年度 7月9日：文部省は教頭を正式に管理職の範囲に指定した。

昭和42年度 6月：都教委は教頭の管理職手当を10%に増額した。

昭和45年度 ：都教委は教頭の管理職手当を10%から15%に増額、教頭会に教育研究団体会費（都費）1校あたり 1,000円の割で補助された。本会はこの年「全国高等学校教頭会」に正式加入し、本会会則の一部改正により、毎年交代制の代表幹事を、継続できる会長制に改め、組織を強化した。この年から東京都立高等学校教頭研究協議会が箱根三昧荘にて1泊2日で始まった。翌年からは2泊3日の研究協議会になった。

昭和46年度 5月：「教育職員の給与等に関する特別措置法」の公布があり、教諭に4%の教職調整額が支給された。

47年1月：都教委は教頭が教諭なので、管理職手当を15%から13%に減額した。

昭和47年度 「教頭職の法制化」を望む世論の高まりと共に教頭会意識も強まり、「親睦会的体質」から「活動できる体質」へ改善に着手した。役員組織、学区別・学科別支部教頭会、研究部会組織、継続活動のできる独立した事務局、これらの運営に必要な資金等を調査研究し、翌年度から3年計画で実施することにした。

昭和48年度 会則を変更し、活動のための細則を新設した。また、全国高等学校教頭会と協力し事務所を新設した。本会は新役員組織と活動組織を新しくスタートさせ、本会の基礎となる大改革に着手した。都教委のご理解により、教育研究団体会費（都費）を1校 1,000円から9,000円に増額された。そのお蔭で研究集録・会報の増刊号が刊行できた。

49年2月25日：法律第2号「教員の人材確保に関する特別措置法」の公布があり、教頭職の法制化を望む世論の高まりと共に教頭会の活動に期待をよせる声が高まった。本会は全国高等学校教頭会に協力し、教頭職法制化と教頭職1等級格付に全力をあげ活動した。

昭和49年度 6月1日：法律第70号「学校教育法の一部を改正する法律」の公布により、教頭職が法制化されたので、都教委は10月1日教頭に「教頭職」を命ずる辞令伝達式を挙行した。

50年3月31日：法律第9号「一般職の職員の給与に関する法律の一部を改正する法律」が公布される。(昭和49年神藤、内山調)

昭和50年度 4月1日：都教委は教頭職の75%を1等級に昇格発令した。これで「3年計画」の3年目、永年の念願が法律上完成した。本会の活動のため、会則の一部改正と各種内規を設け、活動資金1名5,000円（個人負担）の特別会費を10月に臨時総会を開き決定した。「活動できる体質」改善3年計画は、全員一致協力のもとでめでたく完了した。

12月：文部省は主任制度化のための学校教育法施行規則の改訂を公布した。

昭和51年度　：石油ショックで、東京都立高等学校教頭研究協議会は宿泊研修を中止し、2日の日程で、都内実施となった。

昭和53年度　6月8日：総会で、特別会費5,000円から6,000円に改正された。

昭和55年度　5月22日：法律第57号改正「教頭定数法」が施行され、教諭定数内で扱われていた教頭は、正式定数と定められた。その給与は地方交付税制度により、保証が受けられる。

5月：事務局は渋谷区宇田川のアパートから、同区道玄坂の島田ビル4階へ移転した。

7月15日：東京都条例第71号改正給与条例の公布と、東京都教育委員会規則第29条「昇給等に関する規則」の改正により、本年4月1日付で、校長は特1等級、教頭は1等級に全員格付けされた。これは昭和52年12月21日「給与法の一部改正」の公布によるものである。

昭和57年度　：創立20周年を迎え、3月4日「創立20周年記念号」を発行した。

昭和59年度　8月：臨時教育審議会設置法が公布された。

昭和60年度　6月13日：総会で、教育研究団体会費（都費）1校あたり9,000円から11,300円へ改正され、通常会費が増額された。そのお陰で全日制・定時制合同の東京都立高等学校教頭研究協議会「研究協議会報告」創刊号が刊行できた。

昭和62年度　：臨時教育審議会第3次答申（4月）と最終答申（8月）があった。これらに呼応して、研究部が中心となり、新しい時代の高校教育の改善と充実に務めていくことにした。

昭和63年度　5月：文部省は、初任者研修法を公布した。

6月9日：総会で、特別会費6,000円から8,000円に改正された。

平成2年度　9月：都教委は、校長・教頭・指導主事の任用制度を改正した。

3月1日：文部省は校長・教頭・永年勤続教諭に、期末・勤勉手当の傾斜配分加算率を通知した。

平成3年度　12月：文部省は生徒数急減のため、学級定員を45～40名に学級編成基準を弾力化した。

平成4年度　6月23日：本会の30周年記念式を挙行し、総会で、特別会費8,000円から10,000円に改正された。

9月：学校5日制を目指し、月1回土曜日が休業日になる。これに対応するよう総務部が中心となり、各校の校内態勢整備に務めてきた。

（平成4年　赤津改訂）

平成6年度　4月：普通科等の学級編成が1学級40人となり、入学選抜制度が、グループ選抜から各学校単独選抜となった。この制度は平成6年度の入学者から適用された。また、今年度から、高等学校学習指導要領が改定され、各校新教育課程の実施が始まった。本教頭会では、平成元年度から研究部が中心になって、これに伴う研究を継続してきた。

6月：平成8年7月に行われる全国大会（東京大会）を主管するため、本会は企画委員会を発足させた。

12月：都教委は、全都立学校の校長及び教頭に、職務に関する目標と成果及び職務に関する希望を自己申告させ、それらを参考して今年12月の期末手当から、勤勉手当へ成績率を導入し経過措置として人事管理の適正を図った。

平成7年度　5月：全国大会（東京大会）準備委員会が総務部を母体にして結成され、11月に団結式が行われた。

6月：都教委は教頭問題等検討委員会を設立し、教頭の職務・任用制度・表彰制度・再雇用制度等について検討を始めた。本会からは川島副会長がその担当となった。　（平成7年　奥井追加）

平成8年度　4月・5月：「補欠募集要項」、「全日制間の転学」について改正が行われた。

7月～11月：「教頭問題等検討委員会報告」（平成8年3月）、を受けて「校長及び教頭の任用に関する基準及び東京都教育委員会表彰実施要項の一部改正」（7月）、「教頭職務の明確化のための規定整備について」（10月）、「校長・教頭

業務実態調査について」（11月）、「東京都立学校事案決定規程の制定」（1月）等が相次いで出された。

7月23･24日：全国高等学校教頭会総会・研究協議大会が本会の主管で開催された。

10月：本会の研究部活動活性化に向けての「アンケート調査」が行われた。

1月25日：「これからの都立高校の在り方」についての答申が公表された。

平成9年度　6月：第15期中央教育審議会が「21世紀を展開したわが国の教育の在り方について」、審議のまとめを答申した。

7月：教育職員養成審議会第1次答申が提出された。

8月：教育改革プログラムの主な改訂点が公表された。

9月：都立高校の予算について、検討報告書（案）が提出された。

10月：都立高校改革推進計画の概要が公表され、向う10年間の長期計画が具体化されることになった。

本年度の特徴的な活動として、都教委（指導部）との協議（2回）、定通・事務長との話し合いが持たれた。

3月：「都立学校あり方検討委員会報告書」が答申された。

平成10年度　6月：学校教育法の一部改正により、公立の中・高一貫校の設置が可能になった。都立高校では都立大学付属高校、三宅高校が発足する予定である。

7月：「東京都公立学校の管理運営に関する規則」の一部改正が行われた。

12月：東京都教員の「人事考課に関する研究会」より中間まとめが公表された。

3月：「高等学校学習指導要領」が公布された。

教頭会は都教委と本部役員会との連絡会を2回開催し、諸課題について情報交換を行い、全教頭に周知徹底に努めた。

平成11年度　10月：都立高校改革・二次実施計画により、全日制23校、定時制17校が統廃合または再編成計画の対象として発表された。

12月：教員人事考課制度につき検討委員会報告が出され、平成12年度より実施されることとなった。

平成12年度　4月：教頭複数配置校が複数学科、工業・農業学科、単位制その他の高校を中心に15校増加された。従来からの舎監・分校を含め計18名となった。

同月：教員人事考課制度発足。

9月：全定教頭研究協議会が教育庁主催から全定教頭会の共催に変更された。教育予算削減等によるものであり、この会の意義については認識に変化なく引き続き教育庁の指導・支援を得ながら運営すべきことが確認された。

平成13年度　4月：教頭複数配置校が31校になる。都教委主催の教頭連絡会が発足。教頭会への出席の服務の取り扱いが、職免へと変更。教頭の管理職手当が15%になる。

6月：学校運営連絡協議会が全都で実施される。

10月：学校運営組織に「主幹」の設置が決定され、実施は平成15年度からとなる。

平成14年度　4月：管理職降格制度の導入。

10月：都立学校改革推進計画、新たな実施計画の策定（15－18年）

11月：主幹選考の実施。

12月：自律経営推進予算の導入。

1月：入試学区の廃止。

平成15年度　4月：学校経営計画の導入。

11月：毎年11月第1土曜日を「東京都教育の日」とする。

11月：都からの分担金一挙全廃さる。

11月：事務局は渋谷区道玄坂の島田ビル4階から、文京区湯島のナーベルお茶の水2階へ移転した。

1月：「東京都教育ビジョン」中間まとめ発表。

3月：16年度より教頭の名称を副校長と変更。

平成16年度　4月：補助金なしの団体となる。（会費年1人19,000円）

6月：団体名を東京都立高等学校副校長会とする。

副校長任用一次筆記試験実施最終年度。

平成17年度　4月：副校長複数配置校が26校となる。

副校長研究協議会が9月から8月に変更。

平成18年度　4月：副校長複数配置校が29校となる。

7月：26～28日　第45回全国高等学校教頭会・研究協議大会が本会の主管で開催された。

副校長研究協議会が日程の関係で8月から9月に変更。

平成19年度　4月：副校長複数配置校23校となる。

8月：副校長研究協議会が日程の関係で9月から8月に変更。

管理職再雇用・再任用制度改革される。

平成20年度　9月：学校経営における副高長の役割の明確化（検討委員会最終報告）

12月：主任教諭制度の設置（平成21年度より）

4. 本会のあゆみ一覧

本会運営は、昭和38年創立当初は幹事長制度、45年から会長制度、48年度には役員組織と部会組織の規定を設け、現在に至っている。

年　度	幹　事　長	総　　会	刊　　行　　物
昭和38	内山（立　川）	創立総会、白鷗（－）	会員名簿（13P）
〃 39	中馬（九　段）	総会、日比谷（－）	〃　（13P）
〃 40	志村（玉　川）	〃　白鷗（－）	〃　（13P）私費軽減（10P）
〃 41	小笹（富　士）	〃　教育会館（－）	〃　（13P）
〃 42	鈴木（向　丘）	〃　私学会館（80名）	〃　（13P）年間行事状況（4P）
〃 43	岸野（足　立）	〃　精養軒（90名）	〃　（13P）会報（4P）
〃 44	池田（小松川）	〃　〃　（90名）	〃　（13P）〃　（4P）
〃 45	青木（北　園）	〃　〃　（90名）	〃　（13P）調査（5P） 高校生徒指導研究協議会発表要旨（都教委編）不明 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）不明
		全国高等学校教頭会に東京都全員入会	
〃 46	青木（北　園）	総会　出版クラブ（90名）	会員名簿（13P） 高校生徒指導研究協議会発表要旨（都教委編）33P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）40P

年度	○会長 副会長	事務局長 次長	総会 総務部会	研究部 部員数（部長名）	刊行物
昭和47	○神藤（桜町） 波多野（江東商）	なし	総会、青山会館（100名） 臨時総会、私学会館（80名） 常任幹事会　5回 体質改善計画立案と実施準備	なし	会員名簿　15P 教頭勤務実態　10P 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編）　49P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）　40P
〃 48	○若林（東） 波多野（江東商） 内山（鳥山工）	○神藤	総会、青山会館（110名） 臨時総会（90名） 総務部会14名　5回 「体質改善3年計画」初年度着手 全国教頭会事務局内に本会事務局を設置	管理研　25名（安部） 高校研　24名（西村） 生徒研　23名（古賀）	会員名簿　16P 会報創刊号　40P 研究集録創刊号　43P 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編）　67P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）　不明
〃 49	○内山（鳥山工） 波多野（江東商） 安部（北多摩）	○神藤	総会、青山会館（100名） 総務部会18名　6回 全国大会運営委員会（22名） 全国大会（九段会館・都市センター）	管理研　28名（吉野） 高校研　24名（長里） 生徒研　22名（古賀） 文部大臣特別出席	会員名簿　18P 会報第2号　58P 教頭職に関する調査・研究　25P 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編）　32P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）　48P 出席520名

年度	○会長 副会長	事務局長 次長	総会 総務部会	研究部 部員数（部長名）	刊行物
昭和50	○内山（鳥山工） 千野（井草） 石坂（小石川）	○神藤	総会、出版クラブ（130名） 臨時総会、〃（85名） 総務部会19名　5回 教頭会「体質改善3年計画」完了	管理研　28名（吉野） 高校研　26名（長里） 生徒研　22名（小林） 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 高校教頭研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿　18P 会報第3号　49P 研究集録第2号　72P 28P 44P
〃51	○千野（井草） 西村（千歳） 吉野（西）	○神藤 内山	総会、青山会館（125名） 総務部会29名　5回	管理研　29名（金井） 高校研　30名（長里） 生徒研　37名（小林） 高校教頭研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿　19P 会報第4号　69P 研究集録第3号　75P 校長選考方法調査　5P 54P
〃52	○千野（井草） 梅本（北園） 伊藤（忍岡）	○神藤 内山	総会、青山会館（135名） 総務部会26名　5回 全国大会運営委員会（79名） 全国大会（国立教育会館・プレスセンター・サンケイ会館）	管理研　35名（金井） 高校研　39名（山崎） 生徒研　37名（諏訪部） 高校教頭研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿　24P 会報第5号　75P 教頭研究協議会資料(研究集録第4号兼全国大会資料)　72P 44P 出席736名
〃53	○青木（南） 乃方（目黒） 大畑（広尾）	○神藤 内山	総会、市ヶ谷会館（136名） 総務部会29名　6回	管理研　48名（杉江） 高校研　51名（浅川） 生徒研　46名（吉田） 高校教頭研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿　24P 会報第6号　81P 研究集録第5号　33P 46P
〃54	○青木（南） 吉田（志村） 安西（農林）	○神藤 内山	総会、市ヶ谷会館（142名） 総務部会29名　5回	管理研　50名（高橋） 高校研　73名（佐藤） 生徒研　52名（大滝） 高校教頭研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿　26P 会報第7号　83P 研究集録第6号　34P 63P
〃55	○川島（四谷南） 鮎沢（戸山） 大滝（葛西南）	神藤 代 ○内山 古賀	総会、市ヶ谷会館（161名） 総務部会30名　5回 全国大会準備委員会（6名）	管理研　59名（高橋） 高校研　78名（田辺） 生徒研　54名（松井） 高校教頭研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿　26P 会報第8号　82P 研究集録第7号　42P 49P
〃56	○鮎沢（戸山） 赤津（大森） 桑原（板橋）	○内山 神藤 古賀	総会、市ヶ谷会館（175名） 総務部会32名　5回 全国大会運営委員会（69名） 全国大会（国立教育会館・サンケイ会館・農協ホール）	管理研　65名（山田） 高校研　72名（鈴木） 生徒研　66名（白井） 高校教頭研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿　28P 会報第9号　88P 研究集録（全国大会資料兼） 42P 出席973名
〃57	○赤津（大森） 牛込（鷺宮） 岡田（国立）	○内山 神藤 古賀	総会、市ヶ谷会館（176名） 総務部会36名　4回	管理研　65名（山田） 高校研　70名（鈴木） 生徒研　69名（白井） 創立20周年臨時号 （教頭の職務に関する研究特集） 高校教頭研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿　26P 会報第10号　74P 研究集録第8号　66P 研究集録第9号　138P 53P

年度	○会長 副会長	事務局長 次長	総会 総務部会	研究部 部員数（部長名）	刊行物
昭和58	○大森（田園調布） 剣持（杉並） 鈴木（三商）	○内山 古賀	総会、市ヶ谷会館（174名） 総務部会33名　4回	管理研　66名（高橋） 高校研　71名（大山） 生徒研　72名（永井）	会員名簿　26P 会報第11号　78P 研究集録第10号　66P
〃59	○高橋（明正） 飯島（蒲田） 村上（練馬工）	○内山 古賀	総会、市ヶ谷会館（154名） 総務部会34名　4回 全国大会調査委員会8名	管理研　66名（高橋） 高校研　75名（篠田） 生徒研　70名（山本）	会員名簿　26P 会報第12号　81P 研究集録第11号　67P
〃60	○山本（駒場） 杉内（江北） 清水（国分寺）	○内山 古賀	総会、市ヶ谷会館（164名） 総務部会34名　4回 全国大会準備委員会34名　4回	管理研　68名（高橋） 高校研　78名（篠田） 生徒研　67名（岡本）	会員名簿　26P 会報第13号　83P 研究集録第12号　77P 研究協議会報告創刊号　54P
〃61	○山本（駒場） 杉内（江北） 小宮（富士森）	○内山 古賀 赤津	総会、市ヶ谷会館（177名） 総務部会35名　4回 全国大会運営委員会64名　4回 全国大会（国立教育会館、石垣ホール、ニッショウホール）	管理研　67名（白井） 高校研　72名（篠田） 生徒研　75名（白田）	会員名簿　26P 会報第14号　78P 研究集録第13号　74P 研究協議会報告第2号　59P 出席1,101名
〃62	○中村（竹早） 白川（新宿） 廣瀬（保谷）	○古賀 赤津	総会、グランドヒル市ヶ谷（161名） 総務部会34名　4回	管理研　84名（高橋） 高校研　61名（田口） 生徒研　69名（栗田）	会員名簿　26P 会報第15号　74P 研究集録第14号　71P 研究協議会報告第3号　63P
〃63	○白川（新宿） 廣瀬（保谷） 中村(新)（千歳丘）	○古賀 赤津	総会、グランドヒル市ヶ谷（158名） 総務部会34名　4回	管理研　93名（鈴木） 高校研　61名（田口） 生徒研　62名（栗田）	会員名簿　26P 会報第16号　71P 研究集録第15号　69P 研究協議会報告第4号　71P
平成元	○崎田（狛江） 奥井（豊島） 小峰（練馬）	○古賀 赤津	総会、グランドヒル市ヶ谷（160名） 総務部会34名　4回	管理研　86名（木村） 高校研　64名（澤井） 生徒研　68名（福島）	会員名簿　27P 会報第17号　73P 研究集録第16号　63P 研究協議会報告第5号　68P
〃2	○奥井（豊島） 木村（国分寺） 和田（光丘）	○古賀 赤津	総会、グランドヒル市ヶ谷（151名） 総務部会34名　4回	管理研　85名（井上） 高校研　65名（進藤） 生徒研　68名（延藤）	会員名簿　27P 会報第18号　74P 研究集録第17号　68P 研究協議会報告第6号　73P
〃3	○木村（国分寺） 和田（光丘） 嶋澤（芝商）	○赤津 奥井	総会、青山会館（140名） 総務部会33名　4回	管理研　86名（野中） 高校研　64名（大室） 生徒研　67名（原口）	会員名簿　27P 会報第19号　73P 研究集録第18号　68P 研究協議会報告第7号　69P
〃4	○高橋（小平南） 栗林（大泉学園） 井上（瑞穂農芸）	○赤津 奥井	総会、青山会館（174名） 創立30周年記念式典・祝賀会 青山会館（120名） 総務部会34名　4回	管理研　81名（浦野） 高校研　70名（大室） 生徒研　66名（結城） 創立30周年記念誌 編集委員会　（高橋）	会員名簿　27P 会報第20号　78P 研究集録第19号　66P 研究協議会報告第8号　55P 創立30周年記念誌　81P

年度	○会長 副会長	事務局長 次長	総会 総務部会	研究部 部員数（部長名）	刊行物
平成 5	○高橋（小平南） 浦野（保谷） 井上（瑞穂農芸）	○赤津 奥井	総会、星陵会館（142名） 総務部会35名　4回	管理研　77名（桑原） 高校研　71名（武田） 生徒研　69名（横田） 平成5年1月、奥井	会員名簿　27P 会報第21号　67P 研究集録第20号　64P 研究協議会報告第9号　54P 昭和45～58年度について追加
〃 6	○原口（南野） 川島（富士） 内海（墨田工）	○赤津 奥井	総会、星陵会館（132名） 総務部会34名　4回 全国大会企画委員会（12名）　2回	管理研　74名（牛島） 高校研　75名（武田） 生徒研　68名（横田）	会員名簿　27P 会報第22号　68P 研究集録第21号　64P 研究協議会報告第10号　53P
〃 7	○原口（南野） 川島（富士） 白鳥（芝商）	○赤津 奥井	総会、星陵会館（130名） 総務部会35名　4回 全国大会企画委員会（12名）　3回 全国大会準備委員会（全員）　5回	管理研　73名（新妻） 高校研　75名（森本） 生徒研　70名（横田）	会員名簿　27P 会報第23号　68P 研究集録第22号　64P 研究協議会報告第11号　58P
〃 8	○白鳥（芝商） 安盛（小松川） 中西（井草）	○奥井 坪井	総会、星陵会館（137名） 総務部会35名　4回 全国大会企画委員会（12名）　5回 全国大会運営委員会（65名）　5回 全国大会（国立教育会館、灘尾ホール、石垣ホール）	管理研　74名（新妻） 高校研　72名（森本） 生徒研　72名（廣見）	会員名簿　27P 会報第24号　82P 研究集録第23号　62P 研究協議会報告第12号　60P 出席1,260名
〃 9	○白鳥（芝商） 安盛（小松川） 中西（井草）	○奥井 坪井	総会、星陵会館（152名） 総務部会35名　4回 幹事会　65名　2回 全国大会（松江市）61名参加	管理研　64名（新妻） 高校研　74名（　東　） 生徒研　77名（小泉）	会員名簿　24P 会報第25号　60P 研究集録第24号　54P 研究協議会報告第13号　54P
〃 10	○東　（富士） 山口（府中） 松尾（農業）	○奥井 坪井	総会、星陵会館（144名） 総務部会35名　4回 幹事会　65名　2回 全国大会（秋田市）82名参加	管理研　70名（新妻） 高校研　73名（松尾川） 生徒研　72名（中村）	会員名簿　24P 会報第26号　58P 研究集録第25号　56P 研究協議会報告第14号　62P
〃 11	○鈴木（深川） 山口（府中） 齋藤（中野工）	○奥井 高橋	総会、星陵会館（169名） 総務部会35名　4回 幹事会　65名　2回 全国大会（高知市）83名参加	管理研　72名（新妻） 高校研　71名（小林） 生徒研　71名（大澤）	会員名簿　24P 会報第27号　60P 研究集録第26号　49P 研究協議会報告第15号　56P
〃 12	○山口（府中） 上林（武蔵野北） 相川（三商）	○奥井 高橋	総会、星陵会館（108名） 総務部会35名　4回 幹事会　65名　2回 全国大会（横浜市）85名参加	管理研　78名（白木） 高校研　73名（小林） 生徒研　79名（橋本）	会員名簿　24P 会報第28号　60P 研究集録第27号　48P 研究協議会報告第16号　55P
〃 13	○相川（三商） 矢嶋（足立） 渡邊（向島工）	○高橋 白鳥	総会、星陵会館（65名） 総務部会35名　4回 幹事会　65名　2回 全国大会（長崎市）83名参加	管理研　78名（平山） 高校研　79名（村井） 生徒研　82名（坂本）	会員名簿　24P 会報第29号　56P 研究集録第28号　48P 研究協議会報告第17号　55P
〃 14	○町田（保谷） 坂本（小平南） 合津（蔵前工）	○高橋 白鳥	総会、フロラシオン青山（59名） 創立40周年記念式典・祝賀会、フロラシオン青山（83名） 総務部会35名　4回 幹事会　65名　2回 全国大会（富山市）82名参加	管理研　72名（針馬） 高校研　80名（初見） 生徒研　84名（梶野）	会員名簿　24P 会報第30号　62P 研究集録第29号　49P 研究協議会報告第18号　55P 創立40周年記念誌　88P

年度	○会長 副会長	事務局長 次長	総会 総務部会	研究部 部員数（部長名）	刊行物
平成 15	○坂本（小平南） 錦織（稲城） 後藤（農業）	○高橋 白鳥	総会、星陵会館（28名） 総務部会35名　4回 幹事会　65名　2回 全国大会（岐阜市）68名参加	管理研　76名（伊藤） 高校研　77名（福嶋） 生徒研　83名（鹿目）	会員名簿　22P 会報第31号　63P 研究集録第30号　44P 研究協議会報告第19号　47P
〃 16	○錦織（府中） 和田（南野） 高田（台東商）	○白鳥	総会、公文書館（150名） 総務部会33名　5回 幹事会　48名　1回 全国大会（和歌山市）44名参加	管理研　88名（北林） 高校研　68名（根本） 生徒研　73名（山本）	会員名簿　22P 会報第32号　69P 研究集録第31号　34P 研究協議会報告第20号　51P
〃 17	○錦織（府中） 和田（保谷） 小島（蔵前工）	○白鳥 松野	総会、都教職員研修センター（約20名） 総務部会33名　5回 幹事会　48名　1回 全国大会（札幌市）37名参加	管理研　106名（古山） 高校研　68名（菊池） 生徒研　54名（長島）	副校長名簿　23P 会報第33号　88P 研究集録第32号　34P 研究協議会報告第21号　55P
〃 18	○和田（保谷） 小島（蔵前工） 玉井（志村）	○白鳥 綿田	総会、エミール（50名） 総務部会31名　5回 幹事会　38名　1回 全国大会（東京都大田区）233名参加	管理研　72名（本多） 高校研　78名（塚本） 生徒研　84名（都築）	副校長名簿　26P 会報第34号　101P 研究集録第33号　66P 研究協議会報告第22号　75P
〃 19	○和田（調布北） 玉井（竹台） 飯島（農産）	○白鳥 綿田	総会、都立忍岡高校（28名） 総務部会30名　6回 幹事会　29名　3回 全国大会（山口市）37名参加	管理研　67名（有馬） 高校研　71名（佐藤） 生徒研　76名（都築）	副校長名簿　27P 会報35号　101P 研究集録34号　48P 研究協議会報告23号　74P
〃 20	○錦織（武蔵） 玉井（竹台） （会長代行） 都築（雪谷） 高橋（市ヶ谷商）	○白鳥 町田	総会、家庭クラブ会館（47名） 総務部会　31名　年6回 常任幹事会　23名　年3回 幹事会　年1回 全国大会（郡山市）41名参加	管理研　68名（下條） 高校研　75名（志村） 生徒研　66名（熊谷）	副校長名簿　28P 会報36号　102P 研究集録35号　53P 研究協議会報告24号　58P

2．総務部会報告

会長代行　　玉　井　　篤
（東京都立竹台高等学校）

1．本部の活動（総務部会・幹事会の詳細は別記）

平成 20 年

4月 17 日（木）　都第１回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
5月 1 日（木）　都会計監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
5月 8 日（木）　都幹事会（家庭クラブ会館）
5月 9 日（金）　全国会計監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
5月 19 日（月）　第１回全国総務部会（アルカディア市ヶ谷）
6月 9 日（月）　全国地区研究協議会・第１回全国理事研究協議会（アルカディア市ヶ谷）
6月 20 日（金）　平成 20 年度　都総会（家庭クラブ会館）
7月 3 日（木）　都第２回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
7月 4 日（金）　第２回全国総務部会（アルカディア市ヶ谷）
7月 30 日（水）　第２回全国理事研究協議会・研究部会（福島県郡山市ホテルハマツ）
31 日（木）　全国高等学校教頭・副校長会総会・研究協議大会
（福島県郡山市ビッグパレット福島）
8月 1 日（金）　全国高等学校教頭・副校長会総会・研究協議大会
（福島県郡山市ビッグパレット福島）
8月 22 日（金）　全国高等学校ＰＴＡ連合会愛知大会（名古屋市）
23 日（土）　全国高等学校ＰＴＡ連合会愛知大会（名古屋市）
23 日（土）　都定時制・通信制副校長会との連絡会（ナーベルお茶の水・事務局）
8月 25 日（月）　校長協会、経営企画室長会等連絡会（ナーベルお茶の水お茶の水・事務局）
8月 28 日（木）　都副校長研究協議会（都教職員研修センター、都立工芸高等学校）
9月 11 日（木）　都第１回常任幹事会（ナーベルお茶の水・事務局）
10月 3 日（金）　全国中間監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
10月 7 日（火）　都中間監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
10月 9 日（木）　都第３回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
10月 20 日（月）　第３回全国総務部会（アルカディア市ヶ谷）
11月 6 日（木）　都第４会総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
11月 7 日（金）　全国常任理事会（アルカディア市ヶ谷）
11月 14 日（金）　関東地区高等学校教頭研究協議会（千葉市）
12月 4 日（木）　都第２回常任幹事会（ナーベルお茶の水・事務局）
12月 10 日（水）　第２回校長協会・経営企画室長会等連絡会（校長協会事務局）
12月 27 日（土）　都定時制・通信制副校長会との連絡会（ナーベルお茶の水・事務局）

平成 20 年

1月 8 日（木）　都第５回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）学校経営支援センター、
指導部、副校長会情報交換会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
2月 5 日（木）　都第３回常任幹事会（ナーベルお茶の水・事務局）
3月 5 日（木）　都第６回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
3月 27 日（金）　本部役員引き継ぎ会（ナーベルお茶の水・事務局）

2. 平成20年度予算

【一　般　会　計】

平成20年4月1日
東京都立高等学校副校長会

収　入　（単位：円）

項目	前年度決算	本年度予算	備考
一般会費	4,066,000	3,971,000	209名×19,000円
研究助成金	500,000	500,000	(財)都教育公務員弘済会
負担金	0	0	
雑収入	4,641	3,000	預金利息
繰越金	1,732,252	1,969,672	平成19年度より（過年度戻入分￥529,695を含む）
18年度地区別研究部会費未収金	0	50,000	未回収分50,000（西部C）
合計	6,302,893	6,493,672	

支　出

項目		前年度決算	本年度予算	備考
運営費	会議費	177,713	250,000	総務部会・幹事会・総会・役員会
	印刷費	2,940	420,000	資料・封筒・コピー・用紙等・教頭日誌
	旅費交通費	156,940	400,000	本部役員交通費・関東大会
	渉外費	96,380	200,000	講師謝礼・友好団体祝儀等
	全国会費	963,000	1,070,000	全都立校副校長分・日本教育会等(注)
	運搬送料費	118,066	150,000	宅配郵送料等
	資料費	6,310	30,000	教職員名簿他
	周年行事積立金	300,000	300,000	平成24年度予定（50周年）
	全国大会積立金	200,000	200,000	平成28年度予定
	通信費	89,455	100,000	郵券、振込料
	消耗品費	0	30,000	事務用品等
	雑費	1,284	15,000	
	小計	2,112,088	3,165,000	
事業費	学科別副校長会費	90,000	90,000	商業・工業・農業 @¥30000×3
	地区研究部会費	275,000	300,000	@¥25000×12地区（全地区）
	会員名簿	85,470	150,000	A4　650部
	会報費	358,890	400,000	A4　700部
	研究集録	194,548	200,000	A4　700部
	研究協議会報告	248,920	400,000	A4　700部
	小計	1,252,828	1,540,000	
維持費	慶弔費	3,000	80,000	香典・見舞金等
	人件費	808,000	800,000	全国分担金（実質1/10）
	家賃・光熱費	687,000	700,000	全国分担金（実質1/4）
	小計	1,498,000	1,580,000	
予備費		0	208,672	
合計		4,862,916	6,493,672	

平成20年度積立金会計

平成20年4月1日
東京都立高等学校副校長会

〈創立50周年積立金〉 （単位：円）

項　目	繰越金	本年度積立予定額	積立額	合　計	備　　考
創立50周年積立金	1,400,000	300,000	300,000	1,700,000	平成24年度実施予定
雑　収　入	1,995	0	0	1,995	預金利息
合　計	1,401,995	300,000	300,000	1,701,995	

〈全国大会積立金〉 （単位：円）

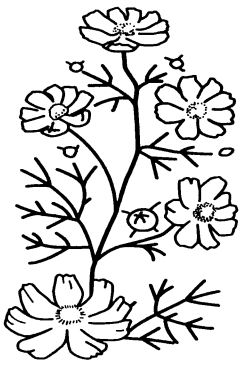
項　目	繰越金	本年度積立予定額	積立額	支出額	合　計	備　　考
全国大会積立金	200,000	200,000	200,000	0	400,000	平成28年度実施予定
雑　収　入	0	0	0	0	0	預金利息
合　計	200,000	200,000	200,000	0	400,000	

（注）日本教育会に都会計より振込して、以下の人たちが入会する。

- 常任幹事　12名
- 都会長（1）・都副会長（2）　3名
- 全国会長（1）・副会長（1）・会計（1）　3名

18名

1人　¥3,600（年間）



3. 平成20年度事業報告

平成21年3月31日
東京都立高等学校副校長会

会　合

平成20年	5月 8日(木)	幹事会		家庭クラブ会館
	6月20日(金)	総　会		家庭クラブ会館
		講　話「心で走る」		東京都教育委員会　瀬古 利彦 先生
	8月28日(金)	副校長研究協議会		都教職員研修センター
		講　話「笑いこそ必要」		六代目　春風亭柳朝　師匠
総務部会	4月17日(木)	7月3日(木)	10月9日(木)	11月6日(木)
	1月 8日(木)	3月5日(木)		ナーベルお茶の水 会員集会室他
常任幹事会	9月11日(木)	12月4日(木)	2月5日(木)	会員集会室
地区支部副校長会	原則として副校長連絡会の日			地区ごとに開催
学科支部副校長会	原則として副校長連絡会の日			(3学科)
研究部会	各地区　部・委員会ごとに開催			

総務部会

1　諸会議についての協議と原案の作成、学科・研究部相互の連絡・情報交換を行った。
2　副校長名簿・研究集録等を編集・発行した。
3　教育庁、全国高校教頭・副校長会、各種友好団体との連絡・情報交換・陳情・提言を行った。
4　教育庁、校長会、経営企画室長会等関係団体との連絡・協議・連携の維持をした。
5　全国高等学校教頭・副校長会第47回全国大会〔福島大会〕への参加と支援をした。
6　「教頭のホンネ」を発行した。(全国教頭・副校長会と共同出版)

研究部会

1　全会員が管理運営・高校教育・生徒指導の3部会6委員会に分かれ研究協議を行なった。
2　研究成果を研究集録のまとめ、教育庁・都立高校長・全定副校長に配布した。
3　都立高校研究協議会には各委員会より各1主題の、全国高等学校教頭・副校長会の全国大会には1主題{管理研}の研究発表を行った。
　全国高校教頭・副校長会の《全国理事研究協議会調査》は各部会が共同して協力し、その成果を調査研究集に発表した。
4　8月東京都副校長研究協議会発表担当者は（東部B(高校研第2)，D(生徒研第1)・中部B(管理研第1)，D(管理研第2)・西部B(高校研第1)，D(生徒研第2)）であった。

全国大会

1　期　日　7月30日（水）　全国研究部会・全国理事会
　　31日（木）　総会・研究協議会（分科会）
　　8月 1日（金）　研究協議会（分科会）
2　開催地　福島県郡山市　ホテルハマツ他　都の参加者 41名

関東地区高校教頭会連絡協議会

1　期　日　11月14日（金）
2　開催地　千葉県千葉市　「ホテルグリーンタワー千葉」
3　主　管　千葉県高等学校教頭・副校長協会　都の参加者 8名

刊行物

総会資料（平成20年版）	6月刊行	16p	教育庁・校長・全定副校長に配布	500部
平成20年副校長名簿	6月刊行	26p	〃	650部
研究集録（第35号）	8月刊行	50p	〃	700部
研究協議会報告（第24号）	11月刊行	60p	〃	700部
会報（第36号）	平成21年3月刊行	102p	〃	700部

4. 総　　会

平成20年6月20日(金) 19時00分～21時00分

場所　全国高等学校家庭クラブ会館

司会：　高橋　信雄（市ヶ谷商）

会長代行挨拶　玉井　篤（竹　台）

議事　議長：　都築　功（雪　谷）

1．平成19年度事業報告……会長代行
2．　同　決算報告……会　計
3．　同　会計監査報告……会計監査
4．20年度役員選出……会長代行
5．同部会組織と幹事について……会長代行
6．全国教頭・副校長会……会　長
（東京都よりの推薦者について）
7．正副会長紹介（全国推薦者を含む）
常任幹事・会計・会計監査・研究部長・委員長・事務局長等紹介……会長代行
8．平成20年度事業計画(案)について会長代行
9．同予算(案)について……新会計
10．その他（細則・内規の一部変更・全国大会参加）

閉　会……司　会

講　話　「心で走る」
東京都教育委員会委員
瀬古　利彦　先生

注　・議事はいずれも異議なく承認された。
（出席者47名）

5. 幹　事　会

総会に次ぐ機関で主に総会提出議案や総務部会からの原案を審議する。

平成20年5月8日(木) 19時00分～20時30分

於．家庭クラブ会館

出席者　本部役員、地区・学科の常任幹事、常任幹事代理、常任研究幹事（研究部長）、研究幹事（委員長）、幹事補佐、全国役員

【会議次第】

司会・議長・本部役員

1．会長代行挨拶……玉井会長代行
2．平成19年度事業報告と会計報告
……玉井会長代行、長島・新井会計
3．同会計監査報告……網谷・長島会計監査
4．平成20年度役員組織（都・全国候補）
……玉井会長代行・錦織会長
5．同部会組織(全国)……錦織全国会長
6．新旧役員挨拶
……会長、副会長、会計、監査
7．平成20年度事業計画と予算案
……玉井会長代行、長島、新井会計
8．会務運営上の改善策など……玉井会長代行
9．事務局より……事務局他
10．地区、学科、研究部からの報告・意見など
……常任幹事、部長、委員長他
11．その他

※幹事会は年1回（5月）に開催される。
（出席者36名）

6. 総　務　部　会

第１回総務部会

第１回総務部会は旧年度総務部員及び新年度役員候補者で開催

平成20年4月17日(木) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水２階会員集会室

出席者　19年度総務部員及び20年度新役員候補者

【会議次第】

1　会長挨拶　……玉井会長代行
2　昨年度の活動概況と今年度の課題
……玉井会長代行
3　年度当初の会合日程、その他の連絡
……事務局
4　新役員推薦（会長、副会長、会計）
……玉井会長代行
5　全国役員候補（会長、副会長、会計）推薦
……玉井会長代行
6　新旧役員挨拶（全国、都関係）
……新旧役員
7　全国教頭・副校長会報告……錦織会長
8　地区・学科・研究部からの報告
……各常任幹事
9　その他

【情報交換会】　司会　新会計

①　開会　……新副会長
②　挨拶　……新会長代行
③　退任者挨拶
④　情報交換・懇談
⑤　閉会　……新副会長
⑥　万歳三唱……全国会長

第２回総務部会

平成20年7月3日(木) 19時00分～20時30分

於　ナーベルお茶の水２階会員集会室

1　会長挨拶　……玉井会長代行
2　全国教頭・副校長会報告……錦織会長
3　全国大会（福島）東京都の発表について
……研究部部長
4　副校長会総括……都築副会長
5　副校長研究協議会について……都築副会長
6　校長協会・企画室長会・定通副校長会との第１回連絡会について……玉井会長代行
7　地区、学科、研究部の報告
……常任幹事・委員
8　事務局より……事務局
9　協議・情報交換・今後の課題などについて
……会長他

第３回総務部会

平成20年10月9日(木) 19時00分～20時30分

於　ナーベルお茶の水２階会員集会室

1　会長挨拶　……玉井会長代行
2　全国教頭・副校長会報告……錦織会長
3　都立高校副校長研究協議会（八月研）報告
……都築副会長
4　校長協会、企画室長会、定通副校長会との第１回連絡会報告……玉井会長代行
5　関東地区高等学校教頭研究協議会の東京都発表について……玉井会長代行
6　後期会費納入について……玉井会長代行
7　地区、学科、研究部の報告
……常任幹事・委員
8　事務局より……事務局
9　協議・情報交換・今後の課題について
……会長他

第４回総務部会

平成20年11月6日(木) 19時00分～20時30分

1　会長挨拶　……玉井会長代行
2　全国教頭・副校長会報告……錦織会長
3　平成21年度全国大会東京都の発表について
……玉井会長代行
4　校長協会、企画室長会、定通副校長会との第２回連絡会について……玉井会長代行
5　地区、学科、研究部会報告
……常任委員・委員
6　協議・情報交換・今後の課題などについて
……会長他
7　その他
8【講話】

「副校長の研究テーマの選定とICT計画について」

指導部高等学校教育指導課主任指導主事

牛来　峯聡　先生

第５回総務部会

平成21年1月8日(木) 19時00分～21時00分

1　会長挨拶　……玉井会長代行

2　全国教頭・副校長会報告…… 錦織会長
3　校長協会、企画室長会、定通副校長会との第２回連絡会報告 ……玉井会長代行
4　地区、学科、研究部の報告
……常任幹事・委員
5　事務局より ……事務局
6　協議・情報交換・今後の課題などについて
……会長他
7　その他
8　賀詞交歓会

第６回総務部会

平成21年3月5日(木) 19時～20時30分

1　会長挨拶　……玉井会長代行
2　全国教頭・副校長会報告…… 錦織会長
3　地区、学科、研究部報告…常任幹事・委員
4　事務局より ……事務局
5　協議　21 年度計画、体制作り、副校長研究協議会、異動等について……会長他

常任幹事会

※平成 19 年度より新設された会合で総務部会のない月（9・12・2）に会長・副会長・全国会長・常任幹事で当月の副校長連絡会後の地区副校長会への連絡・伝達事項・情報収集のための会合。

第１回常任幹事会

平成20年9月11日（木）19時00分～20時30分
於　ナーベルお茶の水２階会員集会室

1．会長挨拶　……錦織全国会長
2．全国高等学校教頭・副校長会報告
（平成 20 年度福島大会について）
3．20年度副校長研究協議会反省‥都築副会長
4．地区報告　……各常任幹事
5．事務局より ……事務局
6．その他

第２回常任幹事会

平成20年12月4日(木)19時00分～20時30分
於　ナーベルお茶の水２階会員集会室

1．会長挨拶　……玉井会長代行
2．全国高等学校教頭・副校長会報告
…… 錦織会長
3．関東地区高等学校教頭研究協議会報告
……玉井会長代行
4．校長協会・企画室長会・定通副校長会との第２回連絡協議会報告……玉井会長代行
5．地区報告　……各常任幹事
6．協議・情報交換・今後の課題について
……会長他
7．事務局より ……事務局
8．その他
9．【講話】
「先輩副校長から現役副校長へのアドバイス」
元都立松原高等学校副校長　大河内 保雪 先生

第３回常任幹事会

平成21年2月5日(木) 19時00分～20時30分
於　ナーベルお茶の水２階副校長会事務局

1．挨拶　……玉井会長代行
2．全国高等学校教頭・副校長会報告
（平成 21 年度東京都の発表について）
……玉井会長代行
3．平成 21 年度の行事予定・役員選出について
……玉井会長代行
4．地区報告　……各常任幹事
5．協議・情報交換・今後の課題について
……会長他
6．事務局より ……事務局

7. 特 別 委 員 会

会長代行　玉　井　　篤

1．東京都教育管理職等連絡会理事会　：　玉井　篤（竹台）

都公立学校の校長・副校長及び教育委員会の指導室長が職務上の任務に起因して提訴された場合、応訴費用を貸し付けることにより、個人負担を軽減するとともに、東京都における学校教育の円滑な運営を図ることを目的とした会であったが、一般的な応訴費用負担制度、保険制度が整備定着してきたため、平成18年度をもって新規の会費納入を停止した。応訴費用の貸付制度は今後10年間継続した後精算することが決定している。今年度の会合は開催されず、会計監査のみ実施した。

2．東京教職員互助会運営委員会　：　玉井　篤（竹台）

○　5月 8日（木）　都教職員互助会運営委員会（お茶の水・三楽病院）
○　1月16日（金）　都教職員互助会運営委員会（お茶の水・池坊学院）

3．教育公務員弘済会評議員会　：　玉井　篤（竹台）

○ 12月12日（金）　教育公務員弘済会評議員会（都教弘会館会議室）
○　3月13日（金）　教育公務員弘済会評議員会（都教弘会館会議室）

4．日本教育会東京都支部役員

理　事

錦織　政晴（武蔵）　玉井　　篤（竹台）

評議員

長島　良夫（羽村）　新井　義雄（一商）　鈴木　春子（蒲田）　長津　平二（南平）
小野寺　一（足立東）瀧澤　隆司（工芸）　荒川　　洋（大森）　高橋　雅信（紅葉川）
栗原　幸一（狛江）　佐藤　芳教（国際）　林　　秀吉（北園）　大島　　良（大泉）
梶野　茂男（若葉総合）荻野　　勉（立川）　矢作　俊郎（東久留米総合）
西塚　春義（小平南）

・日本教育界の諸事業に協力し、支部事業（総会・研修会・支部報発刊など）を企画・実施する

5．東京都公立高等学校ＰＴＡ連合会相談役：　玉井　篤（竹台）

東京都公立高等学校ＰＴＡ連合会の諸事業に関して、相談を受ける

○　5月13日（火）　都高等等学校ＰＴＡ連合会相談役会
○　6月13日（金）　都高等学校ＰＴＡ連合会総会出席
○ 10月22日（水）　都高等学校ＰＴＡ連合会臨時相談役会

3．主な活動報告

1．全国高等学校教頭会・副校長会

1．会　　合

5月 9 日（金）	監査･本部役員会	東京・事務局	4県 10名
〃 19 日（月）	第1回総務部会	東京・アルカディア市ヶ谷	5県 17名
6月 9 日（月）	第1回理事研究協議会	〃	47県2市 90名
〃	（含、地区研究協議会）		
7月 4 日（金）	第2回総務部会	〃	6県 17名
7月 30 日（水）	研究部会	福島県・ホテルハマツ	13名
	第2回理事研究協議会	福島県・ホテルハマツ	47県 101名
7月 31 日（木）	総会･研究協議大会（第1日）	福島県・ビックパレットふくしま	47県 901名
8月 1 日（金）	研究協議大会（第2日）	〃	47県 901名
10月 3 日（金）	中間監査･本部役員会	東京・事務局	4県 7名
10月 20 日（月）	第3回総務部会	東京・アルカディア市ヶ谷	8県 15名
11月 7 日（金）	常任理事会	〃	19県 29名

2．地区協議会

北海道地区	①5月21日～22日	岩見沢支部	東海地区	10月17日	岐阜県主管
	②11月21日	札幌本部	近畿地区	10月30日～31日	兵庫県主管
東北地区	11月13日～14日	青森県主管	中国地区	隔年（本年開催せず）	
関東地区	11月14日	千葉県主管	四国地区	11月23日～24日	愛媛県主管
北信越地区	11月13日～14日	福井県主管	九州地区	10月2日～3日	佐賀県主管

3．刊　行　物

・発表資料集	第28号	平成20年 7 月	118頁	2,100部	参加者・県教委・校長会などに配布
・全国要覧	第31号	〃 9 月	52頁	6,500部	会員・県教委・校長会などに配布
・会報	第74号	〃 11月	12頁	6,500部	〃
・研究集録	第31号	〃 10月	188頁	6,500部	〃
・全国大会集録（福島県）		〃 11月	151頁	6,500部	〃
・調査研究集	第32号	平成21年 1 月	70頁	6,500部	〃
・会報	第75号	平成21年 1 月	16頁	6,500部	〃
・「教頭のホンネ」		平成20年 7 月			全国大会参加者に配付

4．研 究 発 表

県・題（福島 3 題、北海道 2 題、静岡 2 題、17 県各 1 題）

部　門	全　国　大　会	研　究　集　録	計
管理運営	北海道、福島、東京、新潟、青森（誌上）	北海道、愛知、広島、	7県8題
高校教育	静岡、鳥取、香川、福島、群馬（誌上）	静岡、奈良、島根、福岡	8県9題
生徒指導	神奈川、滋賀、宮崎、福島、石川（誌上）	山形、茨城、三重	8県8題

5．特 別 調 査

本年度は兵庫県（調査研究集に掲載）、来年は北海道が担当。

2. 東京都立高等学校副校長研究協議会

東京都立高等学校副校長会
東京都公立高等学校定通副校長会

平成20年度副校長研究協議会は、前年度と同時期の8月28日（木）に、会長代行や指導部の尽力、及び都立工芸高等学校のご協力により、東京都教職員研修センターの研修室と都立工芸高等学校の視聴覚室で行うことができました。

教育庁指導部高等学校教育指導課の担当指導主事には発表原稿のご指導や当日の物品の貸借や事前準備に大変お骨折りいただき、研究協議会が円滑に行いえました。

開催場所と時期がほぼ同様だったこともあり、全日制94名、定時制52名の合計146名の参加となり、一昨年146名、昨年157名と比べてほぼ同じような数であった。

今年度の主題は「都民に信頼される魅力ある都立高校づくりをめざして」で、全日制６、定時制１の研究発表が行われました。

午後１時20分から２時40分まで行われた各テーマは以下のとおりです。

第１分科会（全日制　管理運営研究部）
801(2)研修室
主題：主幹制度５年目を迎えて
～５年目の総括～
第１委員会　中部Ｂチーム
提案者：安部　宅郎（三鷹）
主題：主幹教諭によるＴＡＩＭＳ端末等の活用の現状と課題
第２委員会　中部Ｄチーム
提案者：上原　勉（武蔵丘）
指導助言：全国高等学校長協会事務局長
前都立町田高等学校長
小栗　洋先生

第２分科会（全日制　高校教育研究部）
802研修室
主題：奉仕体験活動の実践と副校長の役割
第１委員会　西部Ｂチーム
提案者：志村　修司（北多摩）
主題：魅力ある学校づくり
第２委員会　東部Ｄチーム
提案者：高橋　信雄（市ヶ谷商業）
指導助言：都立小平南高等学校長
田中　政美先生

第３分科会（全日制　生徒指導研究部）
803(1)研修室
主題：東部Ｄチームにおけるキャリア教育実践事例の紹介－キャリア教育推進における副校長の役割を考える－
第１委員会　東部Ｄチーム
提案者：佐々木　哲（科学技術）
主題：「小中高夢のかけ橋推進事業」に果たす副校長の役割
第２委員会　西部Ｄチーム
提案者：渕脇　英一（拝島）
指導助言：前都立立川高等学校長
大澤　充二先生

第４分科会（定時制・通信制課程　管理運営研究部第１委員会）
803(4)教室
主題：学校経営計画の策定と運用に関する実態調査
中部研究委員会
提案者：真保　俊哉（新宿）
西田　　豊（杉並）
松本　哲雄（中野工業）
指導助言：都立一橋高等学校長
寶槻　広先生

各分科会とも活発な議論と指導助言者の的を射たご助言をいただきました。

午後2時55分より都立工芸高等学校視聴覚室にて全体会を行いました。

玉井会長代行の開会の辞に続き、東京都教育庁指導部長　高野敬三先生よりご挨拶をいただきました。部長からは、前年度都立飛鳥高等学校長として高校現場でのご経験も合わせ、「最近、副校長が元気がないと聞くがぜひ元気を出して欲しい。」との励ましのメッセージをいただきました。

全体会最後の講話では、六代目春風亭柳朝師匠をお迎えし、「話術を通したコミュニケーション」というテーマでお話しいただきました。普段、眉間に皺を寄せＰＣに向かっているストレスの多い我々ですが、思い切り笑わせていただき、９月以降を乗り切る元気をたくさんもらいました。

副会長　都築　功（雪谷）記

3. 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会報告

副会長　　高橋　信雄
（東京都立市ヶ谷商業高等学校）

はじめに

関東地区高等学校教頭・副校長研究協議会は、「関東地区高等学校教頭・副校長の連携を図るとともに、高等学校教育の諸問題について研究協議等を行い時代の進展に即応する教頭・副校長としての資質の向上と高校教育の充実を図る」ことを目的に昭和62年より開催され東京、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、神奈川市、山梨各県の教頭会（副校長会）で構成されている。

開催は東京を除く各県市の持ち回りで、平成20年度は千葉県で開催され、各県市より194名が参加した。東京からは8名が出席した。

1　平成20年度千葉大会の概要

期日　平成20年11月14日（金）
会場　ホテルグリーンタワー千葉

（開会式）
① 開式の辞
② 千葉県高等学校教頭・副校長協会長挨拶
③ 全国高等学校教頭・副校長会長挨拶
④ 来賓挨拶
⑤ 来賓紹介
⑥ 閉式の言葉
⑦ 日程説明・諸連絡

（講演）
講師　天笠　茂　先生
　　千葉大学教育学部教授
演題　「いきいきとした学校づくりと学校評価」

（研究協議）
◆ テーマ
「個性豊かな生徒を育む魅力ある学校づくり」
◆ 発表
1　山梨県立甲府城西高等学校　三井 敬三
「総合学科高校の取り組み」
2　茨城県立水戸第二高等学校　笹目 俊夫
「いじめ・不登校について」
3　千葉県立茂原高等学校　　武居 元三
「朝読書と特別活動における奉仕的取組（心の教育の一つとして）」
4　神奈川県立上溝高等学校　　齊藤 一美
「神奈川県の学校づくり」

（閉会式）
① 開式の辞
② 千葉県高等学校教頭・副校長協会長挨拶
③ 次年度開催県（埼玉県）教頭会会長挨拶
④ 閉式の言葉

2　研究発表の趣旨

① 山梨県立甲府城西高等学校　三井　敬三
「総合学科高校の取り組み」

平成12年度から1年次「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」を連携して、進路意識育成と知識確立を目指して取り組んでいる。2年次で継続学習、3年次は進路実現の場として活動している。

教育課程の基本方針
(1) 多様な進路希望に対応できる教育課程により一人ひとりの個性を伸ばす。
(2) 科目選択の指導を充分に行う。
(3) 生徒に高校3年間の学習基盤となる系列を定めさせる。

② 茨城県立水戸第二高等学校　笹目 俊夫
「いじめ・不登校について」

研究方法
ア　調査方法　アンケート方式
イ　調査機関　平成19年8月20日(月)～29日(水)
ウ　調査対象　県立高校　全日制　112校
　　定時制（通信制）　13校
エ　調査項目
　A　いじめについて　B　不登校について

県内100校では職員会議等で共通理解を図り、58校では教員個々の教育的力量を高めるために、事例研究等の校内研修会を開催するなど、それぞれの状況に応じて対策を講じている。また、教育相談室を整備充実させ、生徒との面談を通して早期発見や事後対応に努めている様子もうかがえる。

③ 千葉県立茂原高等学校　　武居 元三
「朝読書と特別活動における奉仕的取組（心の教育の一つとして）」

「朝の読書」推進

県内の高等学校では33校、約23．6%の学校で朝の読書を行っている。（平成20年8月18日現在）

本校では図書部の所管により、「みんなが読む、まいあさ読む、好きな本を、しずかに読む。」を合い言葉に日常、全校一斉に「朝の読書」を実施している。

朝の読書がもたらす効果として考えられるもの。

ア　言語生活が豊かになり、精神性の高まりが期待できる。

イ　心にゆとりが生まれ、生活態度に落ち着きが加わった。

ウ　教科書を読む習慣も醸成され、国語力だけでなく、各教科の学習の深化が期待できる。

エ　遅刻者・欠席者が少なくなった。

オ　友人の間で、読書のことが話題となり、図書室の利用も増えた。

④　神奈川県立上溝高等学校　　齊藤　一美

「神奈川県の学校づくり」

「学力向上推進及び特色ある県立高校づくり推進事業」（平成20年度）

・確かな学力向上の取組推進校（25校）

・「協働」による教育活動展開の推進（13校）

・これからの社会に対応する特色ある教育の推進（50校）

新たな専門高校

新たな集合型専門高校

通信制新タイプ校

中等教育学校

定時制単独校（多部性）　単位制による定時制の課程　　普通科（座間方面）

神奈川県・愛川町連携型中高一貫教育

3　平成21年度関東地区高等学校教頭・副校長会（案）―抜粋―

主催　関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会

主管　埼玉県高等学校教頭会

期日　平成21年11月13日(金)

会場　埼玉会館

〒　330－8518

さいたま市浦和区高砂3－1－4

TEL　048－829－2471

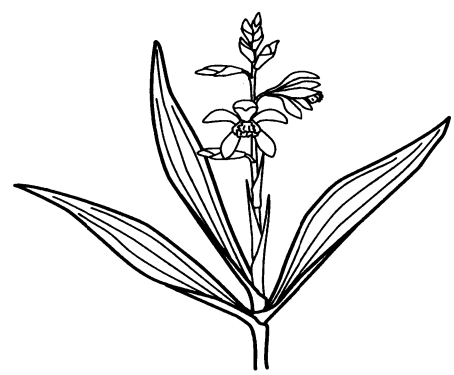
研究協議　テーマ　　未定

発表　①埼玉県 ②東京都 ③栃木県 ④群馬県

講演　演題　講師　　未定

4　おわりに

「いきいきとした学校づくりと学校評価」という演題で千葉大学の天笠　茂　教授から講演して頂いた。学校評価の目的は学校をよくするために組織的・継続的な改善を図ることであって、改善のための時間を確保する必要があるとのお話であった。来年度、より多くの先生が研究協議会にお集まりいただければと強く感じた。



4. 地区別支部副校長会報告

1. 東部Ａ地区副校長会

1　はじめに

平成20年度は、足立区と葛飾区の12高等学校13名の副校長で始まった。以前より気になっていた足立新田高校と荒川商業高校が東部Ａ地区に加わっていない状況は変化しないままである。昨年度も、担当副参事・統括支援主事にお願いしたのであるが…。足立区の高校は同一地区に入っていないと生活指導をはじめとして、さまざまな情報を共有できないことが明確であり、地区の割り振りを再考していただければと思っています。役員は、小野寺（足立東高校）が常任幹事になり、岡島（淵江高校）が常任幹事代理、会計（研究幹事も）には藤川（南葛飾高校）があたり、何とか無事に１年間過ぎ去っていけばと考えていたが…。この１年で副校長13名中２名が替わってしまった。

2　定例会について

副校長連絡会の中で、定例会が行われている。常任幹事の小野寺が司会を務め、経営支援センターからの検討事項・連絡事項について検討し、また副校長会からの連絡事項の報告等を協議・検討した。副校長連絡会の行われる前週の木曜日に、副校長会総務部会が開催され、連絡事項等が確認され、各副校長へTAIMSで総務部会の情報を提供し、定例会の時間の有効活用のためスムーズに進行できるように配慮した。総務部会の「報告」は、間に合えば副校長連絡会の前日にTAIMSで送信した。

経営支援センターより定例会についての予定を聞き、定例会の時間がそこそこ取れると予想して副校長連絡会に臨むと、本庁からの報告やらが延びて、ほとんど十分な定例会の時間が取れたことはなかった。月一度の集まりではあるが、副校長同士の交流の場として大切な時間であり、充実させていくことが大きな課題である。

生活指導などについて、足立区と葛飾区の高校の連携を密にとることは、非常に重要なことである。特に、体育祭や文化祭の日程等の調整は、各校の状況を十二分に配慮し、各校の年間行事予定の決定に大きく影響を与えている。各高校間の連携は、まだまだ不十分ではあるが、TAIMSや電話などで情報交換し、協力体制ができている。

3　副校長会

4月22日(火)　多摩社教（全体会）
5月13日(火)　都立白鴎高校（東部所）
6月10日(火)　都立青山高校（東部所）
7月10日(木)　都立工芸高校（東部所）
9月16日(火)　多摩社教（全体会）
10月14日(火)都立農産高校（東部所）
11月11日(火)都立新宿山吹高校（東部所）
12月9日(火)　都立城北特別支援学校（東部所）
1月16日(金)　教職員研修センター（全体会）
2月10日(火)　都立工芸高校（東部所）
3月10日(火)　都立上野高校（東部所）

4　おわりに

定例会において、主な議案は生活指導についてである。足立区や葛飾区の中高生活指導連絡会での情報を交換し、各校の生活指導に役立てている。また体育祭・文化祭等の行事予定も大切な議案であり、意見交換する十分な時間が必要である。

学校を取り巻く状況が一段と厳しい中で、学校の教育活動を円滑に進めていくには、副校長の連携が重要であり、そのためには定例会をきちんと行うことが必要である。

常任幹事　小野寺　一（足立東）記

2. 東部Ｂ地区副校長会

1　はじめに

平成20年度は、常任幹事＝滝沢隆司（工芸）、常任幹事代理＝古川邦夫（足立新田）、幹事補佐＝長江誠（忍岡）、常任研究幹事＝幸田諭昭（小石川）、研究幹事＝照井千秋（九段）を中心として地区副校長会を運営してきた。

副校長連絡会での意見交換会は、様々なテーマについて意見交換が行われ、課題の共有と共通理解を図ることができた。また、情報交換会では、情報セキュリティ、文化祭の状況、主任教諭の応募状況、産業医の活用など取り上げた。他校の状況等を把握できて、参考になっている。連絡会は情報を共有できる貴重な機会となった。

2　活動報告

①意見交換・情報交換

4月22日（火）会場：多摩社会教育会館
「経営企画型事務室への取組」

5月13日（火）会場：都立白鴎高校
「学校経営計画の具体化に向けて」
工芸高（池上）、足立特別支援（佐藤）

6月10日（火）会場：都立青山高校
「教職員の育成に向けた取組」
蔵工高（田中）、江北（林）

7月10日（木）会場：都立工芸高校
「授業改善への取組」
農産高（飯島）、台東商（小山）

9月16日（火）会場：多摩社会教育会館
情報交換「文化祭の状況」

10月14日（火）会場：都立農産高校
「経営企画型事務室の推進」
淵江高（岡島）、支援センター（伊東室長）

11月11日（火）会場：都立新宿山吹高校
講演会「変革期のトップマネージャーを支える副校長の役割」
経営支援顧問　松崎昭雄氏

12月9日（火）会場：都立城北特別支援学校
情報交換「生徒による授業評価の取組」

1月16日（金）会場：教職員研修センター
「業績評価における副校長の役割」
新宿山吹高（大川）、葛飾ろう（飯村）
情報交換「インフルエンザ予防接種の把握」

2月10日（火）会場：都立工芸高校
情報交換「教育課程の適正な実施に向けての課題」
「産業医の活用」

3月10日（火）会場：都立上野高校
「危機管理―情報セキュリティ―」
大田桜台（平野）、葛飾商業（石山）

基調報告をされた、先生方には、ご準備ご苦労様でした。報告内容・資料は大変参考になった。

②研究活動

高校教育研究部会第2委員会では、平成18年度から2年間にわたり、「特色ある学校づくり」、「選ばれる学校」という内容で発表してきた。3年目は「魅力ある学校づくり」という視点で実践報告をした。

これまでの報告から、各校が学校づくりの目標を目指して、さまざまな取組みに奮戦している様子を知ることができた。

3　終わりに

今年度は、課題のひとつとして、個人情報漏洩の防止対策に追われた。また、世情は年末から経済危機の深刻さが増し、生徒の進路にも、少なからず影響が及びつつある。

学校は、生徒・保護者等に望まれる学校像を的確に捉え、示すこと。その具体的な取組みについて、早急な対応と中・長期を見据えた、計画の策定と組織体制の整備が求められている。

研究・研修を通じて、副校長相互の連携を密にして、職務を遂行していくことが必要である。

常任幹事　滝沢　隆司（工芸）記

3. 東部C地区副校長会

1　はじめに

東部学校経営支援センター支所所轄の普通科高校6校、専門学科高校2校（商1、工1)、総合学科高校2校の10校12人の副校長で構成され、常任幹事は荒川（大森)、研究幹事は桑原（美原)、常任幹事代理は永森（晴海総合）で運営した。

2　活動報告

(1)　副校長連絡会と意見交換会

今年度は、支所からの提案により、意見交換をC地区、D地区合同の教育課題別の分科会で行った。教育課題別分科会としては、進学校班、中堅校班、専門高校班、生活指導充実班、定時制班の5つである。副校長連絡会意見交換会のテーマについてはアンケート結果に基づき、多くの希望が寄せられたテーマについて協議が行われた。

4月22日(火) 多摩社会教育会館
「授業力向上のための組織的な校内研修について」

5月13日(火) 東部支援センター支所
「職務記録の作成と指導・助言について」

6月10日(火) 東高校
「主幹教諭の育成について」

7月10日(木) 東部支援センター支所
「学校の広報活動について」

9月16日(火) 多摩社会教育会館
「中間申告面接における副校長の役割」

10月14日(火) 深川高校
講演会「経営企画室と副校長の連携について」

11月11日(火) 晴海総合高校
「人事考課制度を活用した学校運営における副校長の役割について」

12月9日(火) 東部支援センター支所
「企画調整会議等の運営における副校長の役割について」

1月16日(金) 教職員研修センター
「業績評価における副校長の役割について」

2月10日(火) 芝商業高校
「授業力向上プログラムにおける校内研修事業　事例発表」

(2)　副校長会

①東京都立高等学校副校長会からの事務連絡

副校長連絡会後にC地区で集まり、時間的余裕がなく、副校長会からの事務連絡だけで終わってしまうことが多かった。

②塾対象説明会について

塾関係者との懇談を通して、通学区域にある塾関係者へ各校の情報を発信するとともに相互に理解を深める、ことを目標に今年度、初めて塾関係者を対象として合同説明会を美原高校で実施した。6月1日(日) 午後1時30分から午後5時まで美原高等学校を会場として実施した。

第一部（午後1時30分から午後3時）各校による説明（1校あたり5分）
・学習、部活動等の指導等について
・卒業後の進路状況、指定校推薦について等

第二部（午後3時10分から午後5時）ブース方式による各校との懇談

③合同説明会 in 蒲田について

C地区の学校が中心となって毎年10月に蒲田高校を会場として地区の合同説明会を実施している。今年は10月5日に実施した。C地区の副校長会では大田区、品川区の高校を中心としてこの会の運営を行っている。

④C地区副校長研修会について

12月26日(金)に「携帯電話に係わる青少年の被害事例と加害事例またその対応」（プロフ・ブログ、チェーンメール、学校裏サイトなど）警視庁ハイテク犯罪対策総合センター対策2課藤島　享氏に講演いただいた。次に「魅力ある学校」について安田教育研究所平松　享氏に講演をしていただいた。

講演いただいた内容を生活指導、募集対策に生かしていきたい。

常任幹事　荒川　洋（大森）記

4. 東部D地区副校長会

1　はじめに

本副校長会は、東部学校経営支援センター支所（以下、東部支所）所轄の普通科高校12校、専門高校6校（商業2、工業2、科学技術1、産業1）附属中学校1校の19校20人の副校長で構成され、常任幹事は高橋（紅葉川）、常任幹事代理・幹事補佐は清水（深川）、常任研究幹事（研究部長）は佐々木（科学技術）、研究幹事は遠山（両国）で地区副校長会を運営した。

2　活動報告

(1) 副校長連絡会会場と意見交換会内容

東部支所所轄のC，D地区副校長会合同で実施される意見交換会では、本年度は、進学校班、中堅校班、生活指導班、専門学校班の4班に分け、東部支所から与えられたテーマに沿って複数の副校長がリポーターとなり、協議が行われた。予め学校経営支援主事よりテーマと発表者が決定され、会の進行について事前に、東部支所から常任幹事に知らされた。以下に、会場と協議テーマを示す。

○　4月22日　多摩社会教育会館
当初申告について

○　5月13日　東部支所
人事考課制度を活用した人材育成の在り方

○　6月10日　東高校
主幹教諭の育成について

○　7月10日　東部支所
学校の広報活動について

○　9月16日　多摩社会教育会館
中間申告面接の指導・助言について

○　10月14日　深川高校
人材育成について

○　11月11日　晴海総合高校
人事考課を活用した学校運営について

○　12月9日　東部支所
企画調整会議等の運営について

○　1月16日　教職員研修センター
業績評価の取組について

○　2月10日　東部支所
授業力向上プログラムにおける校内研修事業事例発表

○　3月10日　東部支所

(2) 副校長研究協議会に向けて

今年度は、8月28日の副校長研究協議会で、東部Dチームが発表することを受けて、チーム内で協議した結果、発表内容は「東部Dチームにおけるキャリア教育実践事例の紹介」と決定した。副題として、キャリア教育における副校長の役割を考察した。

キャリア教育の実践事例として、都立科学技術高等学校の「スクールライフプラン（ダビンチプラン）の取組」、都立大江戸高等学校の「総合学科原則履修科目、チャレンジ指定科目の取組」、都立第三商業高等学校の「商業科における2年次インターンシップの取組」、都立葛西南高等学校の「4学年における具体的な進路決定指導の取組」、都立本所高等学校の規範意識の確立を基盤とした「生き方教育」の取組について発表した。

(3) 副校長会

①　東京都立高等学校副校長会よりの事例連絡

副校長連絡会後に開催されるが、時間的余裕がなく、副校長会からの事務連絡に終始してしまうことが多い。自校での教育課題を披露し、他校からの情報を得るということは、ほとんどないが、校種別意見交換会で情報交換する工夫をして有益な情報を得ることができた。

②　江戸川区内都立高等学校合同説明会

昨年度、初めて江戸川区内の都立学校、小松川、江戸川、小岩、葛西南、篠崎、紅葉川、葛西工業の7校が連携して、江戸川区高等学校PTAが協賛し、江戸川区立中学校校長会後援で実施された。

今年度（幹事校は小岩高校）は10月11日（日）に江戸川高校で実施し、江戸川区を中心に700名近くの生徒の参加があった。

③　今後の検討課題

今年度、副校長会より各地区に配布された研究費について、有効に執行できるように、チーム内で検討協議したい。

常任幹事　高橋　雅信（紅葉川）記

5. 中部Ａ地区副校長会

【雑感＋α】

中部Ａの常任幹事の守備範囲は全日制の高校と聞いていたが、小笠原などの島嶼もありTAIMSメールが無ければどのように連絡しただろうかと考えると面白い。

インターネットの世の中になり、物理的距離をメールなどを使うと感じなくなった。そのような時代に学校支援センターができ、今までよりも物理的にも心理的にも教育庁が近くなった。

また、センターから学校への訪問についても世の中はメールで済ますことが多い中、対面形式を重視している。一見時代に逆行しているようで、実はなかなか良いやり方だと感じる。

人と人がお互いの顔を見ながら話し合うことがコミュニケーションの基本である。せめて1回でも会っておけば、電話やメールの時相手の顔が浮かび会話がスムーズになる。教育行政を進めるに当たって、メールや電話など間接的な連絡手段だけを当てにせず、副校長連絡会などお互いの顔を確認しながらの会合は微妙なニュアンスを共有する意味において欠いてはならないことである。

誰でも一度は、この忙しいときに副校長連絡会があるのは…というぼやきをしたことがあるだろう。しかし、月に1回の顔合わせは、実は電話やメールを使っての連絡をよりスムーズにしているのである。この会合を利用し顔を覚えていくことは当然のことである。懇親会もコミュニケーションの場として意味を持っている。

ところで、特別支援学校の副校長の話を聞けたのは、なかなか良いことであった。教員はよく視野が狭いと言われることが多い。自分の周りのことは一応分かるがそれ以外のことは民間の人よりも知らないと言うことだろう。同じ教育の中でも特別支援教育は、全日制だけで過ごした人には分からない世界である。

私は、定時制にも副校長として3年間いたが、今から思うとあっという間の3年間ではあったが、実にいろいろなことを感じたと断言できる。教育という言葉が、自分が感じていたよりも多様であり、全て実世界のことである。本を読んだり、テレビや他人の話ではなく、実際にその場を体験することが本当に視野を広げることになると感じた。

毎回の副校長連絡会の際の授業見学は異校種の時こそ大切にするべきことを学んだ。生徒ではないが、強制的な学びは大人にも必要である。

実は、このことが学校運営でも感じることである。新しいことを企画しても必ず反対者がいるものである。管理職になって一番感じることは、教師は頭が固い、変化を嫌う、本筋を見ていない、自分の理屈が一番であると感じている等である。

教諭の時も感じていた部分ではあるが、本当に変化を嫌う集団である。でも最近は、世の中の変化が経済や情報でやたらと速いので、教育にも変化があって当たり前！となってきた感がある。こういう時代だからこそ変化すべき点と継続すべき点をしっかりと見極めたい。

副校長会の幹事会や総務部会に参加していると違った角度からの情報などにも接するので多少面倒だが出るようにしている。4月当初より参加者が少なくなってきたようだ。ここにもインターネットの便利さが活用できる。でも顔見知りにならないとメールは味気ない文章になってしまう。私は、常任幹事会報告がメールで来ると、すぐ中部Ａの全日制副校長全員に転送している。ボタンを押すだけで一瞬にして送れる便利さは快感ですらある。

しかし、こういう時代だからこそ地区幹事は参集すべきかな？と思っている。メールにたより携帯に頼っていたら生〇と同じになってしまう。先生たるものコミュニケーションの基本をなんと心得ているのか？でも、携帯は便利である。毎日私でも何らかのメールをしている。

あの日も事件があり、帰宅途中の校長の携帯に連絡した。自分が帰る途中では校長から携帯にメールが送られてきた。帰ってからも校長とのやりとりは携帯が中心である。音声かメールか時と場合で切り変えているが、どうやら携帯に依存した勤務になってしまった。

やはり世の中の変化は間違いなく教員の世界にも完全に進入してしまった！元のようなのんびりした連絡体制ではなくなったのである。忙しくなる訳である！！！！

常任幹事　栗原　幸一（狛江）記

6. 中部Ｂ地区副校長会

１．はじめに

中部学校経営支援センターB チームが所管する高等学校・中等教育学校のうち、全日制課程または、前期課程を担当する副校長がいるのは、22 校で 23 名である。全国高等学校教頭会や東京都立高等学校副校長の研究協議会等の発表を踏まえて、極力Ａチームと歩調をあわせて取り組んできた。また、副校長連絡会が全体会・チーム別意見交換・校種別情報交換で構成されていることを受け、所の学校経営支援主事と連携をとりながら、円滑に運営ができるように心がけた。

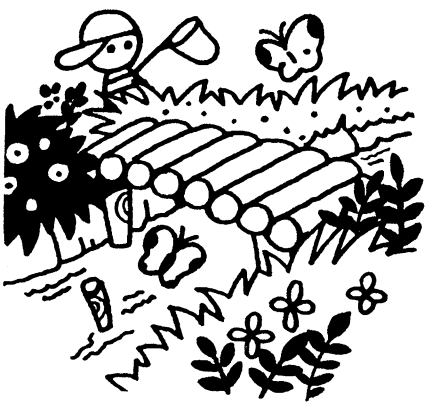
２．活動報告

(1) 4 月 22 日
　多摩社会教育会館
　総務部会報告
(2) 5 月 13 日
　大崎高等学校
　幹事会報告
(3) 6 月 10 日
　杉並高等学校
　東京都副校長会総会の案内
(4) 7 月 10 日
　西高等学校
　総務部会報告
(5) 9 月 16 日
　多摩社会教育会館
　常任幹事会報告
(6) 10 月 14 日
　中部学校経営支援センター
　総務部会報告
(7) 11 月 11 日
　東京都立大学附属高等学校
　総務部会報告
(8) 12 月 9 日
　目黒高等学校
　常任幹事会報告
(9) 1 月 16 日
　東京都教職員研修センター
　総務部会報告
(10) 2 月 10 日
　松原高等学校
　常任幹事会報告
(11) 3 月 10 日
　新宿高等学校
　総務部会報告

３．平成 20 年度役員

常任幹事	佐藤	芳教（国際）
常任研究幹事	下條	隆史（駒場）
研究幹事	小林	淑訓（大崎）
常任幹事代理	櫛野	治和（世田谷総合）
幹事補佐	新井	義雄（第一商業）

常任幹事　佐藤　芳教（国際）記



7. 中部Ｃ地区副校長会

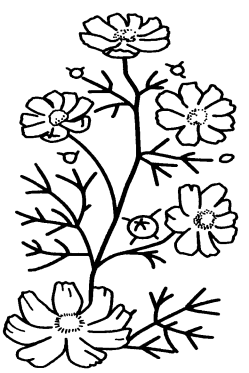
平成20年度の中部Ｃチームは、9校と少ないメンバーでスタートしました。Ｄチームの半分以下で、他のチームと比較しても最少規模となっています。そのため、何かやるにしても少ないメンバーのため各自の負担が多く、大変な場面もありました。しかしながら少なければ少ないなりによい面もあり、連絡はすぐに取れ、情報交換も比較的短時間で行うことができました。

活動はＤチームと一緒に行い、研修テーマを決め、そのテーマに沿って3名の方による発表、同テーマによるグループ協議・発表、講評といった活動を行いました。また、支援センターの方からの課題に対して各自が解答し、その後、法的根拠も含めた解説があり、大変勉強になりました。

その後、全定に別れ協議に入り、情報交換を実施しました。各校での抱えている課題や、効果ある解決策などお互いに出し合うことにより、副校長同士のつながりができたように感じます。

次年度はＣチームの発表の順番なので、全員であたるように考えています。

常任幹事　林　秀吉（北園）記



8. 中部Ｄ地区副校長会

１．はじめに

学校経営支援センターごとの組織となり３年目となった。今後も一層、学校の課題について情報を交換し、本音で協議できればと思う。

本年度は、常任幹事：大島（大泉）、常任幹事代理：金子（練馬）、幹事補佐：板倉（杉並工）、研究委員長：上原（武蔵丘）、研究部長：佐藤（鷺宮）で地区副校長会を運営した。

副校長会運営を皆様の協力で円滑に行うことができ、幹事一同心から感謝している。

２．活動報告

(1) 副校長連絡会実施後における情報・意見交換

4月22日(火)　多摩社会教育会館
5月13日(火)　第四商業高等学校
6月10日(火)　北特別支援学校
7月10日(木)　桐ヶ丘高等学校
9月16日(火)　多摩社会教育会館
10月14日(火)　北豊島工業高等学校
11月11日(火)　飛鳥高等学校
12月 9日(火)　井草高等学校
1月16日(金)　東京都教職員研修センター
2月10日(火)　戸山高等学校
3月10日(火)　王子第二特別支援学校

(2) 研究活動

当地区は、管理第二研究部会に所属し、今年度、東京都教職員研修センターで、上原徹（鷺宮）研究委員長が発表を行った（平成20年8月28日）。研究主題は、「主幹のTAIMS端末の活用の状況と課題」で、各学校の調査結果を分析し、主幹がTAIMSをより活用するための課題を明らかにした。

３．副校長連絡会における研究協議

今年度の研究協議については、年度当初に地区の副校長にアンケート調査を行い、以下のテーマについて取り組んだ。

・学校経営計画
・教職員の指導力向上
・学校運営の活性化
・特別支援教育と学校評価
・人材育成
・予算編成
・学校経営診断と重点支援校
・人事考課制度
・学校・地域間連携
・教育課程の適正実施
・分掌・教科の成果と課題の提出と次年度学校経営計画

毎回の研究協議に先立ち、各テーマについて3～5人の副校長が5分程度の発表を行った。どの発表も各校の取り組みがよくうかがえる発表であり、校務多忙の中、快く引き受けて下った先生方に心より感謝している。発表後は、小グループに分かれて情報を交換し、協議を行った。その後、各グループの協議内容を発表し、地区全体での情報の共有化を図った。

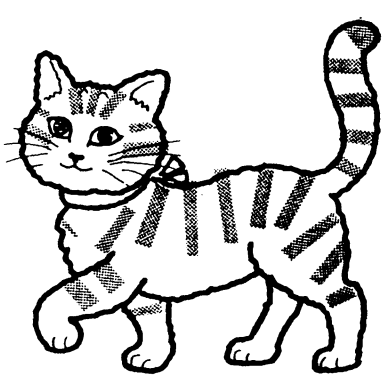
今後は、協議テーマの精選を図り、より一層効果的な情報が交換できるよう工夫されることを望む。

４．次年度に向けた課題

今年度は、協議内容と方法を工夫し、各校の取り組みがお互いに共有できるように努めた。また、副校長会終了後の情報交換も積極的に実施した。その結果、「この点が課題で困っている」「この点はどうなっているか」「この点で失敗した」など、各学校が抱えている課題について本音で話すことができた。

今後とも、本音の情報交換を十分に行い、副校長としての実践力を全体で高めていきたい。

常任幹事　大島　良（大泉）記



9. 西部Ａ地区副校長会

西部Ａ地区常任幹事として

中部Ａ地区の世田谷泉高校（チャレンジスクルール・定時制課程三部制）から、西部Ａ地区の若葉総合高校に異動２年目と言うことで、地区常任幹事を引き受けることにした。

私は、北区の出身で、4 地区と 2 地区の経験が長く、多摩地区は初めての赴任先で、土地勘と学校名と位置関係などまるで不案内なため心配であったが、西部Ａ地区の副校長は 11 名とこじんまりしているので会計も含めてなんとかお役に立てるのではないかと考えた。

今年度西部Ａ地区は、夏の副校長研究協議会の発表順から外れるので、Ａ地区の副校長同士の連携と情報交換を深めていく事を常任幹事の課題にした。

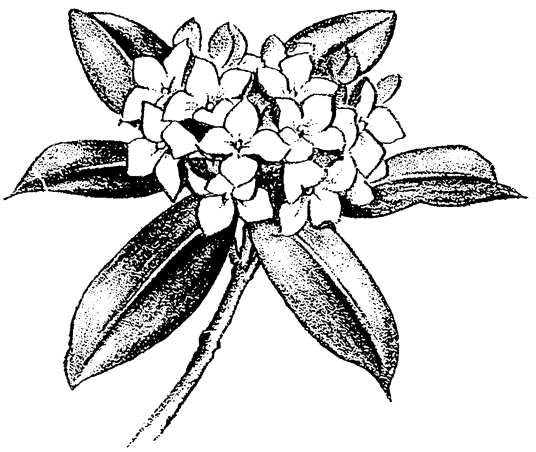
4 月の課題は、地区の名簿づくりと会費の集金と新任者や転任者の歓迎行事である。本部提供の名簿のフォーマットを少し手直しして、TAIMSのメール機能を使って名簿づくりと会費納入の連絡及び歓迎会への出席を呼びかけた。歓迎会は、4 月 22 日の多摩教育会館で行われた副校長連絡会の後に設定した。会場は、Ａ地区の荻野常任幹事（立川）にお願いし支援センターのメンバーにも参加してもらいＡＢ合同で 30 名余りの盛会となった。5 月は、6 月の総会に向けた準備活動だった。6 月の総会では、都庁から近い甲州街道沿いにある家庭クラブ会館に瀬古利彦教育委員を講師に招き「心で走る」をテーマで講演をお願いした。約 60 名が参加した。ザックバランな話しで笑いが絶えなかったが、詳細は割愛する。6 月の副校長会では、町田地区合同説明会の日程をどうするのかが大きな話題となった。昨年度は、10 月 1 日(月)の都民の日に町田地区合同説明会を実施したが、中学校の行事と重なったとみえて来場者が 200 名程度であり、一昨年度に比べて効果が薄かったので思い切って 12 月初めに設定しようということになった。この日程調整には、TAIMS でのメールのやりとりが役立った。

7 月の副校長会で 12 月 7 日(土)の午前中に、町田高校での開催が決まった。また、西部Ａ地区では、年に 1 回 11 月頃に、町田市立中学校副校長会と合同の研究協議会を開催しているとのことで、昨年度の幹事校である町田工業、成瀬から、今年度は永山高校と若葉総合が幹事を引き継ぐことになった。7 月 31 日～8 月 1 日には、第 47 回全国高等学校教頭・副校長研究協議会が福島県の郡山市のビックパレットで開催され、東京からは西部Ａ地区の研究を発表することになった。本来ならば、原稿執筆者の町田高校の中山善弘副校長がする筈であったが、校内事情で、石井哲也副校長が「経営企画室及び学校経営支援センターとの連携について」を発表した。西部Ａ地区からの参加は 1 日だけの参加者を含めて計 6 名であった。

9 月の副校長連絡会は、多摩社会教育会館で行われたが、都合で連絡会終了後、別途会場を西国立駅近くの店に会場を移し懇親会に先立って、地区副校長会の打合せをした。議題は 12 月の町田地区合同個別相談会の会場配置と、時間帯の設定である。また、11 月の町田地区中高副校長連絡協議会の日取りを 11 月 21 日(金)に設定した。その後、この日は、教育課程事前説明会との調整を経て、11 月 20 日(木) 15 時～17 時に町田高校で開催することが決まった。11 月下旬は、中学校側が期末考査に入っており設定しやすいことが分かった。ただ、3 月に都教委から送られてくるＡ表・Ｂ表に都教委の会議日程が載っており、それを確認した上で地区の日程を決めていくことが重要であることを痛感した。次の幹事への引継事項である。10 月 9 日(木)には、町田高校の呼び掛けで、町田市立中学校進路指導研究協議会に、西部Ａ地区の副校長が招かれ高校側の情報を提供した。この席で、中学校側から、高校側の学校説明会の一覧表があると助かるとの要望があったので、各校の協力を経て作成した。次年度の課題は、体験授業の申し込み用紙の統一フォーマットづくりである。11 月に、平成 21 年度の都立高等学校の応募人員が発表され、西部Ａ地区では、成瀬、小川、永山の 3 校が臨時学級増の対象となった。これへの対応策として小川高校が呼びかけて急きょ地区の学校案内の一覧表を作成し、成瀬と合同で八王子市立中学校進路指導研究協議会の場で訴えた。12 月 7 日(日) 10 時～12 時 40 分の設定で「町田地区都立高等学校合同による個別相談会」を開催した。参加者は、200 名程だったが、皆、真剣に相談しており、アンケート結果から

も満足度が高く、宣伝を少し早く、組織的に行うと効果が大きいと思われる。当日は、会場全体の準備の手配が一部不十分であったので、次年度は改善が必要である。12 月のこの時期に合同の個別相談会を設定できたことは、臨時増学級など予測外の出来事に対し、地区常任幹事としてお役に立てて良かったと思う。1～3 月は、次年度の地区の役員人事と、引継の仕事を果たすつもりである。

常任幹事　梶野　茂男（若葉総合）記



10. 西部Ｂ地区副校長会

西部Ｂチーム活動報告

西部Ｂチームは、毎回の副校長連絡会の分科会テーマ別研修会で、各校の実践をＡ4 用紙 1 枚にまとめ、発表・質疑応答を活発に行った。「高校の特別支援教育」「人材育成」「授業改善と校内研修」「キャリア教育」など、自校の課題解決に生かせる内容であった。その中で、特に参考になったことは、「授業改善」の発表で、立川高校が教員同士の授業観察を組織的に行い、校内研修まで発展させている実践であった。さっそく本校にも導入していく方向で検討したいと考えている。

また、「高校の特別支援教育」では、どの学校にも支援を必要とする生徒がいる可能性があることやスクールカウンセラーとは違った支援の枠組みを特別支援学校と協働して作ることができることなどを直接、特別支援学校の副校長から聞けたことは大きな励みとなった。

各校での取組みを情報交換の中で引き出したり、各校の課題解決のためのアンケートを紙面や挙手で気軽に実施し、参考にする雰囲気が西部Ｂチームにはある。

【副校長連絡会終了後の情報交換】

月 1 回の副校長連絡会を有意義に過ごすためには、2 時からの全体会や支援センターからの連絡事項を集中して聞くことが主とした目的であるが、わが西部Ａ・Ｂチームはそれだけではない有意義な場が終了後にある。本音で語りある情報交換を毎回実施している。最初は 5～6 人ぐらいでスタートしたが、毎回人数が増えている。

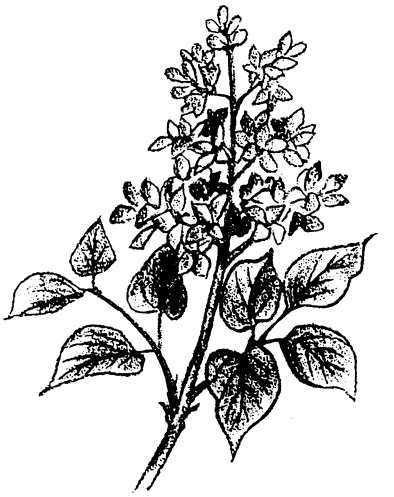
課題のない高校はない。副校長の立場はつらい。一人で悩んでも課題は解決しない。一杯飲みながら、愚痴を言いながら、みんなで共通した話題を語り合う。このことが明日の仕事へのやる気と勇気へとつながる。他校の様子がリーサーチできることも魅力である。人間関係もできてくる。そこで、気軽にわからないことを電話で聞くことができる。そう考えると、5 時過ぎの情報交換は大変貴重な時間・機会である。このチームに入って 2 年目であるが、相談できる仲間が増え、大変頼もしく思っている。

【箱根研修旅行】

副校長連絡会後の情報交換会で、1 泊 2 日の研修旅行ができないかという話題があがった。できるだけ参加しやすい時期を考慮し、1 月 10 日(土) 11 日(日) に箱根湯本で実施することを決定し参加者を募集した。18 名が参加することになった。これは、毎月の副校長連絡会後の情報交換の成果とこのチームの仲のよさの表れだと思う。ロマンスカーの手配や宿の予約担当、集金担当、飲食物担当など、各副校長が適材適所で力を発揮して、計画どおりに実施できた。

日々多忙を極める副校長が、1 泊 2 日行動を共にし、語り合い、おいしい料理を食べ、温泉につかってリフレッシュし、夜更けまで仕事のこと、教員のこと、家族のことなどを話題にした。裸の付き合いの大切さが身にしみた研修旅行であった。日頃見られない特技を思う存分発揮した副校長もいた。浪曲を 15 分間演じたつわものもいて感心した。

今後、人事異動で副校長会のメンバーが入れ替わるが、月 1 回の連絡会後の情報交換会と 1 泊 2 日の研修旅行は継続していきたい。



11. 西部C地区副校長会

1. はじめに

西部C地区は高等学校と、特別支援学校という構成である。高等学校では普通科8校（定時制2課程)、専門学科2校（定時制1課程)、総合学科1校（定時制1課程)、附属中学校1校そして、今年度新たに小金井地区科学技術高校開設準備室が加わり、副校長は12名となった。

今年度は常任幹事に矢作（東久留米総合)、常任幹事代理に井口(保谷)、研究幹事に佐々木(武蔵野北）で運営に当たった。

また、全国高等学校教頭・副校長会会長の錦織副校長が西部Cに新たに加わり、様々な情報を提供していただけるので大変感謝している。

2. 活動報告

(1) 副校長連絡会

副校長連絡会は、下記の通り行われた。

西部C地区は、高等学校と特別支援学校が所轄されているが、今年度の地区別会議は完全に別途で行われた。昨年度は合同で行う場もあり、お互いに参考になる情報交換ができたが、実務内容が大きく異なるために一緒に行うには難しい点も多かった。一方、高等学校でも発達障害など特別支援教育に取り組む体制作りを進めるなかで、高等学校と特別支援学校の交流の場の必要性を感じた。

また、全日制と定時制の副校長会の統合など今後の動向について、全・定で共通理解を持つことができた。

西部Cでは、今年は副校長連絡会後の情報交換会を充実させていくことを一つの目標にしたが、副校長の職務の多忙さもあり、いつも数名での情報交換会となってしまったのが残念である。しかし、特別支援学校の先生も参加してくれたり、時には西部Dの情報交換会に参加させてもらったりして有意義な時間を持つことができた。次年度はこの件についても体制作りをしていきたい。

副校長連絡会　開催日程

① 4月22日(火)　多摩社会教育会館
② 5月13日(火)　東村山高校
③ 6月10日(火)　武蔵高校
④ 7月10日(木)　小平西高校
⑤ 9月16日(火)　多摩社会教育会館
⑥ 10月14日(火) 小平南高校
⑦ 11月11日(火) 羽村高校
⑧ 12月9日(火)　田無工業高校
⑨ 1月16日(金)　教職員研修センター
⑩ 2月10日(火)　東久留米総合高校
⑪ 3月10日(火)　小平高校

(2) 研究活動

今年度は副校長研究協議会の発表に当たっていないため、次年度の研究テーマをどうするか、9月くらいから話題にしていったが、実際にはなかなかテーマが絞れなかった。

年度当初に計画をたて、1年間を掛けて調査・研究をしなければ副校長会の意義を問われかねない。一方、日々の職務に追われなかなか手が回らないのも実情としてある。

この1年、研究活動の取り組みが不十分であったと大いに反省している。

(3) その他

9地区合同説明会を10月11日(土)に東久留米高校で開催した。今年度2回目となるが、西部Cの高等学校を中心に16校が集まった。昨年度はブース形式の個別相談形式のみであったが、今年度は全体説明会も加えた。参加人数は約450名となったが、昨年度に比べ減少したのが残念である。今後、開催時期や会場校など検討すべき課題は多いが、北多摩地区として生徒募集のために力を合わせていく必要は高いと考えている。

3. 終わりに

月1回開催される副校長連絡会は情報交換の場としても有意義な機会である。各校が抱える課題も他校の副校長たちの知恵や経験を借りることにより解決できる場合が多い。そのためには月1回の連絡会の場だけでなく、副校長間のネットワーク作りがより大切になってくるであろう。

常任幹事　矢作　俊郎（東久留米総合）記

12. 西部Ｄ地区副校長会

● 地区副校長会の組織について

20年度西部Ｄ地区は19校22名の副校長で構成されている。役員は、西部Ｄ地区への着任順に選出しており、今年度は、常任幹事に西塚（小平南）、常任研究幹事に熊谷（福生）、研究幹事に渕脇（拝島）、常任幹事代理に早山（東大和南）、幹事補佐に濱田（東村山西）が担当することとなった。

支援センター組織が3年目となり、支所のメンバーには大きな変化があった。支所長の異動をはじめ、Ｄ地区は、統括、支援主事の3名が新メンバーとなり、4月から新たな雰囲気でスタートした。

支所長のあいさつでは、①学校経営計画実現に向けて副校長としてのリーダーシップを発揮してほしい、②個人情報紛失等の服務管理の徹底、③ミドルリーダー・若手の育成を意図的・計画的にすすめてほしいの3点について、特に取り組みをとのお話しがあった。以下に月別の取り組み内容を記す。

４月

「年度当初の経営戦略～学校経営計画の実現に向けた副校長の工夫について～」「情報セキュリティの校内体制の確立について」「特別支援教育コーディネーターの活用について」のテーマで事例発表と情報交換が行われた。特に情報セキュリティについては、具体的な参考事例として特に各校で活用できる内容であった。

５月

「人づくり、チームづくり」のテーマで事例発表と情報交換を行った。また、7月の人権教育研究協議会参加者の確認と夏季休業中の進学合同講習会「たまのつどい」実施案が示された。

６月

「学校改革・改善への取り組み」のテーマで事例発表と情報交換を行った。また、「たまのつどい」実施要項の確認とと各校への参加依頼があった。さらに8月の都副校長研究協議会の発表内容の確認と都副校長会総会への出席依頼、全国教頭会への参加呼びかけと参加確認が行われた。

７月

「学校経営計画の中間総括の活用について」のテーマで事例発表と情報交換が行われた。また、「たまのつどい」の講師追加依頼があった。

８月

4日～6日の3日間、多摩工業高校において進学合同講習「たまのつどい」が開催された。8月28日、都副校長研究協議会で発表を行った。

９月

「学校広報の工夫について」のテーマで事例発表と情報交換を行った。特に学校の募集対策に課題がある学校への参考となる事例ということで、各校の取り組み等が活発に話し合われた。また、8月の研究協議会の報告が行われた。

10月

ミニレクチャーとして「予算編成を学校経営にどう生かすか」のテーマでＤ地区担当副参事より事例紹介があり、情報交換が行われた。

11月

ミニレクチャーとして「学校評価を生かした学校経営のマネジメント」のテーマでＣ地区担当副参事より事例紹介があり、情報交換が行われた。

12月

筑波大学准教授の川間健之介氏による講演会「青年期における生徒理解について～発達障害のある生徒への対応を中心に～」が行われた。

１月

西部学校経営支援センター所長より「困った上司とのつきあい方」について紹介があった。「学校運営の奥義とは…」のテーマで事例発表と情報交換を行った。

２月

「教員を育てる業績評価」のテーマで事例発表と情報交換を行った。情報交換の中で自己申告書（最終申告）の他に各教員の取組状況についての申告書を同時に提出させて面接を実施している例が報告された。

◎西部Ｄ地区では副校長の連携を高めるため、支援センター地区担当4名にもご参加いただき、連絡会終了後に教育懇談会を毎回行っている。翌日からの活力とチームとしての団結力を高めることができたと思う。

常任幹事　西塚　春義（小平南）記

5. 学科別副校長会報告

1. 工業科副校長会

平成21年度は都立工業高等学校全日制(含む昼間定時制高校)課程23校28名で構成される。

工業科副校長会の開催は年間 11 回副校長連絡会の午前中を中心に実施した。内容は①東京都教育委員会指導部高等学校教育指導課からの連絡と協議、②公務の連絡と協議、③工業校長会からの活動内容や案件④研究部会の研究協議、⑤情報交換及び工業技術教育に関する研修など継続的に行われた。

本年度は、工業高校の活性化に繋がる広報活動の充実、夏季休業中 10 日間実施する「技能型インターンシップ」の実施が新たな事業開始された。昨年に引き続き、「ものづくり教育」の「わくわくどきどき夏休み工作スタジオ」が拠点校を中心に実施され予定参加者を大幅にオバーし大盛況となった。また、全工業高校で 10 月 1 日に一斉に「ものづくりフェア in 2008」も開催した。

また、平成21年度には、都立高校導入が決定した ITC (全教職員 PC 配備) 計画と共に、工業高校 PC のネットワーク化の取組みも開始された。

これらの事業を進める上で、教育委員会、校長会、工業高校現場の連絡・調整を実施し、連携を強めるための活動が必要であり、本会の重要性は、ますます増すと考えられる。

本年は、会長1名、副会長1名、幹事3名を選任した。

なお、研究組織は例年通り、「工業教育研究部会」「管理運営研究部会」「生徒指導研究部会」の3部会で、工業の特色を生かした内容で取り組んだ。

第1回定例会

日時　平成20年4月22日(火)　9:00～10:00
会場　多摩社会教育会館　310研修室
内容　1. 平成20年度役員の選出について
　　2. 平成20年度都教委担当について
　　3. 技能型インターンシップ生徒推薦

第2回定例会

日時　平成20年5月13日(火)　10:00～11:50
会場　都立工芸高校　会議室
内容　1. 指導部高等学校教育指導課連絡
　　・都専門高校予算について
　　・「夏休み工作スタジオ」について
　　2. 拠点工実習の取組みについて
　　3. 10月1日ものづくりフェアについて

第3回定例会

日時　平成20年6月10日(火)　10:00～11:50
会場　都立工芸高校　会議室
内容　1. 指導部高等学校教育指導課連絡
　　・「夏休み工作スタジオ」について
　　・「技能型インターンシップ」について
　　2. ITC 計画と工業高校ネットワークについて
　　3. 情報セキュリティーについて

第4回定例会

日時　平成20年7月10日(木)　10:00～11:50
会場　都立工芸高校　会議室
内容　1. 指導部高等学校教育指導課連絡
　　・「技能型インターンシップ」について
　　2. ITC 計画と工業高校ネットワークについて

第5回定例会

日時　平成20年9月16日(火)　9:00～10:00
会場　多摩社会教育会館　310研修室
内容　1.「技能型インターンシップ」について
　　2. ものづくり in 2008 の取組について

第6回定例会

日時　平成20年10月14日(火)　10:30～11:50
会場　都立工芸高校　会議室
内容　1. 指導部高等学校教育指導課連絡
　　・「技能型インターンシップ」について
　　・専門高校発表会について
　　・ものづくり人材育成プログラムについて
　　2. ATH 構想に関するアンケートにつ

いて

第 7 回定例会

日時　平成 20 年 11 月 11 日(火)10:00～11:50
会場　都立工芸高校　会議室
内容　1. 指導部高等学校教育指導課連絡
　　・専門高校発表会について
　　2. 工業科生徒研究発表大会について
　　3. 教育 ICT について
　　4. 中学校の土曜日授業の実態について

第 8 回定例会

日時　平成 20 年 12 月 9 日(火)10:00～11:50
会場　都立工芸高校　会議室
内容　1. 工業校長会より
　　2. ICT、TAIMS、工業用ネットワークについて
　　3. 指導部高等学校教育指導課連絡
　　・科学技術週間への協力について

第 9 回定例会

日時　平成 20 年 1 月 16 日(火)　8:30～9:10
会場　都立工芸高校　会議室
内容　1. 指導部高等学校教育指導課連絡
　　・平成 21 年度「技能型インターンシップ」受入企業開拓の依頼について
　　2. 研究部会発表会について

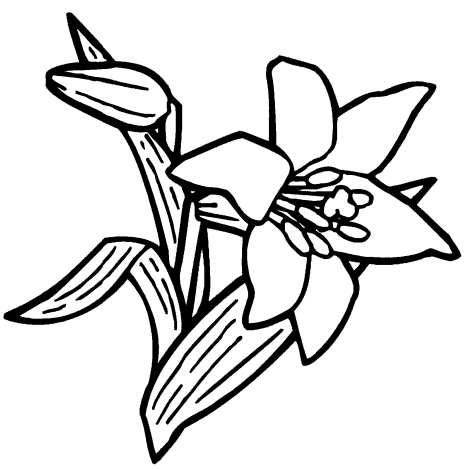
第 10 回定例会

日時　平成20年2月10日(火)　10:00～11:50
会場　都立工芸高校　会議室
内容　1. 指導部高等学校教育指導課連絡
　　・平成 21 年度「技能型インターンシップ」について
　　・ものづくり教育事業計画について
　　・専門高校生成果発表大会について
　　2. 研究部会発表会
　　①工業教育研究部会
　　②生活指導研究部会
　　③管理運営研究部会

第 11 回定例会

日時　平成 20 年 3 月 10 日(火)　10:00～11:50
会場　都立工芸高校　会議室
内容　1. 指導部高等学校教育指導課連絡
　　2. 平成 21 年度役員分担について
　　3. 研究部会発表資料について
　　4. 講演会

常任幹事　守屋　誠一（墨田工）記



2. 商業科副校長会

東京都商業関係高等学校副校長会は、都教委より統括指導主事及び指導主事の参加をいただき、会員学校数13校及び開設準備校1校を加え、17名のメンバーで、支援センター別副校長連絡会当日の午前中に全商会館（全国商業高等学校協会）を定例会場として実施している。

定例会では、都教委からの連絡・報告、研究協議、情報交換等を行い、商業関係高校の活性化の方策を研究している。

平成20年度、都立の全日制課程の商業高校は、本年度末に閉校となる2校を含め、商業高校11校及び普通科併設校1校、学校改革で再編されたビジネスコミュニケーション科2校（1校は本年度開設準備平成21年4月開校）の14校であった。

第1回定例会　全商会館

平成20年5月13日（火）10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡
- 教育庁指導部高等学校教育指導課より
- 教職員研修センターより

(2) 幹事会報告

(3) 東京都商業教育研究会

(4) 情報交換会等
- 平成20年度活動方針、年間計画
- 平成20年度東京教師道場　他
- 東京都商業高等学校連盟の会費納入

第2回定例会　全商会館

平成20年6月10日（火）10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡
- 教育庁指導部高等学校教育指導課より
- 教職員研修センターより

(2) 幹事会報告

(3) 東京都商業教育研究会
- 6月27日（金）都商研総会・研究協議会

(4) 情報交換会等
- 個人情報管理の方法について
- 「都立商業高校の明日を考える会」

第3回定例会　全商会館

平成20年7月10日（木）10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡
- 教育庁指導部高等学校教育指導課より
- 教職員研修センターより
  課題別選択研修への参加者急募

(2) 幹事会報告
- 総会6月20日（金）家庭クラブ会館
  総会終了後、瀬古教育委員会委員の講演

(3) 東京都商業教育研究会
- 都商研総会　6月27日（金）荒川商業

(4) 情報交換会等
- 商高連定期総会・協議会について
- 3月卒業式・閉校式の調査依頼
- 部活動合宿費の適正な管理について

第4回定例会　全商会館

平成20年10月14日（火）10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡
- 教育庁指導部高等学校教育指導課より

(2) 幹事会報告

(3) 東京都商業教育研究会
- 都商研英語スピーチコンテスト
  11月8日江商

(4) 情報交換会等
- 募集対策・学校見学等来校状況
- 商業高校ネットワーク（四商サーバー）の活用

第5回定例会　全商会館

平成20年11月11日（火）10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡
- 教育庁指導部高等学校教育指導課より
- 教職員研修センターより

(2) 幹事会報告

(3) 東京都商業教育研究会
- 都立商業高等学校進路指導研究協議会
  12月11日(木)15時～17時　葛飾商業
- 東京都検定委員会商業経済部広告研修会
  「スポーツにおけるマーケティングの役割」
  12月9日(火)15時～17時浜離宮プラザ
- 全国商業経済教育研究協議会・研究大会
  平成21年3月21日(土)22日(日)

(4) 情報交換会等
- 制服の規定について（制服の見直し検討）
- セーター・通学バックの規定について

第 6 回定例会　全商会館

平成 20 年 12 月 9 日（火）10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡

・教育庁指導部高等学校教育指導課より

(2) 幹事会報告

・予算の使い方

(3) 東京都商業教育研究会

・東京都商業教育研究会会誌「東京都商業教育」の作成について

(4) 情報交換会等

・研究協議会報告　生活：三商

進路：葛商　教務：荒商（8 月）

・募集対策（体験入学、学校説明会）

第 7 回定例会　全商会館

平成 21 年 2 月 10 日（火）10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡

・教育庁指導部高等学校教育指導課より

・教職員研修センターより

商業高校間ネットワーク連絡会の開催

(2) 幹事会報告

(3) 東京都商業教育研究会

(4) 情報交換会等

・商業高校の PR（学校説明会の実施方法）

・校内 ITC 化への対応

第 8 回定例会　全商会館

平成 21 年 3 月 10 日（火）10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡

・教育庁指導部高等学校教育指導課より

・教職員研修センターより

(2) 幹事会報告

・平成 21 年度商業関係高等学校副校長会の活動方針及び役員について

(3) 東京都商業教育研究会

(4) 情報交換会等

・商業高校の活性化について

以上、8 回の定例会を実施した。

平成 20 年末、高等学校学習指導要領（案）が示された。科目構成も、現行 17 科目から 20 科目構成されることとなるようである。主な改善事項として、・経済のサービス化　・グローバル化、ICT の急速な進展等への対応　・ビジネスの諸活動を主体的・合理的に行う実践力や地域産業の振興など起業家精神を身に付けた人材の育成への対応　・職業人としての倫理観や遵法精神などの育成　が改訂のポイントとして示された。科目として、整理統合される科目の他に、新設科目として、「商品開発」「ビジネス経済」「管理会計」「ビジネス情報管理」が示され、ビジネス社会で活躍するために必要となる専門教科としての基礎基本の習得とともに、商業としての専門性の深化についても求められていくことになる。

今年度、商業副校長会で繰り返し話題に上り、協議の項目ともなった事項は、生徒の志願状況や募集対策についてである。商業高校で学ぶ強い目的意識を持った生徒を、いかに集めるかということが、専門性を高める指導をすすめる立場にある教員側の意欲向上にもつながることとなるだろう。

しかし、商業高校は高校改革の対象となり、今年度末に 2 校の伝統ある学校が閉校を迎える。21 年度末にも定時制課程が残っている商業高校が閉校となる。次年度 21 年度においては、商業高校はいかにあるべきであるか、商業高校を活性化させ発展させるためにはいかにすべきか、ということについて取り組んでいくことが課題となる。

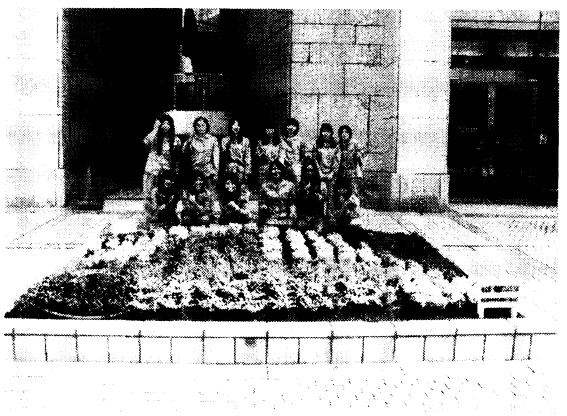
そのためにも、東京都商業関係高等学校副校長会において議論や情報交換を活発に行い、商業高校活性化や商業教育の発展のために力を結集する会としていきたいと考える。

常任幹事　中神　孝典（赤羽商業）記

3. 農業科副校長会

農業系副校長連絡会は、毎月1回第2週目の火曜日、副校長連絡会のある午前中に開催されている。教育庁指導部高等学校教育指導課（農業系担当佐藤聖一指導主事）からの開催通知により、会場校として都立農業高校・都立農芸高校・都立園芸高校等で行われた。参加校は、会場校を含め島嶼の都立大島高校・都立三宅高校・都立八丈高校を含め、都立農産高校・都立瑞穂農芸高校・都立青梅総合高校と各定時制高校・都立農林（定時制）高校である。それぞれの各校の副校長が集まって農業高校における課題や問題点等を話し合ってきた。特に各学校での取組み状況、成果を上げている点の情報交換等は大変参考になっている。

農業高校の全体の活動として生徒による都庁花壇の春・秋の植栽が行なわれ、各専科の技量が生かされ、みごとなうつくしい花壇となっている。



今年度も三宅島緑化プロジェクトが、第7回目が6月6日（金）から6月8日（日）と第8回目が11月21日（金）から11月23日（日）に都立園芸高校が中心になって実施された。多くの農業系の生徒が参加した。この緑化プロジェクトの目的は、生徒が「自己を確立し、成人となる基礎を養う段階にいる高校生が、自ら学んでいる専門的な知識・技術を生かして三宅島の緑化や復興等のための活動を行い、ボランティア活動に関する理解と実践的な態度を養うとともに、三宅島住民や東京都立三宅高等学校生徒等との交流を行い、豊かな心と進んで社会に貢献しようとする態度を身に付けさせる。」ことでる。参加した農業系の生徒達は、このことを実践し、豊かな心と進んで社会に貢献しようとする積極性が出てきている。

農業高校の活動として日本農業クラブ全国大会が10月21日（火）から23日（木）まで佐賀県で実施された。八丈高校と農業高校6校が参加していい結果を出した。

9月と12月の農業系の副校長会で都立園芸高校・都立瑞穂農芸高校から農業高校教育研究会専門部会の開催（教職員研修センター認定の農業系実習実技に関するスキルアップ研修会A）についての説明があった。10月14日（火）に都立園芸高校で「パン（プレッツェル）」の製造実習・研究協議が行われた。また、都立瑞穂農芸高校では、2月10日（火）に山崎製パン株式会社武蔵野工場訪問し、現場の工場長より衛生管理・品質管理への取り組みや山崎製パンの技術開発・製品開発等の説明を聞いた。

10月に農業系の副校長連絡会でアグリフェスタのことについて、昨年度の課題点等を話し合った。今年度の担当校は、都立農芸高校であり、毎年実施している。11月2日（日）、3日（月）に第37回東京都農業祭（アグリフェスタ）が、明治神宮宝物殿前広場で実施された。これは、都立農業高校の生産品展示や学校紹介などを通して、より多くの都民の方々に農業教育に対する理解を深めていただくものである。今年度も都民の方々に農業系の高校をパネルや紹介資料を通して理解していただき、また、実習生産品を買っていただき大変好評を得た。

11月の農業系副校長連絡会で「平成20年度専門高校・総合学科高校学習成果発表会」について話し合った。これは、都立専門高校（農業・工業・産業・商業・家庭・福祉）及び総合学科高校の特色や取組を中学生や保護者をはじめ、広く都民に紹介するため、学習成果の発表や生徒の作品展示・製品販売等を行うものである。今年度は、12月14日（日）に教職員研修センター視聴覚ホール及び1階エントランスホールで開会された。

農業系高校を代表して都立瑞穂農芸高校の食品科の生徒が、米のパンを作るため、強力小麦粉にうるち米やもち米を混合する割合を変えながら、室温の影響や発酵のシステムを科学的に研究したこと等を発表した。1階ではパネルや「学校案内」のパンフレット等を通して農業高校を紹介した。

岩坪　光吉（瑞穂農芸）記

6．研究部会報告

1．管理運営研究部会

管理運営部会での研究は、常に時代を見通しながら、その中でも喫緊の問題に触れ、副校長としての責務と責任を共通の話題として、取り上げてきた。

今年度は、その中でも 2 つ「主幹教諭」と「TAIMS 端末」の話題を取り上げ、現状認識と今後に向けて、いろいろな課題に積極的に取り組む研究を行った。

管理運営研究部会は、2 つの委員会に分かれ、今年度は、中部Ｂと中部Ｄが受け持っている。しかし、8 月下旬の研究発表に向けて、各委員会は 4 月から発足して研究を開始しているわけではない。実は、これらの研究は、その前年度から、計画され、企画され、進行管理され、必要に応じてアンケートが実施され、副校長連絡会を中心に会合が進められ、すでに副校長の仕事のツールにもなった TAIMS を頻繁に活用しながら行われている。しかし、副校長の激務の中で研究の時間を割くことはきわめて困難であることは言うまでもない。

また、委員会によっては、2～3 年で異動する副校長の実態を補完しつつ、経験豊富な副校長から初めての副校長を経験した者という中で変化が早いメンバーを活用し、研究継続の必要性から、同じ支援センター所や支所等で合同で研究を進めたり、研究を助け合ったり、常にできるだけ多くの副校長が常に共通の認識を持つように工夫している姿も見られる。

特に、各委員会をまとめられた委員長の副校長先生、実際の研究に携わった研究担当の副校長の先生方に、激務の中での研究に、紙面をお借りして感謝いたします。

さて、管理第一委員会は、中部Ｂが中心となり、「主幹制度」について扱った。

主幹制度は、6 年目を迎え、本年度より主幹教諭と職名が変更された。

この間の主幹制度の変化について、中部Ａと中部Ｂチームが合同で、データを収集し、分析し、その成果を示し、課題を明らかにすることで、今後の主幹教諭のあり方について、副校長としての役割を明らかにしている。

第 2 委員会は、中部Ｄが中心となって、「主幹教諭による TAIMS 端末」の活用について検証をした。

18 年度より主幹教諭に配置された TAIMS 端末であるが、業務の効率化と事務作業の軽減に向けて、中部Ｃチームと中部Ｄチームが合同で、データを収集し、分析し、TAIMS 利用上の成果と課題についてまとめた。

詳細については、研究協議会報告（第 20 号平成 21 年 2 月発刊）と、このページ以降の管理運営委員会報告をお読みいただきたい。

この 2 つの研究は、副校長に、学校経営者としての目線と学校運営を直に携わる者として、大切な情報と智恵を授けられたと思う。

特に、主幹教諭 6 年目を迎えて、まだまだ主幹教諭が各学校の定数を十分満たしていない現状もあり、主幹教諭の役割が拡大する中で、すでに主幹教諭が大きな役割を演じている学校の情報が、多くの副校長の参考になった。

次年度から主任教諭制度が発足する。職制が細分化する中で、副校長としての役割も複雑化していくと思われる。我々副校長自身が先を見通し、これらの情報交換と今後の研究も必要であろう。

また、主幹教諭に配置された TAIMS の活用にも多くの課題があり、今後、配備される全教員への TAIMS 配置への予想される課題にもつながっている。

TAIMS 端末利用が、USB などによる個人情報流出防止などの喫緊の課題解決となり、TAIMS 端末利用による校内データの管理や活用に、十分生かされるように、この活用の数年先を見通しながら、その実施に向けて、具体的な方策を我々副校長が先頭を切って検討し、その情報交換を多忙な中、頻繁に継続していくことが大切であると思っている。

部長　下條　隆史（駒場）記

第１委員会（学校管理関係）

都立高校では、今人材育成がこれまで以上に大きな課題となっている。特に管理職と教員の中間の職としての主幹（H20 年度より主幹教諭、以後主幹と記す）の果たす役割は大きい。

主幹は、副校長と教諭の間に位置する職であり、学校改革を担う新たな職として設けられた。主幹制度が始まってから 6 年目を迎える。都立高等学校中部Ｂ地区副校長会では、主幹制度 5 年目を終えてその現状と課題について、5 年間の総括として研究を行った。

研究のねらいは、主幹の動きを日ごろから良く見ている副校長が、現場から得られる情報を分析し、副校長の立場から主幹制度を学校改革により効果的に活用していくための方途を探ることにあった。

各校の主幹について、中部地区の高等学校全日制課程の副校長より、これまでの経験や現状についてアンケート調査し、分析しまとめた。19 年度末には、現在の主幹の現状と課題について、中部地区の全日制高等学校の副校長にアンケート調査を行った。このアンケートでは現任校の主幹についての課題と主幹制度について都への要望が多かった。

さらに、平成 20 年 4 月には、「日頃どのように主幹とのコミュニケーションを持っているか」「主幹自身が、学校運営で力点を置いている点」「主幹が、学校の改善に寄与した事例」「副校長が主幹に期待していること」「主幹の育成、発掘について」の項目でアンケート調査を行った。十分な数の回答を得られたとは言えないが、各校の副校長からの貴重な生の声が寄せられた。

東京都で主幹制度が始まった平成 15 年度の調査では 138 校の副校長（当時は教頭）から回答を得た。19 年度は、12 月に行い 27 校、82 名の主幹について回答を得た。数値項目では可能な限り対比させることにし、記述欄からは、記載された内容を関連あるものをまとめる形で整理した。

調査項目は、①主幹の現状、②主幹の指導、③副校長が主幹に期待していること、④主幹自身が心がけていること、力点をおいていること、⑤実際に主幹が行っていることや成果をおさめた事例で、これらを調査・分析した。

主幹の発掘や主幹の育成について、各校の副校長から多くの取組みやその工夫や苦労を伺うことができた。学校によってさまざまな状況があり、発掘に苦労している姿も浮き彫りになっている。

「主幹が学校の組織化にとって重要なポストであることを意識付け、主幹として資質のある教員を見つけ粘り強く説得する」、「能力や資質に合わせて新たな仕事をまかせ達成を促す」、「副校長が、主幹に任せる業務の内容の意義を理解させ、日ごろの業務の中で自信を与えるとともに、主幹のモチベーションを維持させていく」等主幹としての意識を醸成していくことの大切さが示されていた。

主幹制度が始まって 5 年を経て、学校の中で管理職対教員の鍋蓋構造が改善されているという意味で、主幹の定着を見ることができた。

本研究の内容は、平成 20 年 8 月 28 日（木）副校長研究協議会（於　都教職員研修センター）にて三鷹高校の安部卓郎副校長が発表した

講評は、前都立町田高等学校長小栗洋先生より、人材育成とりわけ主幹主任の育成が重要であり、学校の新しいプロジェクトに主幹を係らせる取組みの事例など本研究にヒントが盛り込まれているとのお言葉を頂いた。

今回の研究は終りでなく、人材育成は今後も重要なテーマとなっていく。さらに研究を進めて行きたい。

本研究を通して、貴重な意見を寄せていただいた中部地区の高等学校の副校長、学校経営支援センターの皆様、都立高等学校副校長会事務局の皆様に対して、心よりお礼申し上げます。

委員長　小林　淑訓（大崎）記

第２委員会（職務・待遇）

１　はじめに

平成18年度より、主幹教諭の業務の効率化、事務的業務の軽減を目指して、主幹教諭にTAIMS 端末が配置された。そこで、本研究部では、主幹教諭の業務の効率化と事務的業務の軽減に向けて、TAIMS 末端の活用がどのように図られているのか、その現状と課題について調査した。調査は、平成19年12月から平成20年3月上旬にかけて、中部Ｃ・Ｄチームの22校の主幹教諭に対して、アンケート方式で行った。状況の実状について、中部Ｃ、Ｄチームの主幹に対して活用状況の調査を行った。

２　研究の経緯

毎月の副校長連絡会での協議内容は、以下の通りである。

(1) 第１回
　平成20年4月22日（火）多摩社教
　○日程、研究方法、研究テーマの確認

(2) 第２回
　平成20年5月13日（火）第四商業
　○日程とアンケート規模の検討

(3) 第３回
　平成20年6月10日（火）北特別支援
　○アンケート内容の検討、役割分担

(4) 第４回
　平成20年7月10日（木）桐ヶ丘
　○副校長研究協議会での発表準備

(5) 第５回
　平成20年8月28日（木）工芸高校
　○副校長研究協議会で平成 20 年度のまとめを発表

(6) 第６回
　平成20年9月16日（火）多摩社教
　○副校長研究協議会での発表の報告

(7) 第７回
　平成20年10月14日（火）
　○アンケート内容の検討

(8) 第８回
　平成20年11月11日（火）
　○アンケート内容の説明

(9) 第９回
　平成20年12月9日（火）
　○アンケート内容の検討

(10) 第10回
　○アンケート分析

３　まとめ

平成21年度からは、主幹教諭だけでなく、教員１人につき１台のパソコンの配置が実現する予定である。教員のTAIMS端末の活用の推進に関して、指導的役割を果たさなければならないのは主幹教諭である。一方、生徒の氏名、住所、成績等の個人情報の入ったUSBメモリーの流出事故も後を絶たない。教職員の情報モラルの一層の向上が求められている。

今回の調査は、平成19年度に行った。現状は少し変わってきていると思われるが、今回の主幹教諭によるTAIMS端末の活用に関する調査の結果から、まだまだ、課題が残されていると思われる。教育管理職等の任用・育成のありかた検討委員会第二次報告「副校長・主幹教諭の育成及び職のあり方について」の中で、「校務の縮減と効率化について、TAIMS の有効活用とともに考える必要があろう。」と述べられている。今後とも、各学校の教育活動の充実のため、TAIMS端末の活用の一層の工夫を図り、各学校の課題解決を図っていくことが必要である。

部長　佐藤　洋彰（鷺宮）記

2. 高校教育研究部会

8月28日に行われた副校長研修会に向けて、第1委員会、第2委員会ともに準備を進めた。

西部ＡＢチームによる第1研究委員会では、昨年度東部ＡＢチームの行った東京都設定科目「奉仕」の実施に至るまでの課題と副校長の役割についての調査研究をうけ、実施1年目の状況と課題、また副校長がどのような役割を果たしているかを調査研究し、「奉仕体験活動の実践と副校長の役割」というテーマで、研究協議会での提案を行った。

教育支援コーディネーターの活用の仕方や、東京都教育委員会が作成した準教科書「奉仕」がどのように活用されているのか、また、実際に「奉仕」の授業をしてみて、次年度はどのようにしていくのかを検討する校内体制などについて、アンケート調査をおこない分析していった。

心配された体験活動の受け入れ先については、やはり副校長が率先して開拓など行ってきたようだ。また、教育支援コーディネーターは35％の活用率で、活用しているところも事前の打合せ等にかなりの時間がさかれて大変なようである。

東京都教育委員会作成の準教科書については、初めての「奉仕」の授業をどのようにして実施したらいいのかという方向性を現場に示し大きな役割を果たした事がわかる。更に良いテキストにするためのフィードバックも必要であろう。

全国に先駆けて導入された教科「奉仕」であるが、体験活動などを通じ、特に地域からの学校や生徒を見る目が変わり、好意的に受けとめてくれるようなったところが多い。始まって二年目を迎え、更に充実した内容の教科・科目とするために副校長に課せられた役割はやはり大きいといえる。

東部ＡＢチームによる第2研究委員会では、前年度の「選ばれる学校を目指して」から一歩踏み込んで「魅力ある学校づくり」について、7つの事例についてとりあげ、研究協議会での提案を行った。

各学校とも様々な課題をかかえているが、それをどのように克服し、さらに魅力ある学校とするためにどのような努力や工夫をしてるかを発表していただいた。

① 進学指導重点校として、またスーパーサイエンスハイスクールとしての取り組みを活かして。
② 中堅進学校としての利点を活かして。
③ 中高一貫教育校としての利点を活かして。
④ 狭隘な校地を補う内部努力をして達成した実績を活かして。
⑤ 地域に根ざし、地域とともに歩む取り組みを活かして。
⑥ 通学に便利な立地条件と専門高校としての特質を活かして。
⑦ 長い歴史と重点支援校の指定と専門高校としての特色を活かして。

地域に根ざし、地域に支持され、育てられ、期待されるために何をしたらいいかという視点で学校づくりをし、校内での魅力ある学校づくりの努力をいかに地域住民に分かってもらえるか、そのための積極的なPR活動が大切であり、教職員の協力体制を作るために副校長が尽力しなくてはならないことがあらためて認識された。

なお、副校長研修会での指導・講評は、都立小平南高等学校長の田中政美先生からいただいた。

第1委員会の「奉仕体験活動の実践と副校長の役割」については、校長研究会でもとりあげられ、体験活動場所については社会福祉協議会や教育委員会に話をもっていくとよい。また、奉仕が実施された今、副校長の役割は、進行管理と安全の確保であり、次年度に向けてどのように人材を確保するかに留意する必要があるとの助言をいただいた。

第2委員会の「魅力ある学校づくり」については、各学校ともさまざまな努力をしているようであるが、必要なのは経営感覚を持ち合わせていることである。そしてその経営感覚の視点として必要なことは、①教育課程、②生活指導、③部活動と学校行事、④進路実績である。というお話をいただいた。

部長　志村　修司（北多摩）記

第１委員会（教育課程）

研究テーマ

奉仕体験活動の実践と副校長の役割

１　はじめに

昨年度の本委員会の研究報告では、「奉仕」必修化初年度に向けての各学校の取組や課題を詳細に調査するとともに、課題解決に向けての副校長の役割について提言が行われた。

本委員会では、昨年度に引き続き、必修化１年目の「奉仕」について、各学校における取組の現状を調査するとともに、副校長がどのような役割を果たしてきたかを把握し、課題を整理して改善の方策を示すこととした。

２　研究の経過

(1) 研究方法の決定

全日制の副校長に昨年度と同様の調査を行うことで、本格実施１年目の各校の取組の現状と課題及び解決策を見出すこととした。

今年度は新たに奉仕体験の活動先を開拓する際に教育支援コーディネーターの活用の有無や、「奉仕」終了後の生徒や教員等の変容について調査項目を加えた。

(2) 研究の進め方

11月に研究を担う西部Ｂチームの４校の副校長が決定し、昨年度の研究報告を参考にしながら、研究日程の検討を行った。研究を進めていく中で、各学校の実態を把握し、実施の形態によって生じる課題、共通に生じる課題等を把握するために昨年度に引き続きアンケート調査を実施することとした。

12月に調査項目の再検討、調査内容の集計方法の工夫、原稿のレイアウト等を検討した。

1～2 月に副校長会の場でのアンケートの実施、TAIMS によるアンケートの送信などにより、全日制都立高校副校長に調査を依頼した。

3 月に調査内容の集計を行うとともに、自由記述等の考察、分析等を行った。

4～5 月に再度アンケート結果の分析を行い、課題を明らかにし、6 月に発表用原稿を完成し、提出した。

３　副校長研究協議会における発表

8 月 29 日の副校長研究協議会で、志村修司北多摩高校副校長が発表を担当した。

今年度新たに調査した教育支援コーディネーターを活用してみての課題としては、「協議時間の制約」、「かえって煩わしくなるリスクあり」、「生徒理解と実施のねらいの周知」、「こちらの意図がはっきりしていないと難しい」、「講演内容が難しい」などが挙げられていた。

しかし、活用しているところでは、「よいアイディアをいただいており、講演もしていただいた」、「事前の指導での講演、奉仕体験活動発表会での講評等、必要な存在である」、「実施前の打合せ、入念な準備」、「大変役立っている」など良好な反応で、特に体験学習の場所が多岐にわたっているところほどその傾向がある。教育支援コーディネーターを活用していない理由としては、「地域での活動で活動場所が十分確保できているので必要ない」というところが多い。

奉仕実施上の課題は、次年度以降の内容の検討が 29.5%と多い。当該年度の担当者はその学年の奉仕の実施に苦心されていて、次年度まで頭が回らないのが現状である。

また、教員の意識改革（25.0％）も大きな問題である。また、校内体制の整備や活性化（22.7％）や進行管理（22.7％）も大きな課題となっている。奉仕を実施するにあたり、担当者と同様に副校長が大きな役割を果たしていることが分かる。

４　おわりに

教科「奉仕」の授業は始まったばかりであり、試行錯誤の面も大きいと思われる。都立高校が全国に先駆けて実践しているのであるから、いろいろな課題が浮かび上がってくるのも当然である。東京都教育委員会のホームページにも、実施状況の調査結果が載っているが、概ね、副校長のアンケートと同様な結果が出ている。教科「奉仕」の授業は、いろいろな課題が今後解決され、もう二、三年経つうちに安定した教科・科目となってくるであろう。

委員長　久保田　弘（農業）記

第2委員会（教育課程の検討・教育対策）

第2委員会では平成19年度から「選ばれる学校を目指して」をテーマとして設定し、平成20年度も引き続きこのテーマに基づき研究を進めた。

平成19年度は「選ばれる学校」について次の共通項目を研究の柱とした。

① 生徒指導が充実して生徒が安心して通える学校
② 生徒が主体的に通える学校
③ 多様な教え方が出来る授業力を備えた教師がいる学校
④ 保護者や地域に開かれている学校

そして、これらの観点を切り口にして「一人ひとりの子供にとって最も適した学校」「一人ひとりの生徒に満足を与えられる学校」について研究を深めてきた。

平成20年度はこれらの研究を引き継ぎ、具体的に研究を進めるために、それぞれタイプの違う7校の具体的な例を持ち寄り、研究を深めた。

(1) 進学重点校としての取組
(2) 中堅進学校としての取組
(3) 中高一貫校としての取組
(4) 校地狭隘校としての取組
(5) 地域に根ざし、地域と共に歩む学校の取組
(6) 通学の便がよく、多くの地域から通学してくる学校の取組
(7) 工芸・デザイン教育専門高校として創立100年を迎えた学校の取組

と実に多様なタイプの学校の取組例から、選ばれる学校、すなわち、魅力のある学校について考察した。

そして、本研究については8月に行われた都立高等学校副校長研究協議会において、「魅力ある学校づくり」というテーマで市谷商業高校の高橋副校長から発表がなされた。その指導講評では、小平南高等学校の田中校長より、魅力ある学校というのは「生徒保護者がどう学校を評価するか」「地域が学校をどう評価するか」だと。そのために、副校長は次の3つの視点をもち、経営に当たることが大切であると話された。①教育課程をどうするか②生活指導の充実③生徒が楽しい学校の3点を挙げ、さらに付け加えれば進路の充実という講評を頂いた。

この研究を通して、魅力ある学校づくりという永遠のテーマについて、今回持ち寄った様々なタイプの具体的な実践例はとても参考になったと思う。それは、魅力ある学校づくりと一言で言っても、その学校の置かれた地域、歴史や伝統、生徒の実態などの状況に応じて、学校の特色化、魅力づくりは多種多様であるからである。

また、魅力ある学校づくりを考える際の視点は、タイプの違う学校であっても共通する部分もあるだろう。それは、田中校長の講評にもあるように、生徒・保護者・地域のニーズにあった教育課程を編成し、生徒・保護者が満足する充実した教育活動を展開することであろう。

そのために、副校長は学校の組織的な協力体制を築き、学校評価などを通して、学校に求められるニーズを把握し、PDCAのサイクルによる地道な改善と取組が必要である。

あわせて、体験入学、学校説明会、ホームページなどを通して積極的に学校の外にＰＲ活動をしてくことも大切であると考える。

部長　幸田　諭昭（小石川）記

3. 生徒指導研究部会

(1) 平成20年度生徒指導研究部会の活動について

20年度は次のような体制である。

生徒第一委員会

東部D　研究部長　中村文男（橘田）

　　研究幹事　遠山孝典（両国）

生徒第二委員会

西部D　研究部長　熊谷通眞（福生）

　　研究幹事　渕脇英一（拝島）

各部会で1学期に行った研究を8月28日の副校長研究協議会で発表した。

―第三分科会―

①生徒指導研究第1委員会（東部D地区）

「東部Dチームにおけるキャリア教育実践事例の紹介」

提案者　佐々木哲（科学技術）

全定30課程からなる東部Dチームからは、副校長連絡会で検討した「キャリア教育について」をテーマにしてアンケート調査を実施した。アンケートの集計・分析結果から明確になった問題点（1教職員間の共通理解と共通実践の運営、2 キャリア教育の進め方）をどのように解決するのかを全定5課程の実践事例から考察した。

〈事例発表者〉

・佐々木哲（科学技術）

学力向上を目指した特色ある取り組み「スクールライフプラン（ダビンチプラン）」

・関　毅彦（大江戸）

己を知る、社会を知る、他者を知るをねらいとした取り組み「総合学科履修科目、チャレンジ指定科目」

・高石光一（第三商業）

3 年間を見通したキャリア教育の取り組み「キャリアガイダンス、インターンシップ、家庭との連携」

・高坂　仁（葛西南）

4 学年における具体的な進路決定指導の取り組み「1・2年次、就業指導、3年次、進路情報の収集と検討、4年次、進路決定指導」

・白井克昌（本所）

規範意識の確立を基盤とした「生き方教育」の取り組み「S・Fプログラム［Self-Fulfillment（自己実現）プログラム］」

各学校の特色ある実践を通して、着実に生徒の進路希望を実現させようとする副校長の姿がある。この副校長のリーダーシップの下に、既存の人材を育て活用し、組織的な取り組みにすることが課題である。

②生徒指導研究第2委員会（西部D地区）

「小中高　夢のかけ橋推進事業」に果たす副校長の役割

提案者　渕脇英一（拝島）

　　下田賢明（武蔵村山）

東京都教育委員会は、平成16年度から「小中高　夢のかけ橋推進事業」を推進してきた。夢のかけ橋推進事業における全都立高校の調査結果及び推進事業開始年度より重点支援校となった、武蔵村山高校の実践事例を通して、生徒の変容に着目しながら、成果と推進事業に係わる現場の副校長の役割について考察した。

「小中高　夢のかけ橋推進事業」の成果としては、1交流事業を通して、生徒は自らの知識・技術を生かすことができた成功体験で自信をもち、相手を思いやる気持ちも深まった。2 出前授業等では小中学生が高校の様子を学び、高校の教員が中学生を指導することで中学生に対する生徒理解が深まった。

課題としては、1 安全対策と事前の日程調整及び打合せに時間が掛かる。2 本事業の計画・実施・評価が組織的な取り組みになっていない。

副校長の役割は、1 意欲のある教員に頼った取り組みでは異動の際に活動が停滞する。個人の取り組みを教科・分掌の取り組みへと移行する。生徒会や部活動は生活指導部、訪問授業・体験活動は教務部の分担として校内組織体制を確立する。2 保護者や学校連絡協議会委員等、学校外の連携を生かした情報収集の要として、学校内外のコーディネーターとしての役割がある。

「小中高　夢のかけ橋推進事業」では連携先との日程調整・安全面での配慮等、実施上の課題は多いが、成果が確実に生徒に還元できる事

業である。校内の組織化や学校内外のコーディネーター的な役割等、推進事業を推進するには、副校長の役割は重要である。

(2) 全国高等学校教頭・副校長会での他県の発表から

第3分科会では、4題の研究発表が行われた。発表主題及び発表者は以下の通りである。

発表1「地域・保護者と連携した生徒指導の取組」
宮崎県日向高　長友慶司

発表2「社会の変化に対応した生徒指導のあり方」
福島県会津高　加藤俊男

発表3「工業高校における生徒指導」
―クラフトマン21事業と5S活動から工業高生を育てる―
滋賀県彦根工業高　村岡良信

発表4「生徒指導と危機管理」
神奈川県永谷高　山田　寛

発表1では「地域の子どもは地域の学校・保護者が連携して育てる」という観点から、日向地区4つの高校で、地域・保護者の協力を得て行われた種々の生徒指導の取り組みが報告された。

発表2では生徒の問題行動を検証することで、生徒の実態を正しく捉え、教育改善を図るとともに効果的な生活指導の方策を見出す取り組みが報告された。

発表3では高校と企業をつなぐ実践教育クラフトマン21事業が、企業と学校それぞれで5S活動に発展した。この取組を通して、社会的な基礎力を身に付けさせる等、工業高校生を育てている。

発表4では平成18年度、副校長制の導入により研究活動組織が再編された中で、平成19年度生徒指導研究委員会から「生徒指導と危機管理」について事例を含めた報告がなされた。いずれも時間を掛けた丁寧な分析・考察があり有意義な協議会であった。

部長　熊谷　通眞（福生）記

第１委員会（生活指導・進路指導）

１　はじめに

平成２０年度の生活指導研究部会第１委員会の活動は、生活指導の範囲の中でも、近年その重要性が指摘されているキャリア教育を取り上げることになり、キャリア教育に関する各校の取り組みを中心とする内容で研究が進められた。予め東部学校経営支援センターＤチーム内の各校にアンケート調査を実施し、この調査結果をもとに検討を重ねた。この成果は、「東部Ｄチームにおけるキャリア教育実践事例の紹介」としてまとめられ、その副題には「キャリア教育推進における副校長の役割」が設定された。

研究の事例紹介では、東部Ｄチームに所属する合計５校のキャリア教育が取り上げられることになり、その内容は、①各校のキャリア教育に関する特色ある取組と、②キャリア教育の具体的内容や年間指導計画に関してと、大きく２大別してまとめられた。

研究発表会は、8月28日(木)に東京都教職員研修センター（水道橋）を会場として行われ、都立科学技術高校佐々木哲副校長が研究内容全体にわたる趣旨説明をし、自校の取り組みについて、副校長の役割りを中心にして説明した。次いで、都立大江戸高校関毅彦副校長、都立第三商業高校高石公一副校長、都立葛西南高校高坂仁副校長、都立本所高校白井克昌副校長が、それぞれ自校のキャリア教育の取り組み内容や、それに対する副校長の役割りなどについて発表した。

２　各校の実践事例の概要

以下に各校のキャリア教育に関する取り組み事例の概要を紹介するが、その基本的な方針に関する内容を中心に要約している。

(1) 都立科学技術高校（全日制課程）

大学進学型の専門高校として、科学技術に関する理論や実験等を取り入れた学校設定科目を開設するなどして、科学技術者としての基礎学力を身に付けさせる実践を行っている。生徒自らが科学技術者としての到達目標を設置するスクールライフプラン（ダビンチプラン）を、キャリア教育実践の際の一つの核として位置づけている。

(2) 都立大江戸高校（定時制課程）

定時制課程（三部制）・単位制・総合学科のチャレンジスクールであり、不登校を経験した生徒の割合が多い学校である。キャリア教育は、そのような経験をもつ生徒にも対応するよう工夫されており、総合学科の原則履修科目「産業社会と人間」やチャレンジ指定科目がその中心となっている。

(3) 都立第三商業高校（全日制課程）

商業高校として、進路保証 100％を目指し、3年間全体を見通した体系的なキャリア教育を実践している。1 年次では、キャリアガイダンスを充実させ、2 年次では、インターンシップや大学見学等の体験学習を実施している。また、3 年次では、三者面談等で家庭と緊密に連携をとりつつ、生徒の進路希望実現に努めている。

(4) 都立葛西南高等学校（定時制課程）

ハローワークや地元商工会議所など、地域との協力・連携を重視した取り組みを実践している。各学年毎の重点的な取り組み内容としては、1・2年次は、定時制生徒への就業指導をとおして、社会で生き抜いていくための智恵と能力を身につけさせるよう指導し、また、3 年次は進路情報の収集・検討を行わせ、4 年時には具体的進路決定指導を実践している。

(5) 都立本所高校（全日制課程）

平成15年度から実施している「茶髪ゼロ」指導が定着しており、規律ある学校として、生徒の規範意識を確立させることを、キャリア教育の基盤としている。校務分掌として「ＳＦ部」というキャリア教育専門分掌を設置するとともに、平成17年度から、キャリア教育の中高連携も行っており、墨田区立中学校12校とキャリア教育ネットワークも作っている。

３　おわりに

今回の東部Ｄチームでのキャリア教育の実践事例の紹介は、5校に絞られたが、この5校の中でも、学校や生徒の実情に応じて、様々な特色ある取り組みが見られた。副校長として、このような他校の事例も参考にしつつ、各校の実態に応じてキャリア教育の一層の充実に取り組む必要があるが、その際、情報の収集だけに終わることなく、校内への情報発信も日々積極的に行っていく必要がある。

委員長　遠山　孝典（両国）記

第２委員会（教科以外）

平成20年度の生徒指導研究部会第2委員会の活動は、「小中高　夢のかけ橋推進事業」についての研究を行った。

生活指導・教科外活動を研究の柱とする本研究会として、本事業のねらい「子供たちに異年齢交流の機会を増やすとともに社会性や協働性、思いやりの心や豊かな人間性の育成を図ること」に焦点を当て、特に生徒の変容に着目して本事業の成果を再確認し、事業を推進する当事者としての副校長の役割について考察することとした。

研究方法は、「平成19年度『小中高　夢のかけ橋推進事業』推進月間に関する調査結果」並びに西部Ｄ副校長会の中の同事業連携推進校の実践事例報告をまとめて資料として実施状況の整理、成果と課題の検討、副校長としての今後のあり方を考察した。

この研究は8月28日（木）東京都教職員研修センターで開催された都立高等学校副校長研究協議会で「『小中高　夢のかけ橋推進事業』に果たす副校長の役割」というテーマで発表した。

発表は都立拝島高等学校　渕脇英一、都立武蔵村山高等学校　下田賢明が担当した。

１「小中高　夢のかけ橋推進事業」実施状況

(1)「平成19年度『小中高　夢のかけ橋推進事業』推進月間に関する調査結果」から

調査集計値からは、以下の7点が分かった。①取組は対象校のほぼ全校で実施している。②活動連携先は、中学校、小学校が上位を占めている。③活動時期は、推進月間の「11月」が一番多いが、11月以外の実施が、70％以上であり、推進月間以外でも取組がある。④活動内容は、部活動交流、訪問授業、体験授業が上位となっている。生徒会、部活動、学校行事の各交流とボランティア活動を合わせた生徒が主体となる活動内容がほぼ半数を占めている。

取組の成果として、高校生は授業で身に付けた知識や技術が生かせたので自信をもち、小中高の生徒間の相互理解が深まり、相手を思いやる気持ちができていることなどが生徒の変容として表れている。本事業で期待される成果が上がっていることが分かる。また、生徒の活動にしぼった場合の課題としては、実施上の課題が中心であることが分かる。

(2) 実践事例から

西部Ｄ副校長会の中の『小中高夢のかけ橋推進事業』連携推進校7校の実践事例報告をまとめ検討した。実践事例報告は平成16年度から平成18年度の重点支援校「地域から信頼される学校」の都立武蔵村山高等学校を具体例として研究報告した。

報告校の学校経営計画における位置づけとして、地域社会と連携した学校教育を推進する学校を目指す学校として、地域の小中学校との連携を深め、地域に根ざす学校づくりを行い、それらを通して、学校や地域社会への帰属意識を高めることを目標に方策を立て実施している。

主な交流活動と実践事例は、以下の7つを報告した。　ア．小学校との交流　特別授業（「八小講座」）への補助教員としての参加、小学生社会科見学　　イ．保育園、福祉保育園、療育病院での実習授業（各々年2回）、特別支援学校への訪問（年2回）　　ウ．近隣小中学校との合同音楽会　　エ．部活動生徒の小学校行事、地域行事への参加　　オ．部活動交流　　カ．出前授業、学校行事（学校説明会等）への参加　　キ．地域教育協議会への参加（保育園・幼稚園、小中学校関係者、及び地域住民の方々で構成）

事業の成果として、体験学習を行うことで生徒の規範意識や態度の向上がみられた。地域の高校生としての自覚が芽生え、その後の部活動等に自覚をもって参加するようになった。また、生徒たちに地域との交流の大切さを理解させることができ、活動を通して生徒の進路の動機づけにもなった。さらに、学校の様子を地域の小中学校に知らせることができ、生徒の健全育成に地域の協力を得られるとともに、地域の安全対策の連携を整えることができた。

２　まとめ

(1)「小中高　夢のかけ橋推進事業」の成果と課題

①生徒の育成

交流事業を通して自らの知識・技術を活かすことができた成功体験から、生徒は大いに自信をもった。さらに、相手を思いやる気持ちの深まりとともに、積極的な取組姿勢を表すようになっている。

また、課題としては、安全対策やニーズを踏

まえた活動にするための情報収集があげられる。生徒の成功体験を引き出すために重要なポイントとなるため、連携先との連絡・調整が重要である。

②「開かれた学校づくり」

出前授業において、高校の様子を小中学生に伝えることができ、かつ、高校教員の中学生に対する生徒理解が深まっている。

また、中高教員が研究授業・研究協議を行い、相互の指導内容への理解を深めることで、都立高校への理解を深めることにもつながっている。

一方、課題としては①でも取り上げた連携先との日程調整、事前の打合せなど準備に時間がかかること、加えて、本事業の計画・実施・評価が組織的な取組になっていないことが挙げられている。

(2) 副校長の役割

①校内組織体制の確立

事業の立ち上げにあたって、意欲と指導力のある教員の努力や小中学校の教員とのネットワークに頼って、まず事業を進めることは現実的な選択ではある。しかし、その教員が異動になれば、活動が停滞してしまう。こうした問題への解決策は、推進事業を学校の組織としての取組とすることに尽きる。ここに、副校長の果たすべき役割がある。

まず、成果を校内に周知し、生徒と教員の変容を広める。教員の興味を喚起し、個人の取組を教科や分掌・プロジェクトチームの実践に移していく。生徒会や部活動であれば生活指導部、訪問授業・体験活動であれば教務部に、主幹教諭・主任を統括者として関与させて分掌の仕事としていく方向に、推進すべきである。

副校長が担う学校外との連絡調整の場に、主幹教諭・主任、プロジェクトリーダーを参加させて、経営参画意識を高めると同時に、主幹教諭・主任層と連携先とのネットワークをつくることで、組織の取組として事業に継続性をもたせることができる。

②コーディネーターとしての役割

生徒の得意とする活動や教員の能力が生かせる場がないか、小中学校や連携先候補が望んでいる活動は何かなど、常に情報の発信と収集の中心として副校長が行動することは重要である。

保護者から小中学校の情報を得たり、学校運営連絡協議会委員として地域の情報を得たりするなど、学校外とのつながりを生かした情報の集約の要となること、で学校の内外を結ぶコーディネーターとしての役割を果たすことができる。また、副校長は地域新聞などのメディアに情報提供をする機会も少なくはない。積極的に情報発信をし、活動の成果を広く公表することで、生徒や教員の自信を深めさせ、意欲を引き出していくのである。

学校の窓口としての連絡・調整や進行管理を行いながら、主幹教諭・主任に係わらせつつ、学校内外のニーズと活動を結び、一段高い視点をもつて行動する意識が副校長には求められる。

3　おわりに

連携先との日程調整・安全面への配慮など、実施上の課題は多い。また、「奉仕」体験活動と重複する活動との調整もあるが、成果が確実に生徒に還元できる事業であることに間違いはない。

本事業の取組を進め、思いやりの心や人間性豊かな生徒の育成と「開かれた学校づくり」をさらに進めるために、副校長として確実に役割を果たしていきたい。

8月31日の発表では前都立立川高等学校長現警視庁警察学校教官　大澤充二先生から講評をいただいた。

副校長の役割として、様々な教育や事業を単発的に消化するだけでなく学校教育全体の中での位置づけを行っていくこと、事業の指導内容や指導計画を加除修正していく方向性を示すこと、学校の肝心の授業や事業に重点を置くために事業を整理・統合する視点も必要になる、ということを指導いただきました。

また、本研究にあたり、教育庁指導部高等学校教育指導課の担当の方々には資料使用許可他あらためて感謝申し上げます。

20年度は報告のとおりとなった。副校長連絡会での協議等を活かし、次年度以降の副校長会研究部会として継続した研究を進めていきたい。

委員長　渕脇　英一（拝島）記

7. 退　任　者　の　声

時にはヒトラーと呼ばれ

矢島　賢二（赤坂）

色々あった11年と4ヶ月。過去を振り返りながらもついつい、この文章を誰のために何のために書くのか、といったことを思い始めている。こうしたことを最初に考え込むのがそもそも自分のたちなのでしょう。

で、この文章は後輩の副校長の皆さん、とりわけ新米の副校長の方々に書くことにしました。

「時にはヒトラーと呼ばれ」と題しました。これは、都教委を敵視し、都教委の手先である副校長をやり込めるのに大変なエネルギーを割く人たちにある時、言われたものです。私の出発点ではそういう人が結構おりました。今は少なくなったと思いますが、もし現在でもこういった人に日々お困りの方がおりましたら、どうぞ、校長の隠れ蓑を時には活用することを考えたらと存じます。これらの人は、意外に権力に弱いのです。不平不満を感情的に副校長にぶつけるばかりか、副校長を出来れば自分の手下にしたいと密かな願望を持った輩だと思うことが必要でしょう。負けてはいけません。頑張りましょう。

一方、校長に仕えるのもなかなか難しい。「補佐」とは、実に曖昧な無限大の仕事内容を示す役職表現です。

ある時、ある人に「エッ、副校長会があるのか。会社には副社長会なんぞないぞ」と言われたことがありました。定通教頭（副校長）会の会長として、お陰様で多少、トップの方にお会い出来、このご指摘に接することが出来ました。副社長はナンバーツーであり、会社の経営に社長と共に存分に活躍する存在なのでしょう。

で、それから、自分の仕事の中で、経営には直接関わらないものについてたとえば、次のように表現して仕事を自覚するよう努めておりました。「矢島、これより印刷業に従事します」こうして、時には、100枚～300枚の紙片をタイムズから印刷するわけです。同様に時に、コピー屋さん。指導部派遣調査員。新聞配達。掲示係。お茶くみ。警備員。等々。

警備で思い出しましたが、機械警備のマニュアルに「（いよいよ卒業式が始まろうとしている時に）教頭が最後を確認して職員室の警備をかける」というのがありました。

当時でも今でもびっくりする内容です。

教育庁におつとめの方々は、卒業以来学校に行ったことのない人がほとんどですから、ついつい教頭を便利な「何でも屋さん」としてお使いになるのでしょう。

もう一つの大きな誤解。校長の秘書役があります。これについては、どういうことかという説明が必要でしょう。

教頭になる前に、外国に行ったことがあります。その節ある学校の秘書に会い「いいよ、私の仕事場においでよ」といわれ、ありがたくのこのこ行きました。彼女の執務場所は、ボス（校長）の部屋の前です。ボスに会うためには必ず彼女を通すのです。日程管理・接遇・文書整理・コピーなど日々副校長がやっていることを秘書がやっているのが外国のスタイルです。

日本の（特に公立）学校には、「秘書」を置くという伝統がありません。誰かがやらなければいけないのでしょうが、これについての内容・程度は、校長のお考え一つにまかされているのが現状です。

ナンバーツー、何でも屋さん、秘書。三つの役を紹介しました。考えるヒントとして、参考までに。

「退任にあたって」

恩田　実（八丈）

あっという間の29年間であった。

第1次オイルショックで4年間勤めた会社をリストラされる。第2次オイルショックで2社目もリストラされた。現在のサブプライムローンから始まった世界金融危機と同じように時代は繰り返すのか昔を懐かしく思い出す。

2回のリストラでどうやって食べていくか悩んだ末、28歳から自分がもっとも得意とする保健体育の教員を目指して再度大学に入学した。

会社の経営不振によるリストラがなかったら、教員を目指してはいなかったと思う。

猛勉強をした。猛勉強したはずだが、卒業年度には教員試験に合格できなかった。30歳の浪人生活を覚悟し、再度教員試験に挑戦した。人生の中でもっとも苦しい時期でもあった。31歳で入都することができた。

教諭として赤羽商業高校5年間、富士高校12年間、野津田高校1年間。

平成10年度秋留台高校教頭に着任。管理職としてはもっとも多忙な5年間を過ごした。年間100件を超える特別指導、昼夜を問わず、警察署からの生徒引き取り等々、今思えばよく頑張ってきたなと思い出す。生徒が大変ということは、そこで共に取組んだ先生方も大変だったことと思う。課題のある大変な生徒に真剣勝負である。前線で一生懸命頑張っていた先生方に、管理職として感謝感謝である。

駒場高校副校長4年間、問題行動がなく模範的な高校生を目の当たりにした。絶えず全国大会や世界を目指した取り組みに、教育の面白さを感じた。

定年まであと2年、何となく魚釣りがしたく、島を希望したら八丈高校に決まり赴任した。八丈島は自然豊かで大変素晴らしいところだ。48センチのメジナをはじめ、いろいろな魚が釣れた。八丈富士ハイキング、町営の温泉、島民の皆様との野球、バレーボール、卓球、運動会、魚釣り大会等々もう少し八丈高校に勤務したいが60歳定年には勝てない。

リストラをきっかけに教員となり、生徒のため一生懸命教員・管理職と29年間取組んできた。4月には都内の自宅に戻る予定だが、さて、これから何をしようか？

「退任にあたって」

針馬　利行（忠生）

思い起こせば、あっという間の教頭・副校長としての11年間でした。教頭になった頃は、管理運営第二研究部に所属し、エミールで先輩の教頭先生方にいろいろ教えていただいたことを思い出します。あのころは毎月の会合に15名ほど出席されていたと記憶しています。多くの先輩方にお世話になりました。全国高等学校教頭会の長崎大会では管理二研を代表して発表させていただきました。長崎は私の出身地でもありますので、感慨深いものがありました。また、当時はまだ学区毎の教頭会でしたが、その場での情報交換に大いに助けられました。終了後の懇親会も教頭同士のコミュニケーションを深める意味で有意義だったと思います。

平成16年度と17年度に全国高等学校教頭会の会長を仰せつかりました。全国の視野から日本の教育を考えることができるようになったと思います。また、学校以外の民間の研究会等にも参加して、マネジメントについても考えるようになりました。教員の時よりも教頭になってからの方が良く本も読み勉強もしたと思います。

この間、東京都の教育も人事考課制度の導入や学区制の廃止、学校経営支援センターの設立など、学校改革が急ピッチで進みました。それに併せて要となる教頭の仕事量が増えていったのではないでしょうか。だんだん研究部の集まりも悪くなり、尻すぼみになっていったのは残念なことでした。また、支援センター主催の教頭連絡会となり、情報交換の場が少なくなっていったのも心残りです。

その中で、私の最後の4年間は久留米高校の全日制閉課程、忠生高校の閉校と学校改革業務を担当し、入選業務に携わることなく過ごしました。閉校業務の大変さはありましたが、どちらも最後の学年は一人の退学者もなく全員卒業となり、教員も少なくなって家庭的な雰囲気の中で仕事ができました。久留米高校の最後の年にサッカー部が全国大会へ出場したこと、ゆずが体育館でライブをやってくれたことが印象的でした。

現在は100年に一度の経済危機と言われるほど変化の激しい時代です。教育界も同様です。しかし、周りの環境がどんなに厳しくなっても、それを嘆いているだけでは解決になりません。自分がどう取り組めるかを考えた方が良いと思います。私が最後に取り組みたかったことは、授業の改善でした。生徒にいかに知識を定着させるかということでした。そのためには黒板とチョークから脱却した授業が必要ではないかと考えました。若手の教員と勉強を続けましたが時間切れとなりました。このことに限らず、様々

な問題も工夫すれば必ず解決の道が見つかるでしょう。その時に一人だけではなく、仲間と共に歩いていくことが心強いと思います。副校長同士のコミュニケーションを深めて課題を解決していってほしいと思います。

後輩の皆さん方に期待します。

教頭・副校長時代のことなど

梶野茂男（若葉総合）

教頭時代6年間、副校長時代5年間。「われながら、よく11年間も激職と言われる、『中間管理職』を勤めたものだ」と言うのが振り返っての実感である。

最初の赴任先は、城北高校の全日制で3年後に閉課程が決まっていた。まだまだ、閉校に対する職員団体やPTAなどの反対運動が強く、在校生の保護者に対する都教委説明会が開かれていた。だから、いかにスムーズに閉校をするのかが、私の最大の仕事であった。

最後の1年間は、全国で初のチャレンジスクールである桐ヶ丘高校が開校しておりその1年生と城北高校の3年生がなんと同じ校舎に同居していた（今はそのようなことはない）。

最後の卒業生がさみしい思いをしないよう、卒業式と創立 60 周年の記念行事を連続して実施した。43年前の全国唱歌コンクールの最優秀賞に輝いた城北高校音楽部 OB の合唱で盛り上げ、会場の赤羽会館ホールを埋めつくした OB 達に見送られて最後の卒業生は巣立って行った。忘れられない思い出である。

2校目は、桜町高校で3年間お世話になった。府立第11高女の流れを組む伝統高は、部活動が活発で、閉課程の城北とは打って変わって教頭の仕事は激増し、日々の業務に追われていたと言うのが正直なところだった。職員団体の非専従の執行委員がおり、その対応に追われつつ、副校長会の生徒指導研究部長として富山大会の運営に当たっていた。渋谷の道玄坂の繁華街にあった教頭会の事務局での会合が懐かしい。桜町の生徒は落ち着いており好きな学校である。

3校目は、世田谷泉高校で、開校4年目の三部制のチャレンジスクールであった。この学校は昼夜間の定時制課程の独立校で、総合学科の単位制高校である。そして、中途退学者や不登校の生徒を受け入れることを使命とした、新しいタイプの学校であった。職員の勤務体制はＡＢ勤であり、私はＡＢＡと1年間だけ、午後からのＢ勤務をしたが、課程としては定時制課程なので、これまでの全日制課程の副校長会の籍から、定時制通信制課程の副校長会に籍を置くことになった。ここが正直言って一番違和感があった。それにしても、世田谷泉のＡ勤の副校長は、職員室がＡＢ同じこともあり実質の勤務時間が極めて長い。何とか短くしようと努力したが、教育課程の大幅手直しに取り組んでいた3年目のＡ勤務の時には、朝の7時半から夜の10時、11時が珍しくなく、Ｂ勤の職員の勤務時間が終り退勤するのをＡ勤の副校長が「お疲れさまでした！」と見送るのだから。

しかし、勤務時間は長くとも、校長が夜の 9 時頃まで残っていてくれたり、2 年目からはかつて同僚だったＭ副校長が赴任してきて、気心が通じるようになり、お互いに良く愚痴を話したり、帰りに寄ったり、好きなことを言い合えて本当に楽しかった。だから、振り返って思うのは、人間関係が良ければ、少々苦しくても我々の仕事はやっていけると思うのである。

最後の職場は、開校3年目の若葉総合高校での2年間である。今までで一番遠い職場であり、一番先生たちや素直な良い生徒たちに恵まれた職場である。故河合隼雄氏の「人生二つ良い事ないものよ」を胸に刻んで北区から、稲城市まで東京を縦断し、緑に囲まれた多摩丘陵にある学校に通勤している。総合学科高校は、科目の種類が多くキャリア教育に正面から取り組んでいる事もあり、大変多忙である。だから、真剣に教育に取り組む先生たちが意気に感じて少しでも生きがいを感じて働けるよう、また、その成果が生徒に還元されるよう、和やかな空気をつくり出していくのがベテラン副校長の使命であると思うこの頃である。

8. 転　任　者　の　声

全日制課程へ転任して

石井　茂光（日比谷）

4月に着任して以来、9ヶ月が経過致しました。教頭、副校長として夜間定時制課程に勤務した6年間は、今あらためて思いをめぐらせると少々長すぎた、と実感しております。特に、平成19年度に閉課程をむかえまでの1，2年の教職員数は非常に少なく、トラブルが生じても自分が率先垂範すれば教員はついてきてくれる、と確信し行動してきました。その結果、問題が発生しても自分で動き、処理してしまう癖がついてしまったように思います。当然のことながら、今の職場では、自分の行動だけではどうにもなりません。組織のミドルリーダーである主幹教諭や主任に指示し、組織として課題解決にあたらせることを常に意識しております。

さて、本校に着任してみると、今年度は創立130周年を迎える節目の年に当たっておりました。すでに、11月22日（土）、日比谷公会堂において記念式典の挙行が決定しており、記念誌、記念式典や祝賀会の準備が始められていました。定時制課程で閉課程式典の経験があるとはいえ、式典や祝賀会の規模がまったく異なりますし、閉課程と周年行事では、内容や開催時期等にも違いがあります。毎日のルーチンワークですら何倍もの処理を要求され、それ以外にも、進学指導重点校として教育課程の管理や進学システムの管理、マスコミからの取材申込や受入れへの対応、外国や他道府県からの学校訪問の対応、さらに、スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）事業等を実施しながらの準備でした。これらの合間を縫うように実行委員会での協議を重ね、式典の準備作業を進め記念式典の実施に漕ぎ着けました。

多数のご来賓に見守られ130周年記念行事は無事終了しましたが、ホッとする暇はありません。本校は、今後、体育棟及び本校舎の大規模改修工事が予定されおり、基本設計と実施設計の準備をひかえております。また、本道であるSSH事業等を活用しながら、生徒に学問の本質的なおもしろさや楽しさを味わわせる授業を構築し、進学指導重点校として期待される実績づくりに力を注がねばなりません。

管理職として、全日制課程を長く経験された先生方から、ご指導いただくことは、まだまだ沢山あると思いますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。

10年ぶりの全日制課程へ転任して思うこと

須賀　秀次（農業）

10年ぶりに全日制課程勤務となった。勤務校は二つの大学科、五つの小学科を設置し、すべて異なる教育課程を編成している。最近、ようやく勤務校の教育活動や地域との関わりが見えてきたというのが正直な気持ちです。

本校は、農業科と家庭科の二つの専門学科を併置する専門高校であり、百年という伝統と歴史を持ち、敷地総面積11万㎡を有する。新宿駅から本校まで35分という立地条件に加え、武蔵野の自然の面影を多分に残している自然環境に恵まれ、地域社会との連携事業も数多い。

今本校が目指す教育の方向は、“食・農と奉仕（地域貢献）・環境教育をリードする推進校”を掲げ、21世紀の社会と時代が求める方向とも合致している。環境教育と食の安全・安心、食育の推進、都市における農業の担い手育成、農場による自然環境の保全など本校の取り組みは、21世紀の社会と時代が最も求めているものを反映している。

こうした本校の目指す教育の実現に向けて、学校経営計画の指針や周囲の期待とは裏腹に課題が山積みしている。まず、第一に学校経営方針が職員に十分に認識されておらず、今ようやく主幹教諭・主任クラスに認知されはじめ、組織体制がようやく立ち上がったところである。今後さらに、地域社会・保護者との連携を図り、関係機関との協働・連携の確立が急がれている。

第二に本校は専門高校として、各専門分野におけるスペシャリストを目指す生徒の育成を図ることが使命として求められている。そのために本校の存在や教育活動を広く伝えることが不

可欠である。今年度、全教員による都内全中学校訪問を組織的に実施した。夏季休業中に各科独自に授業公開(サマースクール)等実施した。

昨年入選で1科が定員割れした危機感もあり、抵抗なく学校ＰＲ活動が展開された。功を奏して入学者の応募者が期待以上に集まった。

ここで重要なことは、所属の教職員に目的意識や希望を持たせ、生きがいを見出させて、一定の数値目標を掲げて組織的に取り組ませることが大切であること。こうした日々の実践により教育的成果を上げ、生徒を育てていくことにつなげていくことが大切であると感じた。

今も毎日が気力・体力勝負の日々が続いていますが、今後ともご支援をいただき、どうかよろしくお願いいたします。

全日制課程へ再転任

加藤　秀次（蔵前工）

早いもので副校長になって7年目を迎えました。初任は、向島工業高校全日制教頭からスタートしました。当時、都立学校改革が本格的にはじまったころで、思い出せば企画調整会議、業績評価に伴う面接・授業観察、週案、年間授業計画など都教委から次々と施策が実行されました。当時の学区別教頭連絡会やその後の会で熱の入った情報交換会が繰り返され、校内体制を整えるために大変役だったことを覚えています。教頭に成りたての私にとって、あっという間の3年間でした。

その後、工芸高校定時制課程で3年間副校長を務めました。定時制に勤務して苦労したことは、定時制の教職員はいろんな意味で個性の強い人が多く、教職員の意識をひとつの方向にまとめる事が大変だったことでした。定時制副校長連絡会は、旧学区制では構成員が少ないこともありアットホームで、情報交換会等では校内事情をかなり突っ込んで話し合えることができました。しかし、支援センター別副校長連絡会になり人数は増えましたが副校長同士腹を割って話し合える機会が少なくなってしまったように感じます。

本年度より全日制課程に再転任してまいりました。自分としては早く全日制課程に戻りたいとの思いから大規模定時制で全日制に負けないよう3年間努力してきたので、全日制への転任が決まったときは嬉しく、異動の不安はありませんでした。しかし、本校は工業高校の中でも中核となる学校で、都教委から進学型の工業高校(スペシャリスト型)の指定を受けています。また、中高連携、高大連携、インターンシップ実施、過去には文部科学省から研究指定校を複数回指定されるなどの実績があり、さらに工業資格取得指導、部活動指導を熱心に行っています。4月就任直後からいろいろな仕事が次々と舞い込み、全日制副校長はこんなに大変だったんだと改めて痛感した次第です。

今後は皆様と同じく、勤務校において教職員の意識改革や組織的な学校運営、人材育成等が進められるようひとつひとつ課題解決に取り組んでいきたいと思います。さらに、本校の教育活動を充実させ、生徒保護者から信頼される学校づくりを進めていきたいと考えていますのでよろしくお願い致します。

高校へ転任して思うこと

長江　誠（忍岡）

平成17年度から3年間、高等部単独知的障害特別支援学校で副校長を勤め、高校へ戻ってまいりました。

特別支援学校で障害のある生徒の教育に関わるのは初めてのことでしたので、教育課程や専門用語などわからないことばかりのスタートでしたが、校長先生をはじめ全教職員の皆さんからたくさんのことを学ぶことができました。中でも研修機能の充実ぶりや組織力の高さ、先生方の生徒に対する面倒見の良さや活気には目覚ましいものがあり、見習うことが多いと感じました。

現任校である忍岡高校は、開校3年目で今年度末に初めての卒業生を送り出すことになります。「単位制」「二期制」「普通科と生活科学科」「日本の伝統文化の充実」といった特色を打ち出して、日々充実した教育を行っています。一方、課題の一つに入選倍率の低さがあります。単位制というシステムに馴染みがないことや進路実績が不明なことなどが低倍率の原因であろ

うと分析していますが、総務広報部を中心としながら積極的な学校ＰＲを展開しています。

開校３年目なので、今年度当初には20名の教員が異動や新規採用で着任しました。着任者は学校に慣れて理解できるまでに時間を要します。また、学校の歴史が浅いと、想定していなかった事態や生徒の実態にどのように対応していくか、様々な実績を重ねながら組織として成長していかなければなりません。

課題は決して少なくはありませんが、もう一人の副校長とともに忍岡高校という若い学校を盛り上げてまいりますので、皆さまのご指導をよろしくお願いいたします。

支える喜びと支えられていることに感謝

橘田　進（葛西工）

前任校へは、定時制課程の新補副校長として着任しました。しかし、２年後の平成20年３月末、全日制、定時制課程が共に閉校になりました。89年間という長い伝統に幕を引くにあたり、同窓会や旧職員、現職員の皆さんと閉校業務を共に行いました。その間、校史の編纂などを通して学校の歴史をふり返ったり、学校に関わる人々の人生にも触れることができとても感慨深いものがありました。

私は、教諭時代に定時制課程の勤務経験がありませんでした。そのため、定時制の生徒の中に、私よりもひとまわり以上も年上の方がいて、体育の授業に、また学習活動だけでなく、その後の部活動に励む姿を見て、驚きとともに大きな刺激を受けました。

また、定時制課程における様々な課題への対応、生徒の活力の源となっている給食の運営など、これまでにない貴重な経験をしました。なかでも、都高給研事務局長を２年間務めさせていただき、学校給食の現状や課題、これからの学校給食について栄養職員の皆さんや教員の皆さんと毎月研究協議の時をもったことはとても有意義で良い経験でした。

やっと、定時制勤務の生活に身体が馴染んできたと思い始めた頃には、閉校とともに異動の年を迎えることになってしまいました。まだ、他校で定時制の経験を積み、貢献をしたいと思っていましたが、平成20年４月からは、全日制課程に異動になりました。生活スタイルを再び戻すのには時間を要しましたが、そんなことを忘れさせるような慌ただしい毎日がこれまで過ぎ去ってきました。

現任校は、区内唯一の工業高校であり地域と連携した教育活動を実践している学校でもあります。区のキャッチフレーズに「共育・協働・安心のまち」とあるように、本校の様々な学校教育活動に区を挙げて協力・援助をしていただいています。そのため、来客対応や訪問などの出張の機会が多く、人と接し、物事をコーディネートする能力が日々鍛えられています。

現在、このような、忙しい毎日を送り、業務や自分をふり返る余裕もありませんが、生徒や先生方が、活躍できる場の設定・実施を陰で支えられる喜びを味わうことができ、とても充実した毎日を過ごしています。これもひとえに副校長会、工業副校長会の皆様・組織の支えがあってのことと感謝しています。今後ともよろしくお願いいたします。

全日制課程に転任して

磯部　篤（杉並）

４月に、杉並高校全日制課程に異動になりました。前任校は北養護学校で、副校長３人で、小学部、中学部、高等部の学部と校務分掌を分担していました。現任校では一人ですべてを担当することになり、守備範囲の広さに、責任の重さを実感しています。

今年度から高校でも特別支援教育が始まりました。本校は、定時制課程と協力しながら、特別支援教育コーディネーターを選定、特別支援教育に関する講演会、巡回心理士の巡回相談による面談等を実施して、指導上の助言をいただき、生徒への指導の充実と教職員の啓発を図っているところです。

全日制課程の生徒は、落ち着いた雰囲気を持ち、穏やかで明るく素直な生徒たちです。「文武両道の進学校」の目標の通りに、毎日の授業、三大行事である体育祭・文化祭・合唱祭の学校行事、９割近くの参加率を誇る部活動、活発な委員会活動、生徒会活動に、生徒達は熱心にの

びのびと取り組んでいます。そして進路希望の実現を図っています。教員も生徒達の多様な活動を積極的に指導、支援して、土日にも、半数近くの教員が部活動指導に当たっています。

しかし、もう一歩欲を出してほしい、そうすればその結果として生徒の潜在的な力が十二分に発揮されて、今以上の実績をあげることができるのではないか、という状況が見受けられます。

そのために、学校経営を始めとして、確かな学力の定着や新学習指導要領への対応などの学習指導、規範意識の向上などの生活指導、生徒一人一人の希望を実現させる進路指導、部活動や委員会活動の活性化などの特別活動、さらに危機管理、地域・保護者への対応と、改善すべき課題は山積しています。これらの課題の解決、学校経営計画の実現のために、これまで以上に教職員全体が一丸となって取り組む組織化を一層推進するよう努力しています。

何事にも、「一期一会」の精神で当たっていますが、経験不足と段取りの悪さから、時間の配分がまずく、余裕を持った対応ができていないのが現状です。副校長会からは、毎月の連絡会での実践例や研究例、会報や調査研究集等での資料を通して、常に貴重な示唆をいただいていています。今後とも、ご経験豊かな先輩副校長先生方の、ご指導をよろしくお願い致します。

定から全へ

青木　修（千歳丘）

戸山高校定時制を閉課程させた後、世田谷区の千歳丘高校に着任しました。地図上の距離では自宅からより近くになったものの、相変わらず長い通勤経路で、ＪＲの西八王子から小田急線の千歳船橋まで、多摩川に掛かる鉄橋を電車で3回も渡るという妙な道順で通っています。でも自分自身が旧2学区で小中高時代を過ごしてきて、千歳丘高校には高校時代の部活動の試合でも何度も来ていたため、学校に対しても親近感があり、地域に対する不慣れや、違和感のようなものも感じていません。

ただ、閉課程の定時制から全日制に移った諸先輩方も経験されたこととは思いますが、生徒の数が異動の前と後で100倍も違っていることや、4年間も入学選抜業務から離れてしまっていること等々、学校の規模や生徒募集などに関わることについては随分と戸惑いがありました。それに加えて、今時まだこんな学校があったのか…とため息が出るような諸々の人、事、物の数々。前任者や歴代の諸先輩のご苦労も如何ばかりか、と思う毎日を過ごしております。

そういうわけで、約10ヶ月ほど経った現在でも、日々の仕事を要領よくこなし、学校が抱える課題に果敢に改革の手を加える、という副校長本来の役割が十分果たせている状況には遠く及びません。それでも、校長や前任者や心ある教員たちが苦心して敷いた改革のレールを守り、延伸させるべく、学校内外の力を結集して、動かなかったものを動かそうと、何とか頑張っているところです。

そういう中でも、やはり有難いと思うのは、同じような課題を抱える学校の副校長先生方に相談し、大変有益な情報やアドバイス等をいただける時です。この点については定時制も全日制も違いはありません。我々副校長の団結と協力が、都立高校を実務面で変えていく重要なパワーになると確信しています。私自身、担当する課程が変わろうとも、副校長相互の協力関係に多少なりとも寄与できるよう微力を尽くしていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

定時制課程から全日制課程へ転任して

畑中　喜八（富士森）

五日市高校定時制から4月に富士森高校全日制に着任しました。よろしくお願いいたします。

前任校の五日市高校は、単学級で全校生徒80名、教員9名と定時制の中でも小規模の学校でした。富士森高校は、生徒数730名、教員数40名、学校規模同様、事務処理の量も前任校の何倍もあり、着任する前は生徒数、教員数が多くても仕事の内容は同じと高をくくっていた私でしたが4、5月は手際が悪く事務処理が大変でした。実際に目のあたりにして本当に驚き、定時制から全日制を経験した副校長が「学校の規模だけでなく、事務量もちがうぞ」と話していた

ことを思い出しました。

校務を進めていく上で、困ったことの中に、前任の副校長と3月に十分に引継ぎをしたはずなのに、アレッということが多く出てきたことです。その度に前任の副校長に、連絡し、わからない点について教えていただきました。前副校長も異動した学校で大変なのに、迷惑をかけてしまいました。

4月に着任し、右も左もわからず、スムーズな仕事ができなかった時期がありましたが、4月当初から早く教員の名前を覚えようと意識的に、教員に声掛けをしました。「何々先生・・・」と名前を呼ばれた教員はニコッと笑顔で応えてくれます。これが、仕事のスムーズさにつながったのか、学校にも早く慣れたようです。

前任校の五日市高校では、全日制の教育活動等に支障がないように、学校施設の破損、全の生徒とのトラブル、施設使用における全定の教員同士のトラブル等ないように全日制副校長との連絡を密にしまた。富士森高校でも前任校同様、定時制副校長と連絡を密にし、本校全定の教育活動がスムーズに進められるよう協力していきたいと思います。

本校のよさ、課題もみえるようになり、これから更に本校のよさを伸ばし、本校がさらに生徒・保護者・地域・都民から信頼のある学校となるよう努力していく決意です。

諸先生方には御指導いただくことが多々あると思いますが、今後ともよろしくお願いいたします。

府中高等学校へ転補されて

川瀬　徹（府中）

知・肢併置の特別支援学校で3年間勤務した後、平成20年度から都立府中高等学校全日制普通課程へと転補されました。異動による新環境で新たな役割を果たし始めるには、多くの手間と大きなエネルギーを要することを実感しながら、業務と取り組んでいます。

毎朝、ＪＲ武蔵野線北府中駅から府中街道を刑務所の塀沿いに歩き、途中、府中特別支援学校のスクールバスや近隣市の福祉施設のバス数台と出会いながら、勤務校へと向かいます。武蔵野国の国府が置かれた府中は落ち着いた雰囲気で、近隣には東京農工大学や明星学苑もある文教地区です。

校門をくぐると樹木が迎えてくれます。欅・赤松・銀杏・梅・竹林・柿・枇杷など、豊富な立木に加え、ＰＴＡが整備したフラワーボックスが並んでいます。春・夏は安らぎと癒しを与えてくれた緑群が、秋深まり初冬には見事な紅葉・黄葉と常緑の対比が美しい協調を示し、心を洗ってくれます。そのせいか、穏やかで優しい生徒が多く育っているように感じます。ありがたいことです。

地域との結びつきも着実に固められてきています。校舎中央屋上の天文台では、地学部が定期的に観測活動を公開し、近隣の小学生と保護者も観望会に来校しています。府中第九小学校の夏祭りには、本校から漫画研究会が継続的に参加しています。第2学年で履修する「奉仕」（総合的な学習の時間代替）では、京王府中駅前で展開する「けやきフェスタ」に参加し、生徒がよさこい踊りを演じたり、ボランティアスタッフとして活動したりして、府中の町興しに一役かっています。

さて、本校では平成21年4月から推奨服を導入します。男女ともシャツは白・ブルー・ピンクの3色があります。また女子のスカートはブルー系とピンク系の2種類から選べるようにしました。私服登校を続けてきた本校にとっては小さな変化ですが、学校説明会などでは中学3年生やその保護者の皆様から多くの問い合わせを頂いております。伝統を大切にしながらも時代を見つめて、適切な対応をしていこうという動きの一つです。

都立府中高等学校の副校長として、生徒・保護者・地域の皆様の幸せのために一つでもお役にたてることが増えますよう、堅実な努力を重ねていきたいと存じます。そしてこれから先の高等学校の歴史の中に、新たな府中高校の歩みも加えていただこうと思うのです。

貴重な経験をして

小橋川　和子（小金井北）

早いもので教頭職を拝命して9年がたちまし

た。スタートは東京の陸の孤島と言われるM高校（全日制）でした。課題を多くかかえた学校で前任の教頭先生との引き継ぎで開口一番「先生大変な学校に来ましたね」の一言が今でも脳裏に焼き付いています。でも私には、先生「仕事のやりがいのある学校に来ましたね」に聞こえました。よーし東京一の学校にしてみせると闘志を燃やし日々教員とコミュニケーションをとりながら一つ一つ解決していきました。決して思った通りにゆきませんでした。でも私は、一歩も引きませんでした。目の前にいる子供達の前途に「夢と希望」をとの思いで頑張りました。当然、教員とのコミュニケーションの時間を作れば、教頭の仕事は夜遅くまでになります。夜中の12時を回ったこともありました。教頭になり3年たった頃から薄紙をはがすように学校は好転していきました。特別指導7割減、中途退学者6割減、入試倍率過去10年間の最高の成果を出すことができ、東京都教育委員会より「重点支援校」の指定を受け5年間の教頭生活を終え次の学校へ異動しました。

次に赴任したところは、多摩地区初の三部制（定時制）の学校です。立ち上げの学校で着任草々1年間で10泊の宿泊体験を生徒と共に過ごしました。文部科学省から指定を受けての実施でした。挙げ句の果てに生徒の数は男女半々の人数に対し女子教員は1名しかおらず私の引率となりました。1日12時間の授業展開と言う目まぐるしい学校でした。私は、着任2年目からB勤務（午後からの勤務）となり、仕事を終えて登校してくる生徒に「夢と希望」を与えようと「北斗七星」の学校通信を年間10回発行して激励し続けました。1月の寒い中で帰りに見送りで校門に立ったことが今でも良き思い出となっています。

この4月より中堅上位校のK（全日制）高校に着任致しました。生徒は温厚従順です。こんな素晴らしい子のいる学校をもっと良くしましょうと全教員に呼びかけました。地道な広報活動により、昨年の来校者数を2000人も上回る数となり、年明けの中学校校長会の調査結果で過去7年間で最高の2.017倍の倍率を出すことができました。さらに、将来に向け本校から社会に有為な人材をとの教育目標に則り新規事業「語学研修・異文化体験」を実施しました。参加した48名の殆どの生徒から、英語の楽しさを知った・将来の夢が膨らんだ等の感想が寄せられました。中には英語で感想を寄せてくれた生徒もしました。

あっという間の9年間でしたが、教員人生で校長先生と共に「経営」と言う視点で学校運営に携わることができたことは貴重な経験でした。東京都の女性副校長は僅か17名ですが、今後も女性ならではの視点を生かしながらも都立高校改革に邁進して参りたいと思います。今後とも宜しくお願い申し上げます。

副校長として思うこと

小田　茂（上水）

定時制では、右手に火鋏、左手にバケツを持ち、誰もいないひっそりと佇む校舎を夜11時を回った頃に巡回を始め、午前零時に戻ってくるのが日課となっていた。

翌朝、全日制課程の生徒が登校した際、煙草の吸殻等を目の当たりにして、不快な一日を過ごさせたくない、と言う一念で三年間一日も欠かさず続けてきた。

定時制へ通ってくる生徒は多様である。一旦入学した高校を中退し、再び入り直す生徒、低学力のために全日制の高校への進学が閉ざされた生徒、小・中学校時代から不登校を経験している生徒等が大半を占めていた。

共通した点は、教員や学校への不信であり、人間不信の一言に尽きる。卒業までの限られた時間の中で、心を開かせることは至難の業である。こうした状況は勤務校だけの課題ではない。定時制教育が抱えている喫緊の課題である。

校舎の巡回の前に、もう一仕事ある。定時制課程の教員の勤務時間終了は午後10時である。4時間目の授業が午後9時に終了し、生徒は放課となる。午後9時を回り、生徒が下校する頃、教員は浮き足立ってくる。

校門の前に立ち、教員の退勤時間午前10時まで身体を張って教員の無断早退を阻むのがもう一つの日課となっていた。

生徒の4割を占める女子生徒が在籍していた勤務校の定時制課程には、養護教諭以外の女性教員が一人もいなかった。宿泊行事での引率等

も含め生徒指導上で支障を来たしていた。

極度の人間不信の生徒や心に深刻な課題を抱えている生徒への対応は、教科の学習指導とは別な専門性を必要としている。こうした生徒に適切な対応ができる教員は限られている。更に、全日制課程から定時制課程へ不本意に異動してくる教員の悪影響は計り知れなかった。

勤務時間が始まる午後1時15分から、生徒が登校してくる午後5時45分までの勤務状況に問題があった。校務分掌が分掌として機能していないため、分掌内での役割、打合せ等の職務が何一つとして存在していなかった。

一人ひとりの教員の資質・能力は極めて高いにも拘わらず、生徒の学習意欲が乏しいことを口実に、教材研究を怠っていた。旧態依然とした授業であっても、それを許容してしまう環境は教員にとっても不幸なことである。

勤務時間が始まる午後1時15分にタイムレコーダーにカードを通して、執務場所である定時制職員室に誰も姿を現さない。外線電話が掛かり、呼出放送が虚しく校舎内に響き渡る。担任をしている生徒の保護者から電話は随時掛かってくる。生徒会室、体育館、教員用更衣室等あらゆる場所を探し回るが教員の姿は何処にもない。

勤務校では、休憩時間が午後2時15分から午後3時までの45分間となっている。従って、前半の1時間の時間休暇を取れば、午後3時からの出勤となる。その結果、職員の約三分の一が1時間の時間休暇を取っていた。

授業観察を通して明らかであるが、授業が授業として体をなしていない。指導方法の創意・工夫とか授業力向上という以前の問題であった。

目的意識を失った教員の勤労観を変えるには、抜本的な制度の改革が求められている。授業力向上の最も効果的と思われる方法は、全日制の授業を定時制の教員に担当させることである。

勤務校は、全日制・定時制の併置校であり、導入し易い。定時制課程の勤務の範囲内で全日制課程の午後の授業を定時制課程の教員が担当することは可能である。

学習意欲の高い、授業に創意・工夫が求められる環境に身を置くことが授業力向上の一番の近道である。

現状に流されることなく、水準に到達した指導技術を備えた教員であれば、全日制課程の進学指導重点校への異動の道も拓け、目標を持って日々の仕事に取り組むことができる。その結果、生徒への学習指導の充実に繋がる。

「教育の要は、人をして、その大いなるを知らしめる」という言葉がある。

人は、自らの良さを認められ、自ら実感できた時、一層の努力をして、伸びようとする。このような教育の実践こそが、生徒や保護者の願いであり、学校教育のミッションである。残り四年、学校教育の成果を生徒の姿に求め、全力を尽くす所存である。

転任

長船　良昭（葛西南）

昼夜間定時制を経験して、今回は全日制普通科に着任しました。B型勤務から通常の全日制型勤務に慣れるのに4～5ヶ月かかったように思います。

「生活指導困難校」の一つにあげられ、地域の評判も決して良いわけではありません。確かに生活指導には、いろいろとエネルギーを費やしますが、よい面も多々、あります。

強い部活動が複数存在しますし、教員間の校内授業研究も活発です。

私自身の2年目に向けての抱負ですが、①生活指導では典型となるような実践事例を数多く創出すること。②生徒がいろいろなことにチャレンジできる環境を作ること。③広報の強化等です。課題は山積していますが、ひとつひとつ乗り越えるしかありません。

オバマ新大統領は就任演説で変われる（We can change）から変わらなければ(We must change)と米国民に訴えました。

この精神が今、求められていると実感するこの頃です。

全日制課程へ転任して思うこと

熊本　信行（光丘）

定時制に6年勤務し、定時制課程60年の歴史も閉じてきた。

定時制では授業前や休み時間に生徒が職員室に入ってきて、仕事のことや仲間のこと世間話をしていく。生徒と話をする時間が多かった。

生徒数が少なく、行事では生徒と一緒に教員が動く、生徒と一緒に何かを創り上げていくという感じであった。

最後の学年では全員の進路が決定しホッとするとともに、卒業式や閉課程式典では、ご来賓や多くの同窓会の人達が参加して下さり盛大に行なうことが出来ました。

全日制勤務となり、生活リズムが夜2時の就寝が朝5時の起床となり、人混みの中の通勤が公園の中を通っての通勤へ、少人数生徒から700人を超える生徒数へ、教員数では3名から43名となる。考えてみれば6年前までの生活に戻っただけなのだが。

さて、本校に着任して10ヶ月が過ぎようとしている。

本校は「光はあこがれになる―私達の決意です―」をキャッチフレーズに基礎学力の定着と行事・部活動の活性化を通じて魅力ある学校を目指している。

今年度は部活動推進校となり、学校の活性化に取り組んでいます。本校の何年か前は休日や放課後に部活動をしている生徒が少なく体育館やグラウンドが寂しかったという。現在ではグラウンドでサッカー部と野球部が、体育館では女子バレーボール部や男・女バスケット部が活動する。他の部も土日に活動するようになり、「週休日の変更届」を処理する毎日が続いている。

また、本校では生徒指導で身だしなみの徹底を図り、茶髪・服装違反者0を目指している。

学校のイメージが下がるのは早いが、上げていくことには相当のエネルギーを使う。

生徒が「本校に入学してよかった」という実感を持てるようにするために、全教職員が学校の課題解決に当たり、一人一人の先生がやる気を出し、組織としてまとまっていくことの大切さを改めて思っている毎日です。

全日制副校長になって思うこと

青木　モト子（八王子北）

大規模夜間定時制の立川高校を経験して、全日制普通科の八王子北高校に着任しました。

定時制では、ほぼ毎日一番最後に学校を出て家に着くのは午前1時とか2時、終電に乗り遅れるとタクシーという生活でした。初めての副校長初めての定時制、ということもあってか、仕事はたまる一方で、定時制の生徒の実情等に日々追われるまま、前任校の副校長や教職員に助けていただきながら1年が終了したという感じでした。親切な上司、良い仲間に恵まれとても感謝しております。定時制の経験はとても貴重なもので今後に必ず役立つと確信しております。

本校は、教員時代に経験した学校と課題や取り組みが似ているため、とても親しみを覚えます。とはいっても、相変わらず日々の仕事を要領よくこなせるわけではなく、学校が抱える課題に果敢に改革の手を加える、という副校長本来の役割が十分果たせている状況には遠く及びませんが、自分の役割が少しずつわかってきました。

全日制、定時制に関わらず、「生徒のために何が出来るか」という視点で互いに知恵を出し合い、日々の教育活動において、組織的な取り組みを進め実現していく喜びを教員と伴に共有していくことが重要であると考えています。

今後ともご指導いただき、何卒よろしくお願い申し上げます。

定時制から全日制に転任して

計良　智子（桜町）

都立高校改革が進む中、従前の定時制課程から昼夜間Ⅲ部の定時制課程へ移行中の学校で従前からの夜間単独定時制課程にいましたので、昨年度は教員3名生徒数20名の副校長でした。学校名がそのまま残ったために、閉課程式典はなかったものの課程を閉じるという区切りをつけて、この4月に桜町高校に着任しました。

8年ぶりの全日制課程でしたので、心がなぜか安らぐと同時にこの学校は都民から信頼され

認められて必要とされ何時までも存続してほしいと強く思いました。そのためには、副校長として自分は何をなすべきかを自問自答すると共に実態把握に努める日々が続いていました。

また一方では、創立70周年記念式典を成功させるための取組に力を注ぐことが求められました。と同時に、昭和55年に東京都が北京市と姉妹都市交流を結んだ際に姉妹校となった北京匯文中学との国際交流が充実するように取組むことでした。10月2日の式典に向けて、校長方針のもと先生方と一丸となって取組むために70周年記念実行委員会と日中交流委員会を母体とした学校組織と、PTA、同窓会、PTA OB会、教職員OB会、財団等の外郭団体との連絡調整に奔走した日々を過ごしました。今にして思うとこの多忙を極めた日々は楽しく充実していました。そして、教員も生徒も学校全体が一つになって動くという流れが表れました。

前任校にいた頃、Ⅰ・Ⅱ部担当の副校長や通信制担当の副校長が定時制終了時刻近くまで残って仕事をしている姿を見ながら、教員数が多いことは分かるが、どうして毎日遅くまで残って何をしているのかと疑問に思っていました。

ところが、多忙であった日々が終わった今、本校定時制が終了する時刻になっても様々な課題に取組んでいる自分がいます。私たちの職務には、効率的に要領よくこなせるものとじっくり時間をかける必要があるものがあることを実感しました。

情報過多で先が読みにくくなっている現在、全日制課程を経験されている副校長諸氏にご指導頂かなければならないことが沢山あります。今後共どうぞ、宜しくお願い申し上げます。

9. 新　任　者　の　声

副校長になって

昼間　一雄（葛飾商業）

平成20年4月1日辞令交付され、着任した。人事部主催の実務研修（平成19年12月末）が全て吹っ飛ぶほどの壮絶なる毎日が待っていた。

調査・報告書の山、長期休業中の研修整理、休暇・職免等処理簿、旅行命令簿、週休日の変更等命令簿、研修手続き（初任者、2・3年次・10年経験者、選択課題）、PTA・同窓会の対応、そして入学式準備などいきなりパニックに陥った。何から手を付けてよいのかわからず、結局何も出来ずに一日が終ってしまったことさえ少なくなかった。副校長端末との睨めっこは、夢にも登場。本当に「潰れる」と思った。まさに「ツカエナイ事務屋」の新米副校長！

小・中のデータである全国公立学校教頭会の調査（平成20年度「副校長・教頭基本調査」）によれば、平成19年度に病気になって2週間以上休んだり、長期休職をしたりしているのは292人、病気などで死亡したたのは34人、勤務時間の平均は1日当たり12.3時間、1週間の文書処理数は50通ほどであった。こんな声も「校長補佐したり、職員とのコミュニケーションを図ったり、指導したりする時間が不足している。土・日のボランティア出勤が増加して休めなくなっている。」

今後、資質と能力の高い人材の登用にあたって、職層全体の一層の構造改革・待遇改善が不可欠であり急務であると実感している。

初めての授業観察時間割作成は、要領が悪く時間を要したが、授業観察は楽しい。たくさんの引き出しから展開される授業は、個性がある。毎回生徒になったつもりで授業に参加する。日々様々なハプニングが繰り返し発生する中で、生徒の様子、教員の取組む姿勢、生徒と教員の関係が手にとるように良く解かる。「多様な生徒が満足のいく授業」（授業力の向上）を提供することが学校経営そして生活規律の確立に結びつくことを改めて確認した。それにしても、「教員は本当に真面目」だ。いつも生徒のためを考えて取り組む真摯な姿に頭が下がる。教職員の健康状態が気にかかる。

野村克也氏（野球監督）曰く、『目に見える人の行動を見るのは「観察」であり、目には見えないが人をそういう行動に駆り立てる心の内を見るのは「洞察」である。』。

優れたリーダーであるためには、洞察力が求められる。困難な課題が山積していても教員に笑顔と笑いがあれば、必ず道は拓け・解決できる、と私は確信している。副校長として、教職員が安心して仕事が出来るよう、心も身体も元気で笑顔でいることを心掛けるとともに、本来の副校長らしい仕事に取組んでゆきたい。

平成21年1月末、辞令交付から300日、副校長席にもようやく落ち着き、ルーチンワークを何とか消化してきた。これもひとえに校長先生はじめ多くの諸先輩、17B諸氏のご指導ご支援のお陰です。心よりお礼申し上げます。

いよいよ未知の2・3月を迎え、不安ですが、なんとか乗り切りたいと考えております。今後ともご指導よろしくお願い致します。

副校長になって

樋口　博文（葛飾野）

「副校長職は多忙で激務である。」一般的によく言われることである。私も教員として副校長を支える立場の時から、「副校長は多忙だな」と感じていた。あと半年で副校長の職を勉強しようと思っていた矢先、そのような職に年度途中の8月から昇任した。嬉しさ半分不安半分、いや、不安がほとんどだった。しかし、弱音を吐いてはいられない。やらねばならないことを「やらなければ」と義務に思っていては、だめだ。大変さを楽しもう、そう思って着任した。

着任が夏季休業中だったのが、幸いだったのか、先生たちの名前と顔は徐々に覚えていけば良かった。しかし、今までに経験のない服務管理や臨時的任用職員との折衝など、まさに「転職」という感じで時間はあっという間に過ぎていく。先生たちからは「新任の管理職」だから、とは見てもらえない。経験は関係なく、求めら

れることはベテラン副校長に対するものと変わらない。「これは大変だ。勉強しなくては…」とは思うものの、日々の多様な職務に追いかけられている。

今、副校長に昇任して半年が経ち、ふと考える。改めて、副校長として何を身につけなくてはならないのだろうかと。知識、人間性…そのあまりの多さに驚きつつも、「楽しもう」という気持ちを忘れないようにしている。この気持ちが無くなってしまったら、きっと余裕のなさが顔に出てしまう。そうしたら、教員から見ても「管理職は魅力のない、ただ忙しい職」と取られてしまう。学校を活性化するには、副校長自身が、「職務を楽しもう」、それが、今の私にできることだと思っている。

学校経営、これが副校長の職としての醍醐味だろう。ところが、「学校経営」とは何か、と自問したときに、「学校運営」とあまり変わらないことしかできていない自分自身に気づく。まだまだ勉強が必要だ。今はまず、校長の考えを具現化することを心がけている。では、どうすればいいのか。当たり前だが、「人を動かす」ことであると気づいた。では、どうやって人を動かすのか、そのためには「人を育てる」こと。なんとなく頭では分かってきたが、実践が難しい。新規採用教員ならばまだしも、ベテランはそれぞれ個性がある。中堅教員にはそれぞれ自負がある。この教員を動かすには…。これが、半年で感じたもっとも難しい課題だ。

まだまだ、校長の意図を十分にはつかみ取っていない。副校長が校長の意図を十分に、いや完全につかまなければ、スムーズな学校経営に繋がらない。こう考えていくと、副校長は大変だが、やりがいがある職であり、教員が動き学校が動いたときに喜びを感じられるのであろう。

さらに、自分自身の理想とする教育像、学校像を確立させたいと思っている。教員の時に考えたことが、管理職になると視点が変わり、理想も変化してくる。自分の理想がなければ、校長に対しての進言もできない。今は、まだまだ、進言できるような段階に達していないが、できるだけ早く、校長に進言できるように自分自身も成長しなくてはと思っている。そのためには、「子供のためにという視点」「世の中の動き」「都の施策」を常に頭に入れて、精進していく。 10年前には、今の自分自身を想像できなかった。今は数年後さえ、想像できない。そんななかで、今できることを全うしながらも将来を考えていきたい。

ジャマイカで乗り切る

大野　哲也（上野）

前副校長からはいろいろなアドバイスを受け、引継ぎも丸一日かけて行った。しかし、いざ 4 月 1 日に学校に行くと早速困った。7：00 に学校に着いたが、校舎に入れない。セキュリティーを解除のしかたは教わっていたが、カードがない。うろうろしていると、10 分ほどしてバレーボール部の朝練習のために顧問の教諭が現われて、何とか校舎内に入れた。職員室に行き、副校長席に座っては見たが何をしてよいかわからない。校長にあいさつをした後、PC の電源を入れて TAIMS の転入手続きをしているうちに、ぽつりポツリと教員が出勤してくる。初対面のあいさつをするが、やはり、今度の管理職はどんなやつか？という疑心暗鬼な気持ちで見られているんだなと感じる。突然、「今日の午後は休暇でお願いします」と言われて、休暇処理簿を持ってきた。「あ、はい！」と受け取ったのは良いが、これはどうすれば…？

そのまま経営企画室に持って行き、事務担当者から処理の方法について説明をうけてやっと意味がわかったと同時に、管理職として押印することの重さを痛感する。

そういえば、4 月 1 日付で起案するように言われていた案件が何件かあったと思い、起案に取組むが、主幹のときのように、起案して副校長に渡して終わりではないことに戸惑う。やはり、経営企画室に行き室長に助けを求め、起案文書の流れを教わる。

10 時からは辞令伝達式だが、幸い本校から会場までは歩いていける。上野公園の満開の桜の木の下を通り歩いていくと、公園でのんびりと花見に興じている人たちがいる。昨年までは、4 月 1 日はいよいよ始まるという気持ちはあっても、かなりのんびりしていたような気がする。でも、副校長の仕事は朝からわずか数時間の出来事だというのに、もう何日も前のように感じ

る。これが、忙しいということか、と自分で納得してしう。

そうこうしているうちに1日が終わり、3日が過ぎ、1週間、1ヶ月を乗りきることができた。もちろん新米副校長で失敗もあるが、謙虚な気持ちで取組んでいくしかない。

「カラオケに子どもが行くというのを禁止しないのはどうしてか？ 学校で禁止してくれなければ親は止められないじゃないか」？？？などクレーム対応もすこしづつこなし、教員同士の怒鳴りあいのけんかの仲裁に入り、修学旅行でインフルエンザの生徒対応に追われて気がつくともうすぐ1年になろうとしている。残念ながら、毎日の仕事に追われてしまうだけで積極的な前進はできなかったが、来年は少しでも前進できるようになりたいと思っている。

校内で行ったメンタルヘルスの研修で「ジャマイカ」の気持ちをもっていくことが大切だということを知った。「じゃあ、まぁ、いいか！」という気持ちを忘れずにレゲエでもハワイアンでものんびりしたリズムで学校の波を乗り切って行ければと思っている。

開設準備担当副校長の役割

平野　篤士
（大田桜台高校開設準備室）

昨年4月にこの職場に着任し、早いものでもう1年が過ぎようとしている。平成21年4月に都内で2校目のビジネスコミュニケーション科の進学型専門高校を開校することがこの開設準備室の業務である。

現在の開設準備室は、私と校長の管理職2名と2名の主幹教諭を含む5名の教職員という実に小さな所帯である。そのため私のような新任の副校長が、普通なら着任早々から毎日追いまくられる教職員の服務や学事、施設・設備等の管理については、仕事の負担感はそれほどでもなかった。

しかし開設準備室には他の職場では経験したことのない様々な業務がある。教育課程や校内の様々な規定、新校舎の設計、新しい制服や校歌、校章まで、すべて一から検討し、決定していかなければならない。幸いなことに私が着任する1年前に設置されたこの開設準備室では校長以下、当時の2名のメンバーの努力の賜物で、大枠はほとんど出来上がった状態まで業務は進捗していた。

そのため開設2年目に着任した私の目標は、まず主幹教諭を含めた5名の教職員を、開校後に分掌や学年のリーダーとしてすぐに職務を遂行できるように育成することと、開設準備室初年度にはまだ進んでいなかった募集・広報活動の計画化と着実に実施することとなった。

まず教職員の育成については、着任後から一人一人の人柄や個性・能力などを見極めるように努め、それぞれの担当業務を中心にOJTを中心に人材育成を行った。例えばビジネス系の学校設定教科・科目の指導計画を検討することとなった職員には、最初に全体的な構想を2人で練り、続いて以前、長期研修で在籍した産業労働局で行っていた都内の産業経済の分析業務で得た経験や資料を土台に今年度の指導計画検討の進め方について方向付けを行った。また2名の主幹教諭については、教職員わずか5名の開設準備室ではあるが、そのメンバーを2チームに分けて、チーム内検討会、主幹会議、企画調整会議というプロセスをきちんと踏ませるように習慣づけ教職員のリーダーとしての行動をとれるように配慮した。

募集・広報活動は、開設準備室2年目の業務としては、最もウェイトの高いものの一つであった。募集・広報の担当者にもきちんとしたデータの裏付けに基づく計画やガントチャートによる適切な進行管理などを当初から実行させたため、開設準備室の全員が一丸となって早期から計画的に取り組めた。しかしながら実際に説明会や中学校訪問を始めてみると、都内でわずか2校目というビジネスコミュニケーション科の特色は、中学生・保護者は言うに及ばず、現場の中学校教諭にもなかなか伝わらず、努力の割に上がってこない数字に開設準備室内では日に日に焦りの色が濃くなって行った。

こうした時にいろいろと力になって下さったのが母体校の校長・副校長や他校の副校長の諸先輩方だった。こちらのことを日頃から何かと心にかけて下さるだけではなく、行き詰まって相談を持ちかけると、忙しい中でもみなさん親切に力を貸して下さり、本当に心強く感じた。

まもなく私たちの学校は開校を向かえる。この一年間の業務を振り返り、開設準備担当副校長の役割として最も大きいことは、当初に目標として掲げた人材育成と募集・広報であろうと経験的に感じている。あとはこれから向かえる転入教職員に、私たちがこの2年間取り組んできたことを漏れなく伝え、これまで育成に努めてきた開設準備室の教職員を中心に、校長の学校経営計画を着実に実現できるような組織作りがこれからの私の課題であろう。

副校長になって

幸田　諭昭（小石川）

小石川高校は、90周年を迎えた歴史と伝統を持つ学校です。現在は平成18年より段階的に小石川中等教育学校に改編し、今年は中等教育学校の3学年と合わせて、6学年が揃った年であります。

着任した今年は、創立90周年記念式典という大きな行事と中等教育学校へ改編途中であるということで、解決していかなければならない課題が山積している状況です。また、平成18年度から文部科学省からスーパーサイエンスハイスクールとして指定されており、この事業の推進という課題もあります。

そのような状況の中で、4月1日に着任しました。副校長に昇任した喜びより、緊張と経験がないことからくる先行き不透明な不安で一杯でした。先生方の顔も名前も覚えていないうちに、日々の服務処理をはじめとする業務が次々と押し寄せてきました。また、分からないことが多く、教諭や主幹のときに、しっかりと副校長の姿を見て、仕事の内容を理解しておけばよかったと反省させられました。

4月は、学校としての様々な調査、提出書類がある上に、スーパーサイエンスハイスクール関係の報告書などがあり、土日祝日はなしでした。帰りも、学校を出るのが11時過ぎという日々が続きました。5月半ばからは、もう少し早く帰れるように、朝5時30分に出勤したのですが、結局学校を出る時間はほとんど変わらずで、勤務している時間が伸びただけの状況でした。

2学期は、少し余裕が持てたものの、忙しい状況はかわりありませんでした。訪問者が合計9000人を超えた行事週間（文化祭・体育祭など）と授業公開があり、11月には創立90周年記念式典があり、12月には東京で初めて行われたスーパーサイエンスハイスクールの東京都指定校合同発表会の幹事校になり、息つく暇もないような状況で、よく生き延びたなというのが実感です。

3学期も、教育課程調書の提出、面接、授業観察、業績評価、来年度のスパーサイエンスハイスクールの実施計画書等の文部科学省への提出などが続いています。

こうして、一年間を振り返ってみると、本当に副校長は忙しいというのが実感ですが、忙しくても、副校長として仕事に臨むときに大切にしていることがあります。「しなやかな対応」です。教職員への対応、生徒への対応、保護者への対応、学校を訪問された方への対応、都への書類作成など、全てです。ところが、現実には先に述べたように、「しなやかな対応」とは程遠いのが現状です。一つ一つの仕事を泥まみれで、がむしゃらにやるのが精一杯というのが現実でした。

しかし、尊敬する上司や先輩から学んできたとても大切にしていることですので、今後も「しなやかな対応」を心がけて行きたいと思っています。

最後に、小石川には90年の歴史の中で、改称・改編を幾度かしてきましたが、失われず、変わらない校是「立志」「開拓」「創作」があります。この素晴らしい三校是を中心とした校風と伝統を守りながら、生徒たちに、より充実した教育活動が展開できるよう、今後も副校長として努力していきます。

副校長に関すること

林　　努（芝商業）

今思えば教員人生で初めて出会った校長先生と副校長（教頭）先生を一言で表現するとしたならば、まさしく「人格者」であった。教育に対する実直な姿勢がその存在からひしひしと伝わってくる先生であった。

数年ぶりに学校現場に赴任し感じたことは、学校には生徒と教職員に囲まれ生き生きとした活気があり、そして四季があることである。当たり前と言えば当たり前であるが、学期や行事などの四季を通じてメリハリのある生活の良さを改めて体感したことである。学校組織は人間力が集結された場であり、教職員個々のノウハウが生かされ、有形無形を問わず総合的な教育力として生徒に還元されるものでなければならない。

私は校長先生とともに着任早々主幹教諭と教科担当者から学校の現状を聴き取り、自分なりにその改善の方向性と取り組むべき課題を整理した。そこでの共通点は学校のビジョンが十分教職員に周知理解されていない点であった。転任校長と新任副校長だからそこできる発想もあり、私自身新鮮な気持ちで「職」に就いている。これもひとえに校長先生と経営企画室のサポートがあるからこそ副校長職が務まるものであり、心から感謝している。教職員は校長と副校長の関係を鋭く嗅ぎ分ける特質を持っており、両者の思考や目指す姿に差異があれば確固たる学校経営は築けないに違いない。これも未熟者を見守っていただける校長先生の優れた人格のお陰である。

さて、副校長職は校長先生の目指す学校経営計画に添った方策を提案し、教職員の英知を集結して具体的な実行に結びつけることにある。一歩一歩着実に学校経営の到達目標をクリアしていくためには、教職員のコミュニケーションが何よりも不可欠である。副校長は一つの目で教職員を見ているが、教職員からは何十もの目が注がれている。自らの言動、行動、態度こそ、コミュニケーションの第一であると思う。

気を引き締めて職務に邁進し、教職員に感謝の心を持ち、褒め、意欲を引き出し、育成につなげることが、創造力に優れた学校組織を基盤とした学校教育力の向上と学校経営計画の実現に繋がるものと確信している。

副校長になって

三保　和彦（八潮）

任用面接のときに「なぜ副校長になろうと思ったのですか」という質問に対して、こんな答えをしたのを覚えています。「若い教員といっしょに仕事をする機会が多く、この人たちを成長させたいという気持ちが強くなったからです。」

なぜ教員になったのか。数学をわかりやすく教え、笑顔で勉強に取り組んでいる、そんな授業をしたかったからです。

人が好きで、人を育てたいという気持ちがとても強いのです。しかし、実際に副校長の仕事をしていると服務管理、調査もの、文書づくり、会議等の準備、地域・諸機関との連携、保護者対応に追われ、なかなか人材育成で工夫したり、仕掛けたりすることができません。現在、できていることは、副校長通信を発行しているぐらいです。

能力がないのかも知れませんが、すべての業務を一つ一つ丁寧に仕事をしていると、夜の 8 時、9 時になるのが当たり前のようになります。6 時ぐらいに帰ろうとすれば、どこかで手を抜かなければなりません。でも、それはしたくないです。私自身は遅くなっても学校が変わっていく様子や若い教員が育っていくのを見て、嬉しく感じるので、苦にはなりません。しかし、私の姿を見て「管理職になりたい」という人が出てくるだろうかというと、これから副校長としての業務が増えることはあっても減ることはないであろうから今のままでは希望者は増えないのではないか。

副校長の仕事ってなんだろうと改めて法を見てみると、「副校長は、校長を助け、命を受けて校務をつかさどる」と書かれています。校務とは、「教育内容の管理」「人的管理」「物的管理」「運営管理」であることを知った上で、あえて副校長の仕事について述べさせてもらうと、副校長の仕事とは、教員と関わり、教員を育て、教育の質を高めていくことです。この仕事により多くの時間が割ける環境が整ってこそ、管理職の姿を見て「私も管理職になろう」という人が多く出てくるのではないか。私は今、教員集団の担任という気持ちで仕事をしています。

「人生意気に感ず」:人との関わりを大切にする教育を実現したい。

新米副校長雑感

清水　薫（小岩）

「自分用の布団が学校に欲しい。」これが新米副校長10カ月目の現在の心境である。

朝、出勤し、席に着いた瞬間から時計が壊れているのではないかとう思う程のスピードで時が過ぎ、ホットして時計を見ると午後6時である。パソコンの画面を見ながらカップラーメンをすすり、あと一仕事ではなく、あと十仕事しなくてはと、時間との競争を再開する。健康な体につくづく感謝する毎日である。

このような毎日の中で、ゆっくり副校長職について考えることはほとんどないが、日々の業務の中で、強く思うことが2つある。1つは「自分が動きださなければ学校は動かない。」、もう1つは「自分1人では何もできない。」である。

初めの点については、副校長が学校の様々な課題改善の具現化の核であり、方向性や戦略を主幹に示し、具体策を検討してもらい、教員に動いてもらう。まさに、副校長職の醍醐味であり、面白い点であろう。しかし、醍醐味も面白さも未だ味わえていない。自分の副校長としての非力さを1年目だからという言い訳で自分自身の情けない気持ちをごまかしている。毎日、元気に学校に通っていることでよしとし、自分を慰めている。

もう1つの点については、自分1人の力では学校は動かず、教員に動いてもらわなくては学校は動かない。しかし、これが非常に難しい。教員一人ひとりは高い能力をもっている。それを引き出し、仕事への意欲に結びつけるためには予想以上に高度な戦略が必要である。ここが、民間企業との大きな違いで、学校、特に高校に特有なのではないかと改めて思っている。

この2つの問題点の解決策はいずれも教員との信頼関係をつくることがまず第一歩なのであろう。しかし、またこれが難しい。日頃、服務等に関して注意をすることが多く、「自分たちを管理するために小岩高校に来たのか。」と面と向かって文句を言われることは日常茶飯事である。このような中で、教員との信頼関係を築くためには、誰に対しても、困っている教員に労を惜しまず、一緒に考え、対策を打っていくことだと考え、実践している。それでも不満をぶつけてくる教員は1人や2人ではない。しかし、忍耐あるのみ。「自分は教員の先生」と考え、生徒に対すると同様に、いつかは「逃げない、見捨てない、必ず何かしてくれる副校長」と信頼され、理解をしてもらえると信じて誠実な対応に日々務めている。

難しいことばかりの毎日であるが、副校長連絡会等で先輩の副校長先生達のお話を伺うことは参考になり、ありがたい。また、先輩の副校長先生の「一緒に考えてあげよう。」という姿勢は大きな支えである。来年度、自分も新任の副校長にアドバイスできるような力を身に付けるためにも、学校の核として教員の信頼を得られるよう精励したい。

現在の励みは生徒である。出張から戻ったある日の夕方、A君から声をかけられた。「先生、いつ寝るの。体大切にね。」また、別の日、B君が「授業について直接副校長に相談したい。」と突然やってきた。彼らに自分の存在を認めてもらえたのが嬉しかった。副校長になり、生徒との関係は教員時代とは変わった。そのせいか、生徒に教えることの素晴らしさをより強く感じている。この素晴らしさを教員一人ひとりに再認識してもらい、生徒の可能性を最大限伸ばせる学校づくりができる副校長に一日も早くなりたいと思う。

副校長になって

富川　麗子（小石川中等教育学校）

副校長として本校に赴任し、早くも10か月が過ぎました。この間、小石川中等教育学校のさらなる発展に向けて、本当に多くの時間を生徒・保護者・先生方・経営企画室の方と過ごしたという充実感があります。

振り返って見ますと、4月は週休日も含めて毎日学校に出勤している状況でした。しかも、早朝から深夜に及ぶ状況が続き、なかなか予定の業務が終わらず、「これからどうしよう」と真剣に考えることが多々あったことがついこの間のことのように思い出されます。

4月の私自身の校務運営上の目標を見ますと、手帳に「一日に20種類の仕事に対応する」と書かれています。これも未だにできていないこと

ですが、副校長の仕事は本当に多岐に渡っており、奥が深い仕事であることを実感しています。

日々の業務の一端を紹介しますと、中等教育学校の電話は直接職員室にかかってくるため、朝から一日 20 件から 30 件の電話に対応しています。その電話の内容を、担当の先生に用件を記してメモを渡したり、電話を転送したりして、朝からの忙しい業務をなんとかこなしている状況です。

また、本校は 6 年間一貫の中等教育学校であることから、あらゆる教育活動の取組が新しく、そのための会議や打合せが数多く行われます。

さらに、本校は、都民の期待に応えるため、募集対策を非常に重視しています。本校は、学校説明会や公開授業を積極的に行い、延べ人数で 8,000 名超の来校者があり、特に、9 月の行事週間には 7,000 名超の来校があります。学校外での学校説明会には、2,500 名を超える生徒や保護者等が来場し、本校に対する興味・関心を高くもってくれています。一日に 2,000 名近い来校者に対応していくというのも、醍醐味ではありますが、かなり緊張も要します。中高一貫校に関心のある来校者も多く、月によって毎週のように学校訪問があります。そうした人を含め、そのための資料の事前準備、当日の説明、授業案内・校内案内等にかかる時間も膨大です。

その他、中高一貫校としての特有の仕事もあり学校全体が活気に溢れています。多くの教員は、公募制で集まり積極的に仕事をしています。このことは、管理職を本当に助けてくれています。管理職として、いかに一人一人の教員の力を発揮する場面を設けていくかが役割の一つだと思っています。

このように改革に溢れ、創造的な教育活動の多い本校の学校運営を、副校長として、校長の学校経営計画を実現させるために、毎日のように報告・連絡・相談（校務連絡表）を大切にし、効率よく学校運営をしていかなければと常々考えているところです。

新しい学校を創るに当たって、課題もありますが、いかにその課題を解決していくか、そしてその解決策を先生方と見いだすことの大切さを認識し、先生方とともに取り組んで行こうと気持ちを引き締めているところです。

本校の生徒は、12 歳から 18 歳という長い時間をかけて大きく成長していきます。果てしない可能性を秘めた生徒たちがこの 6 年間で多くのことを学び、卒業後、社会の第一線で活躍し日本をリードする人材となれるような教育を実現するため、校長先生をはじめ先生方と力を合わせて取り組んでいきたいと思います。

今後ともご指導よろしくお願いいたします。

副校長になって

室岡　誠一（墨田川）

4 月に着任して以来、用意された業務をこなすことに集中してきたが、「あっ」という間に 2 月を迎えている。4 月に不審者の侵入対策の面から、職員にネームプレートの着用を呼びかけたときのことが大昔のことのようである。職員会議では「こんなものをつけて授業をすることは考えられない」などと一部から反対されたため、私は「今できる最善策である」と一般的な実例で説明した。しかし、それが決め手に欠けていたため、校長先生がすかさずフォローして下さったことが懐かしく思い出される。小さなことでも、学校の生活習慣を変えることの大変さ、そして、反対意見に対し、管理職側からの二の手、三の手を準備しておく先読みの大切さを身にしみて感じた日であった。今では、職員だけでなく、外来者のネームプレート着用もごく普通のことになっている。

墨田川高校は平成 12 年に進学型単位制高校として改革し、難関校への進学率の向上が期待されている学校である。しかし、生活面ではミニスカートとスウェットの重ね着、染髪の禁止をはじめ、生活指導面の課題が山積みになっていた。前任副校長が整備してきた制服導入が移行期を終えて全学年着用になり、課題の解決に向け全力投球中である。

突っ込みどころ満載の墨田川高校だが、学校を変えていくことの醍醐味が味わえるという点では最高の環境である。校長先生のビジョンは明確で、方向性は定まっており、「進め！」と気合いが入っている毎日である。高校改革のためだけに副校長をめざしたつもりはないが、学校を動かすことや新しい仕組みを作ることにはやりがいを感じていた。最終的に作った仕組みを

通して、良いものを生徒のために還元できればと考えている。

しかし、現実に戻ると、下校時にスウェットの重ね着を見つけると、自ら「スウェットを脱いで帰れ」と指導し、生徒からスウェットを預かっている自分がいる。「組織的な取組」になっていないと反省することの多い毎日である。

墨田川高校は、都の重点支援校に指定され、目標に向かって取り組み実績を出すことが今後3年間の大きな課題である。全館暖房の故障という緊急課題や、定時制の閉課程に伴い、施設の有効利用を検討できるという嬉しい話題もある。何事にも全力で臨む決意である。

副校長になって

白井　克昌（本所）

本校に着任し「教育は人なり」と言う言葉を日々実感として受け止めている。本校は、グラウンドがない狭隘校であり、環境としては恵まれているとは言えない。キャリア教育と生活指導で改革を進めている学校として一定の評価を得ているのも、施設設備などの環境条件でなく、「教育の質」を高めている証左であると考えている。教育の質を高めるには、最終的には教員の資質・能力を高める以外にない。

今、社会の中で多くの企業が組織として力を入れていることは人材育成である。どんな組織であれ、すべては人で決まると言われている。

本校の学校改革を前進させるため、さらに高い視点から本校の教育を見直して課題を浮き彫りにし、その課題を解決している毎日である。

4月当初より企画調整会議等の場面で、次から次へと課題を提示した。始めは教員もビックリした様子で多少の摩擦もあったが、現在では適度な緊張感になっている。教員と一緒になって解決策を考え、実行に移し、試行錯誤する中で、本校がさらに良くなり、教員の資質・能力の向上につながっていると実感している。

人材育成は、日々の職務を通じて行うことが最も良い方法であることを副校長になって確信することができたことは貴重な経験である。

副校長になり心がけていることは、何か難しい判断をする時に、校長ならどうするのか、自分が校長であったならどう判断するのかということを常に意識することである。

また、校長が今、何を考えているのかを思索する時間をつくるようにしている。多忙な中でも思索する時間を10分でもつくることが、校長の学校経営計画を具現化し、目標を達成するために大切なことであると考えている。

さらに、様々な判断で悩む時は、生徒にとってプラスになるのかどうか、生徒第一主義で考えるようにしている。当たり前のことのようであるが、毎日継続していくことはなかなか難しいことである。

ともあれ、今日も朝の校門指導で、生徒とあいさつを交わし、元気な生徒の笑顔が忙しい一日を楽しい一日に変えてくれる。私は、生徒にとって顔の見える副校長でありたい。

裏方の醍醐味

岡田　惠吾（小松川）

「舞台監督」という仕事をご存じでしょうか。演劇やオペラなどで、演出家の意向を汲み、伝えたいイメージを具現化するスタッフの調整、指揮、進行管理をする総責任者のことです。

芝居好きで、副校長になった今も、1年間に30～40本の芝居を観ます。

学校を劇場見立てたらどうなるでしょう。生徒を観客としたら、舞台に立つ役者は先生方、校長は演出家といったところでしょうか。

校長は「学校経営計画」という演出プランに基づいて、芝居（学校）全体の構成を考えます。役者である先生方は、授業や、ホームルーム、部活動といった様々な場面で観客（生徒）に作品（学校が目指す教育内容）を伝えます。

では、副校長の役割は？と考えてみるとこの「舞台監督」のような気がします。舞台監督は、稽古場では、稽古の進行や製作スタッフとの打合せ、小道具の手配、舞台美術のチェック（経費や技術の面で可能かどうかなど）、大道具の手配などを行います。これだけでも多種多様な役割をこなすことになりますが、このほかにも「デスクワーク」があります。これは、上演のための書類づくりです。例えば、公演概要・舞台転換表・舞台稽古のタイムテーブルなどです。

公演が行われる劇場にはいると、会場への道具などの搬入、仕込み、舞台稽古、本番の進行など一切を仕切ります。そして、なにかトラブルが起きれば、真っ先に駆けつけなくてはなりません。

どうでしょう。副校長の仕事に似ていませんか？生徒の状況の把握、経営企画室との打合せ、日々の授業や特別活動・行事の計画や準備、そして膨大な書類整理。とても共通項が多いように思います。わがままな役者達（教員達）の力を最大限引き出し、いい演技をしてもらうために、演出家と共にいろいろと働きかけるのではと考えると、それも共通しています。

さらに共通項があります。観客は舞台監督のことなどだれも気にしていないという点です。私自身、「この演出家だから」・「この役者が出演するから」という理由で芝居を選びますが、舞台監督で選んだことはありません。というより、舞台監督が誰かなど考えたこともありません。副校長というものも生徒から見るとこのような存在かと思います。

こう書くととても寂しくなりますが、でも舞台監督なしには芝居は成り立ちません。裏方に徹し、舞台を支えるやりがいは役者（教員）として舞台に立っていた時とは異なる醍醐味を感じています。

幸い私は、小松川高校という伝統ある劇場（学校）で、指導力のある校長（演出家）と能力の高い役者陣（先生方）やスタッフ（企画室）、それになにより素晴らしい観客（生徒達）とともに毎日を過ごしています。その観客により多くの感動を伝えられるように努力していきます。そして、今度芝居に行く時は、演出や役者の演技を支えている、舞台の向こうにいる舞台監督の存在にも目を向けてみようかと思います。

でも、やはり目の前の舞台に目を奪われてしまうでしょう。それでいいんです。きっと。

副校長になって

猪又　英夫（調布北）

新しい職務、新しい職場での仕事は多くの改善策が浮かんできて、やりがいがありおもしろい。4 月の異動で学校が変わり、副校長に昇任して立場が変わったことで、おかしな慣習や改善しなくてはならないことが多く目に付く。どうしてこのような状態なのか不思議なことが多くある。主幹や関係の教員にこっそり聞いてみると、異動したときはおかしいと感じたが、慣れてしまうとその方が楽だとの返事が返ってくる。楽で仕事をやられては困ってしまう。それ故、学校の状況が分かってくればくるほど、ここも改善しなくてはと、いろいろとアイデアが沸いてくる。副校長としては、それを、トップダウンではなくどのように改善させるか、どの分掌どの教員から口火を切るか、軌道に乗せていくか毎日頭を使う。ハードルが高いほど、どのように乗り越えるかやりがいがあり、ファイトが湧いておもしろい仕事である。

私は学校の中で特に 2 つの改善を目標にしている。一つは、学校全体の時間をいかに有効に使うかである。まず、副校長の仕事としてはいかに雑務（ルーチン化した仕事）を減らし、学校をより良くしていくために動ける仕事を増やしていくかがポイントである。現在 8 割の雑務を 4 割以下にするのが目標である。そのために、教員の日々の出退勤管理などパソコンを利用することでかなりの業務量を削減した。毎日のようにある調査等は、すぐに回答できるものは 2 日以内に仕上げる。それ以外は関連分掌主幹にすぐに手渡し、提出日 3 日前までに副校長に提出させる。そして、近い将来、全職員に配置されるタイムスパソコンを有効利用することで、出退勤管理や調査ものなど一層の効率化を図る。

また、副校長の仕事は、学校全体の仕事をスムーズに回転させるための段取りが重要である。その上で、各会議の開始時間や会議時間の厳守など時間管理の徹底を図る。管理職は「時間は人件費」の観点で教員のコスト・パフォーマンスを常に考えていくことが不可欠である。

次の目標は、学校全体を真の開かれた学校にしていくことである。「教員の常識、社会の非常識」とよく言われるが、それを是正するためにも、教員に社会との接点を多く持たせる仕組みを作り出す。まず、教員には授業公開を日常的に実施して常に授業への緊張感を持たる。他教科の教員、保護者、中学生とその保護者、他校の教員などに授業を評価してもらい、授業研究を日常的に実施する風土を作ることで学校全体

の授業力向上につなげる。また、広報広聴として出前授業や中学校・塾等での説明会などに全教員を参加させ、民間企業や他校と本校の実態を比較させる。さらに、奉仕・キャリア教育など外部の体験活動先の開拓・調整・企画などに積極的に関わさせることで教員が社会を直接知る機会を作り出す。

学校のマネジメントは「生徒達が出来ないことをできるように分からないことをわかるようにして、より豊かな人生観を持たせ自立させること」である。そのために調達しうる資源とは「人、物、金」さらに「情報（コミュニケーション)、時間」である。限られた資源を上手に組み合わせて、実際の軌道に乗せていくことが管理職の仕事である。私は副校長としてその動きを最大限に演出し、より良い学校作りに邁進していく所存である。

魅力ある副校長

笹　のぶえ（都立大学附属）

もしも、宮澤賢治の詩を借りて、魅力ある副校長を述べるとしたら、

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
書類の山にもタイムスの調査にも負けぬ
丈夫な心と体を持ち
慾ハナク
決シテ怒ラズ
イツモシヅカニワラッテイル
生徒の「おはようございます」の挨拶と
先生方の「お疲れ様」の声を励みに
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
八雲の丘の銀杏の蔭の
学舎の中の職員室に居て
東に行事や部活動で頑張っている生徒がいれば
行って大きな声援を送り
西に職務に専念する教職員がいれば
行ってあまり無理をするなと労い
南にPTA活動に協力的な保護者がいれば
行って感謝の気持ちを述べ
北に締め切りの迫った書類の山があれば
行って主幹教諭と一緒に黙々と片づけ
日照りの夏は熱中症を心配し
寒さの冬はインフルエンザを予防し
みんなに副校長と呼ばれ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

と、書きたいところだが、新補の副校長として、賢治のように達観した境地には到底至れず、「日々の校務に追い立てられた。」と言って過言ではないこの一年であった。

そもそも欲張り私は、人生のどの時期におけるキャリアレインボーを描いても、職業人・家庭人・地域人・趣味人としての自分を位置付けないと落ち着かない。しかし、限られた一日24時間の中で、校務に追い立てられていては、到底他の3つの自分を生きることはできない。「4つの自分を生きるために、どのように限られた時間を活用するか。」これが、今の私の最大の課題である。

時間に追い立てられて、忙しさに汲々としている副校長の姿は、決して魅力あるものとして教職員に映る筈がない。水面下では必死に水を掻いてはいるが、いかにも優雅に見える白鳥のように、魅力ある副校長を私も目指していきたい。

「今年は当たり年ですから」

廣末　修（新島）

「今年は当たり年ですから」と、本校の校長から説明された。確かに、本校が新島村諸行事分担校一覧の9つの役割の中の6つを分担していた。

4月は「新島地区教職員住宅入居者連絡会」に始まり、「新島村一貫教育研究協議会」全体会まで慌ただしく過ぎました。5月には「創立60周年式典」を挙行しました。

しかし、50年に1回の大当たりは「東京都島しょPTA連絡協議会合同研修会」の幹事校でした。開催地が2年ごとに八丈→三宅→新島→神津→大島と回っていて、新島地区には小中高の

5 校があるので、このような確率になるのだそうです。10 月のこの合同研修会は保小中高の 8 単Ｐがそれぞれの役割を果たすことによって、盛会裏に終わらせることができました。このプロジェクトは今年度内に、報告書と DVD を完成させ、来年度の総会で次回の開催地にバトンを渡して、終了となります。

島しょＰや新島村一貫教育連絡協議会の幹事校の仕事を通じて、保小中高における教職員や保護者との連携の深まりを感じています。今後も新島村の幼児・児童・生徒一人ひとりの資質・能力を伸ばす教育の充実に一層努めたいと考えています。

ところで、「学校だより」に「働くことによって」という題名で寄稿しました。この文章は『将来、社会人となり、「金のためだけに働いているなぁ」と、ため息をすることがあったなら、「人や己のために働く」ことの意義を思い出してほしい。』と結びました。

私たちはお金のためだけではなく、生徒や保護者、教職員のために働いています。また、私たちは働くことによって、自己の個性や能力を発揮し、社会全体を豊かにしているはずです。

当たり年の仕事量の多さに閉口することもありますが、幸いなことに、住まいの教職員住宅から現任校までは徒歩 10 分です。残業、土日出勤は、通勤的には苦ではありません。

仕事に追われている日々ですが、これからは仕事を追いかけようと考えています。今後ともご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

新任副校長として

鵜飼　敦之（桜修館中等教育）

「一体何をしたら良いのだろう。」というのが率直なところ。着任を終えた当日に職員会議、その後も 4 月当初は、教育委員会への報告や調査などの業務に追われた。また、配置先が中等教育学校の前期課程で、教育課程はもちろん生徒指導などについても、これまでの私自身の経験では、簡単に処理できないことも多かった。当然のことながら学校の課題が何で、またその課題を改善・改革に結びつけていくという実践までには遠く及ばない。「とんでもないところに来てしまった」という感じであった。このイメージはなかなか払拭できないでいるが、校長先生の丁寧な指導と母体校である副校長先生との連携で、徐々にではあるが周囲の状況が、見えるようになってきた。

副校長は、まさに情報の結節点である。文書管理からクレーム対応、教員の状況把握などあふれる情報の速やかな交通整理に努めなければならない。もし副校長の対応が遅れると「渋滞」が生じ、直接、校長へという「バイパス」がつくられることになる。もちろん実際には、私の気づかないところで多くの課題を校長先生にサポートしていただいているのでしょう。また、分掌や委員会など主幹・主任との調整機能が期待され、これらの組織の組織推進の役割も求められる。本校のように前期課程と後期課程（来年度から）、中学籍と高校籍の教員集団、母体校との関係など組織が複雑であるため、企画調整会議などの組織運営における中心的な役割への期待も大きくなる。

このように副校長には、校務の最高執行責任者としての役割が求められているとのだ思う。さいわいに様々なステイクホルダーに近く、情報の最前線にいるという強みを最大限生かして情報を収集・整理し、新たな企画・提案を行い、学校を元気にすることに努めたい。

着任して、1 年近くが経とうとしている。頭ではわかっていても、なかなか行動にはつながらない。諸先輩方のご指導をいただきながら、校長が示すビジョンの実現に向け、奮闘努力したい。

副校長になって

渡辺　政彦
（練馬地区中高一貫開設準備室）

私は教員になり二十数年になるが、これまで指導主事の経験も含めて実に様々な経験をさせていただいた。そして今年度は中高一貫教育校の開設準備室の副校長ということで、立場の上でも新たな経験ができたことは大変よかった。特に自分は中学校籍なので、高校の学校生活は新鮮で、日々驚きの連続である。例えば、最近のことでいえば、入学選抜は、これまでは生徒

を送り出す側にいたのが、今年度からは受け入れる側になり、改めてその大変さを痛感した。その他にも授業や行事、生徒指導の在り方など中学校と高等学校の文化に大きな隔たりが存在すること、そして、それぞれの良さや課題が見えたことはこれからの管理職に大きなプラスになることは間違いない。

また、開設準備室の職務も大変やり甲斐のある仕事である。教育内容はもちろん校内組織や規則、さらには校舎を含めてまったく新しい学校を一から作る醍醐味は格別である。基本計画はできていてもカリキュラムや学校の特色、校歌や校章などを具体化することは、雲をつかむような話であるが、これから求められる学校は何か、何が必要かを考えることは、大変有意義である。

ただ、職務についてはデスクワークが中心なので、準備室に勤務している先生方は教える生徒がいないことや学校行事がないことを大変残念がっている。学校では体育祭や合唱コンクール、遠足などが決まった季節に行われ、また、定期考査の処理と通知表作成、そしてその後の長期休業などといった緩急のリズムもある。準備室には季節感やそうしたリズムが全く感じられないことが残念である。しかし、この準備もあと1年。22年度に新入生が入った際には、今準備室にいる先生方には生徒がいなかった不満をきっと十分に発揮してくれるでしょう。

最後に、中高一貫校で難しいのは中学校と高校の先生方の共通実践であるといわれている。残念ながら教員は自分の経験をもとに物事を思考する傾向があり、新しいことにはなかなか対応できないことは周知の事実である。その課題を克服するためには何よりも人が替ってもブレのない方針を築くことが重要であると考えている。そのためにも、中学と高校の教員がともに理解できるしっかりとした“土台”を作りたい。残された時間はあと1年。生徒が楽しく生き生きと過ごせる、そして、6年間を通してその持てる力を十分発揮できる骨太の学校作りをめざしていきたい。

職が人をつくる

佐藤　和彦（野津田）

昇任して10ヶ月が過ぎ、〈副校長職〉に対する違和感のようなものを、ようやく感じなくなってきました。そして、朝の巡回時には、校舎の4階から周囲の景色を見渡し、四季折々の自然の風情を感じる余裕すら生まれてきました。

昨年の4月1日に野津田高校に着任し、初めて休暇簿の決定権者の欄に承認印を押したときには、「本当に自分でいいのだろうか？」という大きな戸惑いのようなものを感じました。同時に、〈副校長職〉の職責の重さをあらためて痛感し、その日の辞令交付式とは比較にならないほど緊張したことは、今日でもはっきりと覚えています。当初には、「副校長先生」と呼ばれても、自分のことだという実感がまるでなく、一瞬「誰のこと？」と考えてしまうこともたびたびありました。

それからの毎日は、文字どおり転職をしたような日々でした。「何がどこにあるのかがわからない。」「誰にきけばよいのかがわからない。」という状態が続き、まるで籠のハムスターがクルクルと車輪の中で走り回っているような状況でした。早朝に出勤し、あっという間にお昼、油断をするといつの間にか夕方、気が付くと夜の8時9時という生活で、まるでタイムトラベラーになったような感覚でした。昇任前には、教務・生活指導・進路指導の三主任を経験し、〈副校長職〉への自信も少しはありましたが、それも一瞬のうちに崩れ去ってしまいました。それどころか、「本当にやっていけるのだろう？」と自問自答することも正直何度かありました。

さらに、仕事の上での失敗もいくつも経験し、現在に至っています。また、教員になって初めて、風邪以外の病気で休みを取り、校長先生をはじめとした方々に、ご心配とご迷惑もおかけしました。「このまま病気で休職か‥」という不安な気持ちのまま、治療のために胸に管を入れながら勤務し続けたことは、一生の思い出（？）になるかもしれません。

先日、アテネ五輪のサッカー日本代表の山本監督とお会いする機会があり、「成功は失敗に比例する！」という言葉をうかがいました。失敗の数が多いほど、大きな成功が得られるという

この言葉が真実ならば、私の副校長としての将来はきっと明るいはずだという希望がわいてきました。この言葉を信じて、これからも教育管理職としての「覚悟」を決めて日々の職務を遂行していきたいと思います。副校長としてはまだまだ半人前ですが、「職が人をつくる」の言葉どおり、未熟ながらもこの10ヶ月で少しは成長したはずです。今後ともご指導のほど、よろしくお願いいたします。

副校長としてできること

古川　直浩（若葉総合）

副校長の業務は非常に多岐に渡り、今までと全く異なった視点でこなしていかなければならない。私が副校長になって心がけていることは、先生方にやる気になってもらうように方向付けていくことである。若葉総合高等学校には、総合学科であることから普通科にはない必修科目が存在し、強い負担感を示す教員が少なくない。私もかつて総合学科高校で主幹をしていた時期もあるので、この負担感はよく理解できる。しかし、総合学科高校である以上、例えば「産業社会と人間（以下産社と略す）」という総合学科の根幹となる科目を避けて通ることはできない。従って、私のできることは、物理的な負担を取り除くことではなく、心理的な負担感をどれだけ軽減できるかということである。つまり、総合学科高校の様々な試みが、ただの負担ではなく本当に意味のある事柄になっているのかどうかを検証することが必要だと考えた。

私が本校に赴任した当初は、「産社」に対する不満（負担感）の声が非常に多く聞こえてきた。このことは、別に驚くようなことではなく「若葉総合も同じ道を辿っているのだな」ぐらいに考えていた。しかし、副校長である私は同様な批判をすることは許されず、この負担感を和らげる方策を立てなければならなかった。そこで、総合学科の根幹である「産社」における「科目選択指導」と「大半が学校設定科目である選択科目」が実際に本校の生徒の進路決定に役立っているのかを検証してみた。すると、若葉総合の今までの3年間、苦しい中で行ってきたことが極めてシャープに進路決定に役立っていることがわかった。つまり、きちんと科目選択できた生徒ほど、より高い進路実現を果たしていることが検証できた。このことにより、総合学科が普通科とは異なる方法で進路実績を追求できることが先生方に伝わり、また、このような総合学科の強みを生かした進路指導の意味が伝わったと考えている。当然のことではあるが、たったこれだけのことで全教職員の意識が変わり、「産社」等の科目の運営に関し負担感がなくなったなどというつもりは毛頭ない。しかし、確実に今まで「無意味なことをやってきているのではないか」「ただ、負担が大きいだけなのではないか」と思われてきた事柄に確かな意味を加えたことは自負できる。

副校長としてできることは、先生方を通じてその向こうにいる生徒を良くしていくことである。そのために、先生方のやっていることがどれほどの意味があるのかをきちんと検証し、成果の上がっていることが目で見てわかるように示してあげることが大切だと考えている。

副校長になって

辻　信宏（八王子桑志）

本校は東京都初の産業科高校として開校2年目を迎えています。現在は2学年12クラス、生徒数は420名で、来年度に全学年が揃います。

学校施設は諸般の事情により工事継続中で来年度に向けプール棟工事がこれから始まり、再来年度に校庭が整備されすべてが完成する予定です。今年度は体育館改修工事等で外部の体育施設で室内系クラブ活動を実施し、生徒・顧問に不便を掛けました。

生徒は非常に真面目で校則の茶髪・ピアス等の禁止を守り。制服も正しく着用しています。生活指導面も特別指導が4月から一件しかありません。生徒は社会的に評価の高い資格取得や検定合格に積極的に取組み、週休日等に学校で補習補講を頻繁に受けています。

赴任時に前任副校長が病気休職中で十分な引継ぎがなく、参考になるデータが見つからず、ほとんどすべて新規に副校長の仕事を行い、常に仕事に追われ、TAIMSを見切れずその後始末に追われていました。定時制副校長・前任校副

校長や多数の副校長の支援によって関門の4月をやっと乗り越えました。本当に感謝しています。また、先生方の授業観察や面接にこれほど時間がかかるとは思いませんでした。

新設校としての課題は、八王子桑志高校が歴史や伝統ある母体校の第二商業高校と八王子工業高校を統合し、八王子地区にIT教育を土台として、ものづくりから流通やデザインまで学べる専門高校として開校したこと。また、産業科という新しい学科を受験生や地域に理解して貰うことです。そのために広報委員会を中心とした先生方に出前授業、体験授業、中学校訪問、学校見学会、学校説明会、個別相談等に積極的に取り組んで貰っています。また、生徒が地域の小学校や中学校との連携事業や地域のイベントである「八王子いちょう祭り」に奉仕体験学習として学年全体で参加し、積極的に地域と連携しています。

来年度は完成年度を迎え1期生の進路保障など課題が山積しています。校長のリーダーシップのもと企画調整会議を機能させ、組織として教職員が一丸となって学校経営計画実現へ取り組んでいけるよう努力していきたいと考えています。

副校長になって

藤井大輔
（小金井地区科学技術高校 開設準備室）

開設準備室担当を命ぜられて1年が経過しようとしている。昨年4月に着任したときは、勝手が分からず、見るもの全てが新鮮であった。着任時、都立小金井工業高校内にある開設準備室には、机、イス、パソコンがそれぞれ5台あるだけであった。プリンターもなく、パソコンもTAIMSにつながってない、全くゼロからの出発だと痛感したことを覚えている。

そんな中、小金井工業高校の管理職、教職員の方々には多大な協力をいただき、民間から着任した校長、副校長、主幹教諭、教諭、係長の5人からなる小さな組織が立ち上がった。

ここでの副校長としての業務は、多岐にわたる。多方面との折衝は勿論のこと、開設準備スタッフが提案してくる様々な施策について都立高校改革推進計画 新たな実施計画及び学校基本検討計画に沿ったものとなっているか、また東京都教育ビジョンを意識したものとなっているか等を確認し、提案者と一緒になって企画立案を行うことである。人材育成の難しさを痛感しながらも皆、良くついてきてくれていると感じる。

さらに今年度は学校PR業務に力を入れたため中学校や地教委へは多く足を運んだ。中学校への訪問は開設準備スタッフ全員で行い、一人当たり70校くらいは訪問した。中学校の教員からの声は学校づくりにも大いに参考になった。ある学校では、「新しい学校を作るなら、分かりやすいものにして欲しい。最近、様々なタイプの学校ができているが中学校側では掌握仕切れません。」と言われ、改めて顧客（保護者、教員、生徒）の視点を大事にした工夫したPRが必要だと感じた。

最近、知り合いに会うと「開設準備室の業務は困難なのか、楽なのか。」と問われることがある。業務に困難も楽も無いとは思うが、感じることは、“失敗”という二文字は有り得ないということである。副校長として様々な価値観をもった職員をまとめることや、多方面との折衝は楽ではないかもしれない。しかし様々な状況を巧みに操り、先を予想しながらの舵取り役は大いに魅力を感じている。今日は、都立高等学校の推薦入試日である。来年の今頃はどんな顔しているのか。予想している自分を今、顧みると何となく楽しくなる。

副校長になって

久下　尚男（田柄）

学校を「動かす」、組織を「動かす」ことの楽しさを実感している。学校を動かすため、副校長の力量が問われる。段取り、調整力、学校の現状を鳥瞰できる力、校長の学校経営を具現化する力など新人の副校長として、毎日が挑戦である。

今年、田柄高校は改革元年であり、重点支援校として人材面、財政面の支援を得て出発した。数年前から学校全体が改革へと進み、今年度の取組があり、その成果が漸次に現れている。「学

校がよくなっている」と思う瞬間が、管理職としての醍醐味を味わうときである。さらに、この喜びが教員と共有できて本物である。

また、仕事が「楽しい」と思うときがある。ある日新人の教員から相談を受けた。相談内容は家出をした生徒とその保護者の対応についてであった。一緒に考え、解決策を提案した。後日、その新人教員は満面の笑みを浮かべ、「生徒が無事に家に戻りました」と報告してくれた。問題が解決できたことよりも、その新人教員の成功体験を一緒に喜べることにこの仕事の楽しさを感じた。

教員からの相談を受ける回数は多い。学校における課題が多いことの表れであると同時に、チャンスが多いとも考える。つまり、課題解決は教員の士気を高めるチャンスでもある。さらに、課題解決という結果のみを追うのでなく過程を楽しむ。その課程を楽しめるチャンスであると捉えている。「できない」でなく、「できた」部分を見て前進したことを喜びたい。そして、分掌・学年の教員メンバーが同じベクトルで動くとき、一体感を少しでも感じることができたら、これが副校長職のやり甲斐であると思う。

また、どうしたらもっといい仕事ができるだろうと考えることが多い。今できる「いい仕事」とは外部の教育力を十分に活用することであると実感している。関係の外部団体と連携をとり、学校カリキュラムの潤滑油にしていくことである。今年度本校は国際交流をはじめ新しい取組をしている。その中で様々な関係団体の人と会い協力を得ている。さらに、人と人との繋がりが、新たな人との繋がりを生んでいく。新しいものを様々な人が一緒につくり上げていくことをこれからも楽しんで行きたい。

副校長になって

大熊　一正（八王子中高 開設準備室）

今年度より、八王子地区中高一貫６年制学校（仮称）開設準備担当副校長として勤務をはじめた。私自身、中学校での理科教員としての経験、そして市教育委員会での指導主事としてのわずか１年の経験でこのような大役を命じられたことに、やりがいと共に大いに不安を感じたものだ。

開設準備室には生徒はいない。いるのは、私以外に３名の先生方だけである。仕事も開校に向けての準備と小学生に向けての学校説明会等のＰＲ活動が中心である。

私が管理職になろうと決心したのは、中学校の現場での大きな変化であった。私と同じ位の年代の人は皆さん感じていると思うのだが、初任者として教員になった頃は、同輩の教員がそれなりにいて、お互いに議論し協力し合いながら仕事をしたものである。そして先輩の先生方からアドバイスをいただいたり、怒られたりしながら仕事を覚えていったのである。

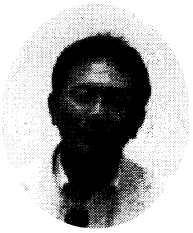
しかし、私たちよりも若い人たちは極端に少なく、異動を重ねてもずっと若手であったように思う。気がつけば、主任などの職を任されるようになったが、まわりの教員はみな先輩といった状況が続いた。ところが、最近になってすこしずつ初任者が入ってくるようになった。そして、若い教員が日々悪戦苦闘する姿を見ていると、自分たちの若い頃との違いに愕然となった。それは、若い教員と一緒になって指導できる教員があまりに少ないことである。私自身も自分が今まで過ごしてきた教員としての経験をどう若い教員に伝えていったらよいかを自問自答するようになった。その中で、管理職となって現場の様々な困難に対応していくことも自分にとっての大事な役割ではないかと思うようになったのである。

昨年度は、指導主事として１年間勤務させていただいた。この１年間の経験も私自身には大きいものだった。教育行政の立場で学校を見たときの視点の違いや様々な事務のやり方など学校の中だけでは経験できないことを大いに学ばせていただいた。さらに、小学校での、若い教員が半数を占めてなかなか育成が難しい現状を見ると、ますます自分の思いは深まった。中学校や高等学校では、小学校ほどの状況にはないと思うが、若い教員にどう力をつけてもらうかは、学校を作る上での重要な視点であることを再確認することができた。

今年度、開設準備室で仕事をしている先生方はみな力を持ったベテランである。開校準備という仕事ではベテランとしての技量や判断が必要であり、とても助かっている。その意味では、

この１年間は副校長としてというよりも、開設準備室の一員として仕事をしているという感がある。来年度はさらに２名の先生をむかえ、開校準備も正念場である。そして、平成 22 年 4 月の開校時には、今よりもさらに多くの先生方、そして新入生（一期生）と共に新しい学校がスタートを切る。生徒はもちろん、先生方も共に成長できるそんな学校を目指して、私も副校長として日々成長していきたい。

10(1) 講　　話



〈瀬古利彦先生講演会〉
「心で走る」

講師　　瀬古　利彦　先生

今年8月、北京でオリンピックがあります。私、マラソンをやっていましたもので、マラソンやオリンピックのことを話させていただきます。マラソンで言いますと、女子では野口みずき選手。彼女は今絶好調ですね。4年前のアテネでは優勝しました。力がもう一つレベルアップしていますから、また優勝するチャンスはあります。あと土佐礼子選手。日本一我慢強い女性。世界一かも知れない。北京はめちゃくちゃ暑い、めちゃくちゃ空気が悪いらしいです。悪条件に強い土佐選手は、野口選手に勝つかもしれない。私はワン、ツーと思っていますから、女子マラソン。あと、弱冠21歳若手の中村由梨子選手がこの間、名古屋女子マラソンで勝ちました。その選手も何をやるかわかりませんからね。そうすると、私は女子マラソンはワン、ツー、スリー独占という昔の札幌オリンピックの70M級ジャンプで笠谷さん方が打ち立てた偉業を彼女たちが再現するのも夢じゃないと思います。ですからみなさん是非応援して下さい。

練習しなければ、世界には勝てない

マラソン選手は、朝15kmから20kmくらい走り、午後は30kmから40kmくらい。合宿では、午前中15km、午後20kmとか、ずっと走りつづける。42.195kmは結構長くて、辛くてゴールするのは大変なんです。それを長いと思ったら負けなので、短く感じさせるために練習を工夫します。私の場合、40kmくらい走ったのでは短く感じないので、6、7時間かけて一日最高80km走りました。それを聞いた宗兄弟が、負けてられないと120kmを堂々と走る。静岡から小田原までいける勢いですよ。つまり、練習時点から、すでに競争がはじまっています。

35kmからがマラソンの勝負。この時点からは、駄目だと思った瞬間にもう駄目です。現役当時の増田明美さんは、毎日20km40km走ってもまだやることがあるといい、走ったあとに2時間半くらいかけて腹筋を5千回やっていた。それくらいやらないと、マラソンの練習は成り立たない。私は学生のとき、石を持って、安全靴はいて、教科書持たないで学校行きましたから。(笑)徹底しないと勝てません。同じことの繰り返しを毎日やります。外国の選手からは、日本のマラソン練習のやり方はクレイジーだとか、怪我をすると言われます。でも日本人が勝つには、そういう努力を重ねるしかない。

アフリカのケニア、エチオピアの選手達を見てください。実に速そうでしょ？ 彼らは、学校に行くとき電車もバスもないので、5km10km を走って通っていて、それが自然と高地トレーニングになる。小学校の時から日に30km近く歩いたり走ったりしている選手と、まともに戦って勝てるわけがない。

私が所属するエスビー食品にもケニアから来た留学生がいました。新幹線で静岡付近を通る中、彼が、「瀬古さん！富士山の頂上を見てください！旗を振っている人がいます」という。視力が10.0あるのだから驚きますよ。彼らは足の筋肉も心肺機能も日本人と比べたら、持っているものが違います。

モチベーションも違う。例えば、エチオピアの現在の平均年収は、一万九千円だといいます。それが、国際マラソンで優勝したら、賞金は一千万円を超えるでしょう。日本人の一千万円とエチオピア人の一千万円は同じですか？その価値においても大きな違いがあります。

マラソン中は、自分とライバルを観察

「瀬古さん、マラソンを走っている間、何を考えていますか？」とよく聞かれます。そんなに考えることもないんですが、大体、最初の

5km10km で自分の体調をみるんですね。私の場合、汗のかきかたで体調が分かる。そして、ハーフの時点で、「あっ、もうきたな」とか。「もうきた」ということは、動きが滑らかになって体調がいい証拠です。30km までくると大体相手の体調も分かります。日本人選手なら顔色の変化を見るし、外国人選手なら汗が乾いてきて、背中が乾いた汗で白くなってくると、私の最大のライバルでしたタンザニアのジュマ・イカンガー選手の場合ですと、「ああ、イカンガーはちょっと辛そうだな。」とか観察するわけです。35km となると勝負、「イカンガーは何処にいるか？いつスパートするのか？」 40km では、「ここでイカンガーと勝負だ！よし抜けた！」と。抜き去って余裕がでてくると、「優勝インタビューではどうしゃべろうか？」なんて考えていました。(笑)

どちらかというと、試合よりも試合の前の方がいろんな事考えるんですね。12 時スタートだと、だいたい 6 時に起きます。ウォーミングアップで 5,6km 走って、4 時間前に食事をします。私の場合は、ご飯を茶碗 3 杯食べて、ハムエッグ 2 つ食べて、ほうれん草のおひたし食べて、味噌汁飲んで終わり。あとの 4 時間は、もう食べません。

直前のウォーミングアップまで 3 時間くらいあって、いろんなこと考える。今まで、食べたいもの我慢して頑張ってきたから、終わったら好きなものを食べたい。女の子だったらケーキ食べたいとかね、私の場合は、ビールですね。それと、トイレにも気を使いました。

二人は一人に勝る

私が早稲田に入った当時は、箱根駅伝でも予選落ち、出ても下位だとか、ひどい状態でした。これは何とかしなくてはということで、OB の中で一番厳しいといわれる中村　清監督を連れてきたんです。中村監督は、陸軍中野学校出身でベルリンオリンピックにも出場しているんです。

着任早々、我々は集合させられて、5 時間位話を聞きましたね。「こんな弱い早稲田にしたのは OB が悪い、大人が悪いからだ。赦してくれ！」といって、自分の顔を平手で思いっきり張るんですよ。バンバンバンバン、血が吹き出てきます。「赦してくれ、頑張るから」と。そして、砂をとって「お前ら、この砂を食べられるか、世界一になれると思ったら食えるか？」と言って、食べてしまいました。その時、私が教えてもらいたかったのはこの人だ！と。神様の思し召しだと思いましたね。

「また今日も 30km 走るんですか？」と言った途端に、「お前は駄目だ。毎日、今日生まれた如く練習しなければ駄目だ。今日一日を真剣にやりなさい。子供を見なさい、桃太郎、一寸法師、読んだ端からまた読むだろう。子供は同じことの繰り返しをする。すぐ成長するから何度同じ話を聞いても楽しくてしょうがない。そうなったら、いくらでも走れる人間になる。練習で泣いて、試合で笑え！」と言われる。

中村先生はクリスチャンではないんですが、聖書が好きで「瀬古、教会に行こう」と毎週日曜、教会に通っていたんです。聖書には、いろいろ書いてあるんですね。「二人は一人に勝る」一人の時は哀れである、これは助ける人がいないから。Q ちゃん（高橋尚子さん）がシドニーで金メダル取りました。ただね、小出監督がいなければ Q ちゃんの金メダルはなかったと思います。彼女は引退しましたけど、途中から小出監督から離れて指導者なしでやってたでしょ。一人でやっていたら限界があるんです。

3 回のオリンピック、無冠の帝王

私はオリンピックを 3 回目指しました。1 回目はモスクワオリンピック、当時 24 歳、負けなしで優勝候補と言われたのですがボイコット。オリンピックあるのに行っては駄目だと言われ、本当に無念が残りました。4 年後のロサンゼルスオリンピック。イカンガーに勝ったのはロサンゼルスオリンピックの予選。当時、世界記録の 4 位か 5 位で優勝候補と騒がれました。必死に練習していましたね。当時は、頑張ってるのに「頑張れ！」と言われるのって正直辛かった。どんどんプレッシャーになってきて、最後の 2 週間で疲れがたまり、血尿が出て、一週間練習休みなさいと医者に言われたときは、頭が真っ白になりました。実状を誰かに話さないと我慢できなくて、それで母に「もう駄目だ・・・。」と電話したんですが、「死ぬなよ！」なんて言われました。そんな状況でオリンピックに出て、結局は 14 位。

諦めずに、今度はソウルオリンピックに出ました。当時 32 歳。24 歳の時がピークだったので、もう優勝候補ではなく、結果は 9 位。ソウルオリンピックが終わって、2 歳の子供と妻から「お父さんは金メダルもらえなかったけど、我が家から黄メダル」と、紙で拵えたメダルを貰いました。こういうものを貰うと元気になります。私は黄メダル。金じゃないんです。(笑)

私は選手時代、地球を 3 周半ぶん走りました。1 周 4 万キロで 14 万キロ、もう私は限界でした。

指導者は理解させる努力を

指導する立場になると、選手の体調管理に苦労しました。私が早稲田のコーチをやった一年目に箱根駅伝で、ある選手が食あたりを起こしました。「試合前は生の刺身とかカキは、食べるなよ！」と頻繁に言っているんですよ。普段は何でもないですよ、刺身なんて。でも、試合の前になると極度に緊張するので、ちょっとでも古いと下痢して、吐いたりしてしまう。「食べるなよ、食べるなよ」とミーティングの度にいっていたのに、試合前日に学生が吐いていた。「お前、食べるなって言ったの聞いてなかったのか？」と尋ねると、「聞いてませんでした。」って。(苦笑)

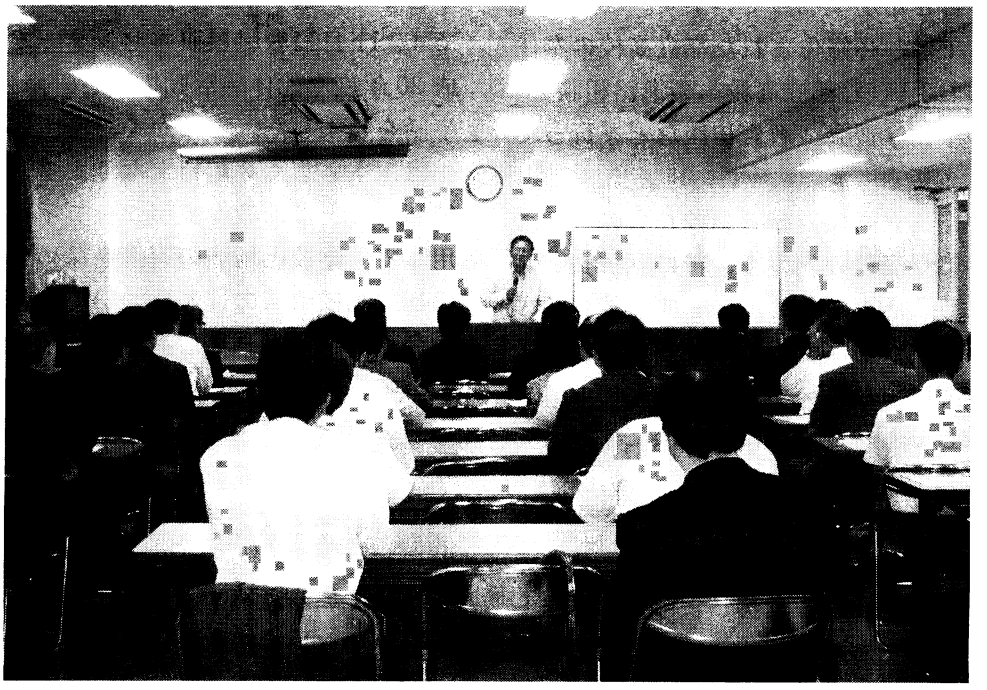
「もう熱が下がりましたから大丈夫です。」と彼は言うので「ゆっくり前半入って、後半だけスピードを上げるように」と指示を出して試合に送り出しました。それで、テレビを観ていたらアナウンサーが「早稲田の選手、5km 通過、区間新記録のペースです！」って。何にも聞いてない！(笑) 解熱した後って身体が軽く感じるので、勘違いをするんですね。結局、その子は脱水状態になって、トップで襷を受け取って区間 14 位。最終的に予選落ちです。一人が調子悪いとこうなる。ほとんどの選手は、365 日箱根駅伝だけを目指しているんですね。たった一人のために、一年間が無駄になってしまう。100 回言っても聞いてないなら、101 回でも言うくらいでないといけません。

2016 年東京オリンピックの実現に向けて

私はオリンピック委員会の仕事をしていますが、来年 10 月にオリンピック開催都市の選挙があります。東京に来てほしいですよね。シカゴ、マドリッド、リオデジャネイロ、東京。施設とか条件は、日本が全部優勢なんですけど、一つだけ負けているのが世論なんです。支持率が 65%しかなく、ほかの国は 80%くらい。

皆さん、東洋の魔女を見て感動したでしょう。円谷幸吉選手の走りを見て自分も頑張ろうと思ったでしょう。もう一回、2016 年に子どもたちに見せてあげて下さい。東京では子供の 90%が来てほしいといっている。子供たちのために世論を高めて行こうではありませんか。

ご静聴、ありがとうございました。



10(2) 講　　話

「先輩元副校長から現役の副校長へのアドバイス」

講師　　大河内　保雪　先生
（元都立松原高等学校副校長）

司会　「本日は、1 昨年退職されました大河内先生から現役の副校長へのアドバイスということで、お話を伺いたいと思います。日ごろお話できないようなことを聞けるようですので楽しみにしています。それでは、宜しくお願いします。」

○退職後の活動について

退職して2年になりますが、都立高校の副校長や教員が大変忙しい毎日を過ごしていますので、都立高校を支援する活動をしています。現役の副校長として忙しかったときに、先輩の副校長、保護者や地域の方々が助けてくれました。そこで、都立高校にサポーターがいれば、副校長は随分と助かるのではないかと考えました。

そこで、世田谷ボランティア協会に「スクールリンクサポーター」の会を作り、毎週金曜日の夕方から、イブニングプログラムとして地域の皆さんと都立高校への支援について話し合っています。最近、都立高校退職者副校長会の「しえん会」の皆さんが参加しています。これまでの活動としては、必修化された都立高校の奉仕体験活動のお手伝い、都立高校への進路相談会、先生方との奉仕学習会、教育相談などを行っています。

ところで、都立高校退職者副校長会の「しえん会」が、都立高校の先生達、特に副校長さんを支援しようと活動を始めています。皆さんの先輩の方々ですから、活用してください。最近の都立高校では、いろいろことが進んでおりますので、少しでも皆さんの仕事を楽にするということで考えて下さい。

○都立高校の奉仕体験活動への支援

昨年からやっているのはもう一つあって、奉仕体験活動で都立高校を支援しようと考えました。副校長さんたちが、奉仕体験活動必修化に

大変苦労しているとも聞いています。ご存知のことでしょうが、教育庁地域教育支援部では、教育支援コーディネーターの活用を行っています。そこで、この教育支援コーディネーターの人たちと、「都立高校の奉仕はどうあるべきか」をテーマとした勉強会をやっております。ここでは、会報も出しておりますので、ご覧ください。

都立高校の奉仕体験活動は、2 年目が終わろうとしていますが、学校によっては大変なようです。11 月に教職員研修センターで行われた平成 20 年度奉仕体験活動推進者研修会で、1 時間半話をしました。とにかく、奉仕体験活動必修化は、まもなく 3 年目となります。一度考えて欲しいことは、教育支援コーディネーターを活用して、学校と地域の連携を深めてください。

○都立高校改革の連載について

今、雑誌「月刊高校教育」に都立高校改革について、2008 年 4 月号から連載しております。いろいろなテーマで書いていますので、皆さんには、これを是非読んでほしいと思います。

この連載を今一番喜んでいるのは、教育庁の若い職員です。教育庁の職員からは、「教育庁に勤務している私達でも、都立高校改革と言っても分からないのです」と言われます。何故かと

いうと教育庁の職員は、2・3 年で異動します。教育庁内の色々な部署で働くからです。そこで、「私達、高校改革なんて分かりません。新宿事件って何でしょうか」ということになります。私たちには、常識ですが、教育庁以外の職員には、都立高校改革は全く分からないということです。

実はこれは、24 回連載を予定しています。学校現場の副校長から見た都立高校改革ということになります。したがって、都立高校改革をさまざまな視点から検討することになります。これは、自分の体験に基づいて、資料に忠実に書こうと心がけています。だから、書いてあることは、全部が本当のことです。

しかし、ご存知の通り、現在は教育庁の都立学校教育部というところにいますから、原稿が書けないことがあります。なぜかと言うと、だんだん教育庁の様子が分かってくると、踏み込めないところが出てきます。昔の私だったら言っていたかもしれないことが、立場上言えないこともあります。だから世の中って知らない方がかえっていいかと思います。

私は 1969 年に都立高校に教員として採用され、今年で 40 年経ったんですけど、その時代から都立高校がどう変わったのかという視点でもう一つ別の論文を書いています。例えば 1970 年代、1980 年代の都立高校はどうだったのかということを検証して、都立高校の将来を考えたいのです。

○学校は横型社会である

それで教育庁にいて非常によく分かったのは、教育庁の論理と教育現場の論理は違うということです。これは、指導主事を経験された副校長の先生達がよく分かると思います。教育庁はやっぱり縦社会ということです。したがって、教育庁で考えると必然的に主任、主幹、副校長、校長となるのです。それが教育庁であり、そういうのが行政なのです。

それで、「学校は何か」というと、学校は縦社会じゃなくて横社会です。つまり、横のコミュニケーションがないと学校は成り立ちません。だから、縦型社会の論理だけが学校に持ち込まれたら、必ず学校現場の教育は崩壊すると確信しています。だから学校現場が壊れないように、誰かがどこかで止めなくてはいけないのですが、縦型の組織が出来てしまうと、みんな自然にそういう縦型組織に位置付いてしまうから、やっぱりダメなのかなと思います。しかし、やっぱり頑張って欲しいのは副校長さん達なのです。副校長さんには、自分の学校は横の組織、横の連携をとるような形で先生達の力を結集させてほしいと思います。

○副校長間のコミュニケーションを

この副校長会が中心となって、もう一度副校長先生達が仲良く、コミュニケーションを深め、副校長さん達の横の連携をもう一度とってもらいたいと思います。副校長さんに聞きますと、校長になるために足の引っ張り合いをして、誰かが上になって、誰かが下にならくちゃいけないわけですから、そういう宿命に副校長はあるかもしれませんが、ともかくみんなでもう一度仲良くしていただいて、横のコミュニケーションをとっていただいて、それで自分の学校の課題だけでなくて、都立高校全体の課題として都立高校をどうするかということを副校長さんが考えてほしいと思います。副校長は、そういうことができる立場にあるし、副校長が、やろうと思えばいろんなことが変わります。

○副校長の都教委への依存体質

次に、昔は、「都教委にものを聞くとか、都教委に何か質問をするとか」が、なんか恥でね、副校長の間でも「そんなこと自分たちでやればいいじゃないか」というようなことがありました。先輩の教頭さん達から聞きましたが、出来るだけ都教委の手は借りないで学校経営を考えていましたよ。ところが、最近は、何でも副校長から都教委に電話がかかってきます。なんでこんなこと知らないのかってことですね。このようなことが、教育庁内のいろいろな所で聞かれます。隣の学校の副校長に何で聞かないのかって思うわけです。

奉仕体験必修化の説明会の時もそうでしたが、「指導部にこれどうですか」と聞いたら、「聞いたらそれは出来ないと言いますよ」ということです。だって指導部は、実施要項や規則にあること以外はいけないって言うわけですから。だけど学校は違うのですよね。そこで、「最後の責任は俺がとる」と校長が腹をくくるように仕立てないといけないのです。そうしないと学校ってよくなりません。ただ日本橋高校のようにな

るのは、ちょっとひどすぎますね。点数を0にするとかはちょっとやりすぎだけど、そういうのでなくて、校長さんには裁量権があるわけだから、もうちょっとそういうところをきちんとやるとかできますよね。日本橋高校のような問題のある生徒を入学させて、校長が中心となってあの子たちきちんと指導して、こういう生徒を作り出したと世に訴えれば、もっと逆のいい学校になったかなと思いますね。

やはり、学校を変えるのは、副校長ですよ。副校長がやる気をだせば、都立高校は、どんどん変わります。ただ、OK言うのは校長ですからね。都教委もそれはハッキリ認めいているわけです。都教委は、都立高校の学校経営を校長に全部任せればいいのですよ。「全部校長に任せました」と法律には書いてあるわけですが、実態は違っているのですね。そこで、校長が「じゃあ全部任せろ」と言えばいいのですが、責任を取りたくないものだから、何でも都教委にお伺いを立てるのですね。都教委は、「これいいですか、悪いですか」って聞かれたら、規則以外のことは、悪いって言うものだから校長は、「じゃあ何もできない」ということになるのですね。これは、自分で自分の首を絞めていませんか。

○校長を動かす副校長として

ところで、副校長が校長さんを動かさないといけないと思います。校長によってもいろいろあると思います。それから自分の年齢とか、定年前の校長とかいろいろあると思いますが、ハッキリ言えることは、校長と副校長が同じ目線で同じことを考えていては、学校がよくなりません。これはどういうことかというと、校長はやっぱり保守的なのです。校長は、みんな保守的になる傾向があります。このような校長を越えて都立高校を改革できるのは、副校長じゃないと出来ないですよ。やっぱりそこを乗越えていかないと、都教委のトップはそういうところを副校長に見ているのだと思います。校長さんの言うことをハイハイってやっていたら日本橋高校の副校長さんみたいになってしまうのです。校長から改ざんを指示された時に、なぜあそこで副校長は、「こんなの冗談じゃない、おかしいでしょ」と普通は言うと思いますが、それが出来ないというのは、なぜか私にはわかりません。だけどそういうふうに、いわゆる校長さんの学校経営レベルから越えないといい校長になれないと思うし、そういう副校長ばっかりだったら都立高校に未来がありません。自校の校長は自分のライバルだと思って、校長をどうやって乗越えるか、校長よりどうやったらいいアイディアが出るかということを副校長の皆さんには考えてほしいと思っております。これはおそらくみなさんには出来ると思います。

○学校の情報管理を引き受けよう

もう一つ、皆さんにお願いしたいのは、副校長は忙しいけど学校の情報管理は、副校長が全部やるべきだと思います。全ての点についてです。今は情報化時代ですから、ともかく学校がどちらに行くとか、学校がどうするという情報は、副校長が全部握っていなければなりません。そのためにどうするかを考えてください。

学校にいろいろな仕事が来ますが、まずこの仕事をどうするかです。今見ている副校長で多いのは、学校の仕事を全部主幹に丸投げてしていることです。そりゃあ副校長は、楽になりますよ。副校長は、主幹が仕事をやってくれるから楽に成ったとも言えます。ところが、その仕事が都庁に報告されるといっぱい間違っているのです。例えば、私は、今補欠募集の仕事をやっているのですが、何でこんなことを間違うのかという報告がきます。副校長や校長が、都への提出書類を見てないということです。副校長が、きちんと情報管理をしていない、校長も提出書類を点検しないといように情報管理をしていない学校が多いのではないでしょうか。そういうことじゃどうしようもないと思います。少なくとも都庁に出す書類は、副校長と校長を通して出すというのが当り前のことなのですが、校長も点検しない人がいっぱいいますから、副校長は少なくとも点検して、これはどんなに時間をとっても、それが副校長のやることだからきちんとやって教育庁から笑われないようにしてください。

○学校の仕事を減らそう

だから仕事というのは、下に振らないと仕事が楽にならないかというとそうじゃなくて、例えば都教委や校長からいろんな仕事が来た時に、副校長の所でやれる仕事を自分がこなしてしまえば、主幹の仕事が少なくなるのです。主幹の仕事が少なくなれば主任の仕事も少なくなるし、

担任も仕事が少なくなりますよね。都庁から来る調査で簡単なものは、副校長がやればいいんですよ。自分でパパッとやって、出しておけば先生達がみんな暇になるわけですよ。それで何が言いたいかというと、今、先生達をこれ以上忙しくしたら学校はダメになりますよ。やっぱり副校長も忙しいけど先生達をパニックにしないでほしいのです。先生達にもっと時間を与えて、もっと研修したり授業を充実させることを考えないといけないと思います。主幹に仕事を振れと言っても、主幹は今やアップアップしているし、副校長が自分の学校は主幹が4名で企画調整会議を毎週やっていて、いい学校だって言っている学校は、大抵ダメになっています。そのような学校の副校長が遊んでいたり、主幹が機能していないということがあります。そういう学校にならないようにお願いしたいと思います。

○仕事は中味で考えよう

副校長は、多くの仕事を抱えていますが、自分だけで考えなければいけない仕事と大勢でやればすぐに終わる仕事があるでしょう。例えば、具体的に言うと問題がありますが、判子を押すだけの仕事もありますよね。そこで、誰でもよくて全員で出来る仕事は、出来るだけやらないようにしましょう。そのような仕事は、全部溜めといて、ある場合は先生にやってもらったり、ある場合は保護者の人にやってもらったり、ある場合は生徒にやらせたり、地域の人を使ったこともあります。学校では、教員、保護者、生徒を使えば、人手がいるような仕事、自分一人でやったら大変な仕事は、簡単に片付きます。

ただし、ものを考えたり、さっきの報告書じゃないけど、誰にも頼めないのは自分でやらなければなりません。だから、何でもやるというのではなくて、何が自分でやらなきゃいけない仕事なのかというのを分けた方がいいと思いますね。

そうすれば仕事は一気にパッと終わりますから、先生達も副校長の仕事ぶりに驚くことになります。

○地域と連携した開かれた都立高校づくり

それから、学校で味方に付けないといけないのは先生方ですよ。副校長が先生と対立したらダメです。校長はともかくとして副校長はそうしないと仕事が出来ません。仕事をやるのは先生ですから。先生がどうやって気持ちよく仕事が出来るか、そのために先生達に自由を与え、それはどこかで工夫して上手くやることです。例えば、都教委から調査をいっぱい出せって来るでしょう。そんなのは先生達と協力してやればなんてことないのです。

これは最近の副校長会のアンケートにありましたが、これは皆さんがやった副校長研究会報告書の中にでているんですよ。都立高校で奉仕体験活動が進みました。「教育支援コーディネーターを採用したいと思いますか」という質問で、「採用しない」の回答があって、「それは何故ですか」と聞いたら、「教育支援コーディネーターは知っているけど自分の学校はもう奉仕がきまっている。パターンが決まったのでこれ以上よその人を入れてグチャグチャするのは面倒だからもうやりたくない」という報告が出ています。

そうではなくて、これからの都立高校の方向は、地域連携ですよ。地域の教育力をどうやって学校に生かしていくか、今度の新しい教育ビジョンできちんと教育委員会が述べています。それはどうやってやるかというのは課題ですが、地域とどうやって連携していくかということは是非考えて下さい。そうしないと都立高校は良くなりません。今までの様に、学校は学校、先生は先生だけで子どもを育てる時代はもう終わりました。だから、話を最初に戻すと、やっぱり自分の学校を支援してくれる人と出来るだけ連携を取ってください。

○地域の教育力について

それともう一つ言っておきますけど、奉仕体験活動の支援をやって最近気が付いたのですが、奉仕をやって何が地域で変わってきたかというと、地域の立場で見ると、「都立高校の先生達大変だな、年間35時間も授業をやって年間計画を立てて、とても地域の人にはそういうこと出来ないよね」というのが地域の見方だったようです。「先生達凄いことやってるね」ということです。授業が1単位だったら年間35時間です。ところが奉仕が始まって地域の教育支援コーディネーターが学校に来ました。そしたらその地域の教育支援コーディネーターは、年間35時間の奉仕のプログラムを立てるのです。そういう力を教育支援コーディネーターは、持っているわ

けです。そうするといろいろな点に応用できます。学校でいろいろな新しい選択科目を設定し、市民講師を使っているところはそういうこともやっているでしょうけど、地域の力をどうやって生かしていくか、これは先生達の仕事を楽にすると同時に学校の力をもう一回盛り返してくることになると思います。だから、地域の力が非常に大事だと思います。だからこれから先生達はそういう点で地域の方との連携を考えてください。地域とどうやって連携したかというのは、私が書いている奉仕の論文を少し読んでもらえれば、どうして松原高校がああいうふうになったのかというのをいっぱい出していますからよく分かってもらえると思います。

○都教委が何を考えているか

それからもう一つ皆さんに是非お願いしたいのは、副校長ですから、「東京都教育委員会が今何を考えているか」ということについて、常に考えていて下さい。「これからの東京の教育はどうなるか」ということを考えてほしいと思います。

それともう一つ、不登校とか登校拒否、それから日本橋高校で問題になりましたけど生活指導の問題です。こういう生徒の問題をどうするかというのは、国を挙げての課題であり、過去にも問題となりましたが、もう一回大きな問題になってくると思います。今多発している校内暴力についても言われております。こういう問題に対しても都立高校でどうやって取り組んでいるかということを自分たちの学校の実践を集めれば、どう対応しているかはっきり出るわけですよね、あまり力をいれて何か何かと探さなくても、学校が取組む課題は、いっぱいありますので、そういうところに目を向けて整理していってください。

○副校長の課題意識を高めよう

そして、ここに全国大会の発表がありますけど、副校長の研究課題については、しっかりと考えてほしいと思います。これまでは、テーマとして奉仕体験活動をずいぶんやってきて、これは全国的にも評価されています。したがって、やっぱり副校長会は、面白そうなテーマを選んでください。例えば、先ほど話した不登校の問題や生活指導の問題をテーマとして取り上げて、どうやって学校を作り変えたとか、学校を変えた実践報告はどうでしょうか。

お願いしたいのは、副校長の研究報告ですから、都教委が考えるようなテーマではなく、学校現場の課題解決に向けたテーマを考えてほしいですね。最近の研究テーマが、何となく役に立たない当たり障りのないものになっているように思います。したがって、副校長の皆さんが苦労して取組んでいることとか教育の原点となるような課題を設定してください。あんまり形とかだけこだわらないで自分たちのやっていることをどうやって成果として出していくかというのを考えてやっていただければいいかなというふうに思っております。

○優秀な教育庁職員たち

それから教育庁に勤務して分かったのは、教育庁の事務系の人はすごく優秀だということです。外から見ていた時と違って、教育庁職員の仕事ぶりをそばで見ているとよく分かります。

今は入学選抜係にいますが、3 名の事務系の職員、副参事 1 名、指導主事 11 名、嘱託員 5 名で仕事をしています。ご存知だと思いますが、入学選抜には 200 頁以上からなる「入学者選抜実施要綱・同細目」があります。事務系の人たちは、2 から 3 年で別のセクションから異動してきますが、2 から 3 ヶ月で細かな質問に的確に対応しています。

実は、情けない話ですが、私は、都立高校に長年籍をおいていても、入学者選抜の細かいことはまったく分かりませんでした。例えば、他県から受検の場合の応募資格審査、海外帰国者の受検方法、在京外国人の受検、引揚生徒対象の受検などです。これらの受検資格や都立高校からの細かい質問に、新しく異動してきた職員が、2 から 3 ヶ月でテキパキと対応しているのです。

そこで、何故若い人が、行政のなかで仕事ができるかということを考えました。行政と学校と何が違うかと考えました。その結論として、行政は法律が中心なのですね。規則や法律に書いてあることをきちんとやれば、いいのです。したがって、行政は、それから外れたことはだめなのです。これは当り前ですけどね。学校って違うでしょ。学校は、法律から離れても生徒のことだったらやらないといけないことがありますよね。だから行政の人達は、それぞれの部

署で、決まっていることを勉強できてくれば、それを全部一冊覚えればだいたい仕事ができることになります。したがって、他の部署から入学選抜係に異動しても、特別支援教育係に異動しても、どこの部署に異動しても何でも出来るわけですよ。それが行政なのです。

○指導主事や支援主事との連携を

副校長が仕事をやろうと思ったら、特に指導部の指導主事や学校経営支援センターの支援主事と仲良くした方がいいですよ。

いろいろな情報を貰ったりしながら、先導的な仕事ができますからね。学校現場で仕事が出来たのは指導部指導主事の支援があったからかです。それはもう大変感謝しています。「全都立高校で生徒による授業評価を導入することになりそうだ」とか「今度、奉仕体験活動が必修化になりそうだ」ということは、学校現場ではわかりませんよね。都教委の政策は、だいたい 3 年位前に決まっているものなのですよ。

だから、「生徒による授業評価」も他の学校が取組んでいない時に、スタートしたのですよ。「奉仕体験活動」も実践研究校に早くから手を挙げました。そしたら、都教委で検討委員会が組織されて、具体的な案が示されてきたわけです。

このように都教委の政策を先取りしておくと教員たちも、自分たちの学校でやっていることを都教委が全都立高校に広めようとしているということで、反対する教員も少なくなりますね。都教委が強制してくるとなんでも反対するのが教員ですから、それは楽でしたよ。そして、教員には、「都教委の案よりも、本校の実践が進んでいる」といい続けました。

○優秀な指導主事は学校現場に

そういう点で付け加えれば、教育庁の指導主事は、優秀な指導主事が集ってきています。それで、もったいないなと思いますが、あの指導主事は、2，3 年したらやっぱり学校に返さないといけないと思います。長年、指導主事で頑張ってくれている人もいますが、やっぱり行政職に魅力を感じる人もいるでしょうが、行政の論理に染まらないようにして、指導主事は 2，3 年やったらぱっと学校に帰ってほしいですね。研修センターの指導主事も素晴らしい人がたくさんいます。だからあの人達を先生として現場に受け入れて、現場の先生と入替えて、勉強させて戻してくるというシステムを作ればもっと都立高校はよくなると思います。各都立高校に教育庁にいる指導主事を 1 名ずつ配置すれば、もっといい都立高校になると思います。指導主事から副校長になった人も多いと思いますから、みなさんも頑張ってほしいと思います。

ただ最近の指導主事には気になることがあります。それは、指導主事の中に、「学校が嫌い」「生徒が嫌いで生徒指導が苦手」「教員同士で仲良くできない」といった人が指導主事になっているということもあるようです。数年前のことですが、指導主事を受験するという教員は、学校では仲間の教員から協調性がないと言われ、職員会議ではいつも混乱を起こす発言をする教員でした。このような指導主事が管理職となって学校現場に帰ってきては大変なことになります。学校現場で必要なのは、生徒が好きで、教育に情熱をもった教員でしょう。校長や副校長が変だと言われるのは、この辺に原因があるかもしれませんね。

○なぜ、副校長の連携がなくなったのか

それからもう一つ、副校長達がどうして連携が無くなったかというと、これはハッキリしていますよ。何故かと言えば、都立高校は多様な学校を沢山作りました。普通科、専門学校、総合学科、進学指導重点校、エンカレッジ、チャレンジと、これだけ違う都立高校の副校長が一緒に集って何かを話し合おうとしても無理でしょう。一晩くらい酒飲んでしゃべろうよと言えば、何か共通点が出てくるかもしれませんが、大学進学のために、国公立に行くためにどうやって補習やろうかなと考えている副校長がいて、こっちはエンカレッジでどうやったら特別支援学校と連携できるかなと考えているとしましょう。これは、全然レベルが違う話しとなります。これだけ多様化してきたら、なかなか連携して同じテーマでしゃべるというのは無理なのですよ。これは、みなさんが悪いわけでなくて、やっぱりいろんな課題が違うから仕方がないのかもしれません。ただ、個々の学校としての課題が違ったとしても、都立高校としての共通の課題は色々あるでしょう。是非そういうものを探して皆さんで話題にするとか研究課題としてください。

○学校の情報整理学

それから皆さんの学校の情報整理の方法を身につけてほしいと思います。都教委からの情報は、一番多いのが指導部でしょうか。最近では、学校経営支援センターかもしれません。学校に流れてくる情報量で言えば、指導部、学務部（現在は都立学校教育部）、人事部、生涯学習部（現在の地域支援部）、総務部の順でした。これらは、部ごとに分けて整理することが最初の分類でしょうか。

最初から情報を細かく整理しようと思わない方がいいと思います。大きいファイルに時間系列で整理することを奨めます。それから毎年来る調査は、2年くらいやってまた来るなと思ったら、そのテーマでまとめれば、資料がだんだんたまってきます。大体前年と同じ調査ですからすぐに対応できますね。

それから自分が出来ない調査、自分が絶対やらなくてはいけない調査、それから報告書がありますね。たとえば、奉仕体験活動実践研究校を受けたとしましょうか。何か東京都から委託事業を受けたとしましょう。この場合には、都教委に対しての報告書は決まっています。先ず学校は、計画書を出します。それから中間報告書を出して、最後に最終報告書を出します。都教委の報告書は、だいたいA4で2枚程度にまとめることになります。

そこで、途中で経過の発表会などがありますが、計画書を出した時に報告書を作り始めるといいのですよ。例えば、奉仕体験実践研究校でやったことは、生徒の活動などを全部報告書としてまとめておくことです。だから都教委から報告書を出しなさいと言われた時には、もうできているのですよ。全部一緒に仕事をやっていくことです。資料があれば、あとは、見栄え良く報告書を作ればいいわけです。

○新規事業への取組について

ところで、皆さんは、学校で新しい事業をやるのは大変じゃないかと考えますよね。都教委の仕事は、みなさん報告書などが大変なので引き受ける学校が少ないということもあります。それから、教員が反対したり、協力しないということがありますね。

最初は、教員たちの仕事を増やさないことを考えましょう。そこで、「最初スタートする時は、細かい仕事は、全部俺がやるよ」と言って仕事を引き受けます。そうじゃないと先生達は、みんな嫌がるからです。それから、余計な会議を増やさないことも心がけました。

例えば、奉仕体験活動についての校内検討委員会は、総合的な学習の時間検討委員会をリニューアルして作りました。総合的学習の時間の検討会は、もういらないからそこで奉仕体験活動について検討してくれないかと頼んで委員会ができたのです。そこで、委員会に仕事を持っていって、「この仕事は、私がやります」と言って始まりました。そして、次の会議に、「この仕事は、誰がやりますか」と言ったら、先生たちの中で「これは私がやります」と言ってくれました。すると、先生たちが、一人に任せるのは悪いということで、皆さんで取組んでくれるようになりました。そこで、今度は、だんだん先生方に仕事を振ってゆきました。

だから新しいものが来て新しいものを増やしていけば、学校は、仕事が増えて大変になります。そこで、新しいものが来たら従来の組織をリニューアルして、次の組織に変えていけばいいわけです。

それから、これもとっておきの話になりますが、学校で取組む新規事業は、教育活動に関わることですから、何か新しい仕事をするというのではなく、学校で行われている教育活動を充実すれば、いいことになります。

例えば、学校で授業を充実させようと言うことで授業公開を打ち出したとします。すると、授業公開だけでなくて研修になります。地域から授業参観者を増やせば、地域連携や中学生への募集対策にもなりますよね。また、それを初任者研修と結びつけて、中学校の先生を呼んできてやれば中高連携にもなり、地域連携にもなるし、大学の先生を呼んできてやれば高大連携にもなります。都教委に報告の時は、さまざまな立場から成果を報告すればいいことになります。

だからとにかく学校現場の先生方を忙しくしてはダメですよ。それでなくても先生方は忙しいんだから、忙しくしないでどうやって学校を活性化して行くかということを考えませんか。

○保護者からのクレームに対して

それから、最近話題となっている保護者から

のクレームへの対応がありますよね。いろいろなクレームが副校長さんに来ますよね。クレーム対策で最初に言えることは、クレームから逃げちゃダメです。ともかく、逃げないで副校長が、受け止めることが大切です。

それから、保護者を味方にすることです。PTAの役員が、「副校長の言っていることが正しいですよ」と一言いってくれれば、たいていの保護者は納得してくれます。私の経験では、徹底的に学校を困らそうというような保護者は少ないと思います。

だからこそ、副校長と保護者との信頼関係が大切となります。また、もう少し話をすると、学校でいろんな仕事をやろうと思うと、保護者の協力が欠かせません。それは、信頼関係の問題だと思います。それは、生徒も同じです。だから、PTA活動ですごく助かったのは、「副校長が言うのなら仕方がないよね」といって仕事をしてくれました。そうすればいろんな仕事があったりした時に、いろいろ人手が必要な時に、保護者が助けてくれます。

司会　「それでは、質問をお願いします。」

Ａ副校長　「大河内先生、日本橋高校の問題で都教委の発表があって、判定会議前までは資料は新しかった。それで判定会議で校長、副校長が書換えた。でも資料を作成した教員は違うって分かると思うのですよ。都のプレス発表は100％ホントにそうなのって思ってます。応えられないと思いますけど。勝手に言わせてもらうならある部分、ある程度組織ぐるみではないですか。」

大河内　「どうですかね。多分そういうのが問題になってくるでしょうね。ありえないですよね。だって副校長として入選のときタイプを一度も叩いたこと無いからね。全部教務主任が中心になって資料を作り、会議に持ってきてもらって検討するだけで、間違ったら直してもう一度会議をやりますよね。それしかないですもんね。しかし、日本橋高校では、副校長がタイプを叩いたということのようですね。」

Ｂ副校長　「どこに属するか分からない問題があって、実は学習室をつくるのです。ところがその管理をどうするかというと。まとまらなくて、じゃあしょうがないので管理職がとういうことで結論づけたのですけど。そういうことで忙しくなることが、やたらあります。」

大河内　「誰も引き受けないからね。そうですよね。それを最初引き受けるのはやっぱり副校長だと思うのですよ。それをどうやるかですよね。まず、ボランティアでやってくれる人いないかと探せばいいじゃないですか。そしたら地域の人がいるかもしれないし、先生の中で誰かやる人がいるかもしれないですね。確かに、そんなことばかり副校長がやっていたらそれは大変ですよ。それは分かります。」

Ｃ副校長　「昨日今日もこの12月1、2、3日間今日も含めて1日のうち5時間くらい校長室にいてサッカー部の元コーチの苦情の問題だとか、それから初任者の電話応対が悪いからなんとかしろとか、センターの総務課で話題になっているのですよ。あと異動の検討結果を伝えろとか。そういうところに一番時間を使われますよね。自分の仕事じゃないとこに。」

大河内　「なるほど、それで先生達に一つ、これ出来るかどうかわからないけど、校長と同じ仕事を副校長がしてはいけないと思います。僕は校長にも仕事をお願いしましたよ。人事関係と異動関係は、校長さんがやるべきことですよ。私は、一切やっていません。仕事は、そういうふうに分けた方がいいですよ。校長によっては、そうはいかないかもしれないですけど、校長がやるべき仕事と副校長がやらなきゃいけない仕事は、やっぱり分けた方が、いいと思いますよ。それは校長さんによっても難しいかもしれませんが。」

Ａ副校長　「先生の仕えた校長先生の中で、ダメな校長先生っていましたか」

大河内　「それはいましたよ。まったくダメな校長でしたね。校長としてやりたいことはないし、退職まで2年を切った時に、手帳を見せられて「教頭さん、退職まであと500日を切りました」と言われた時には愕然としましたよ。今だから言えますが、当時は誰にも話せませんでしたよ。こんな校長の下で、教員に都立高校改革と言っても意味がないですからね。職員団体

とは妥協するし、これまで教員と闘ってきたことも全部ダメにされましたよ。また、最近のことですが新任の校長から「退職後は、どこで使ってくれますかね」と言われましたよ。これでは、都立高校は良くなりませんよね。

ただ逆に、私は、いい校長と出会いましたよ。その校長は、定年まで2年ありましたが、校長から「教頭先生は若いし、いろいろやりたいでしょうから、教頭先生の思い通りに学校経営をやってください」といわれました。そこで、「都立高校合同学校説明会」「生徒による授業評価」「都立高校と地域の連携」などをやってきました。

私が全部やったというのではなく、毎日1時間以上校長と話し合いましたよ。時間があったら校長と意見交換して共通理解を深めました。だから、今考えてみれば、校長が私をうまく使ったということでしょうか。

それから、別の校長さんの場合は、都教委幹部の学校訪問や保護者会、学校運営連絡協議会などで、機会あるごとに「本校はここ数年いい学校になってきています。奉仕体験活動、授業公開、地域連携などで、都教委からも評価されています。これらの実績は、本校の副校長さんが頑張ってくれているからです」と言われました。褒められて悪い気はしませんから、この校長のためにも頑張ろうという気になりました。

D副校長　「予想を聞かせてもらいたいのですが、主任教諭ができました。その次に待っているのは何でしょうか。例えば職員会議は主任教諭以上とか、係長会議とか、どうなんでしょう。」

大河内　「なるでしょうね。たぶんそうなるのではないですか。主任以上とか、それで学校がうまくいけばいいですけどね。例えば、主任以上じゃないと担任持たせないとかそうなるかわかりませんけど、それでいいのでしょうか。「学校はそうじゃないよ」ということをもう一度考えてほしいですね。」

D副校長　「今度1600字から2000字の論文と校長先生がABCで推薦でしょう。結局あれで決まっちゃうんじゃないですか。」

大河内　「たぶんそうでしょうね。だって主任としての資質がどうとか考えておれないでしょう。とにかく、制度として主任を入れることが中心だから、とにかく人数が集ればいいんですよ。主幹もちょっとそういうところあるけどね。だから同じような形で進んでいくでしょうね。それで学校経営がうまくいくんですかね。よく分からないですけど。」

E副校長　「先生は、教員の異動についてはいろいろと裏話ご存知ですよね。」

大河内　「そうですね。異動についてですか。これは微妙ですね。異動の時期が近づいていますから具体的なことはここでは言えませんね。ただ、これは皆さんもご存知だと思うけど、校長の中にも都教委に顔のきく人ときかない人がいるわけですよ。人事異動も裏から見るとね。ある学校は、校長が教員を集めているということもありましたよ。それはいろいろありますよ。」

E副校長　「11年目で異動が止ったと、それはある団体の関係者ですか。」

大河内　「そういう関係者もいるでしょね。それはもう学校で悔しい思いをしたことがありますよ。一番ひどいのは、校長に異動の事務連絡があってから教員が入れ替わるでしょう。これは、教科の関係でよく知っているんですけど、教科のボスの校長がいて、教員を差し替えてくるのですよ。自分の学校に来ることになっていた先生が、その校長の学校に異動になっていますからね。そのような例は、実際にたくさんありますよ。だから、都教委は、1月の事務連絡では異動先を教員にはっきりと言わないようにと校長を指導しているわけです。だから、そりゃあ、あまりきれいな世界じゃないと思いますね。やっぱり、生徒も保護者の方も副校長さんに期待をしているのではないですか。何かありましたら、相談に来てください。」

A副校長　「先生は、退職後も新しい仕事をしていますがその元気はどこから来るのですか。」

大河内　「私は、生徒や学校が好きなのですね。現職であった38年間は、「24時間教員である」と生徒や保護者に公言して学校に勤務していましたよ。困ったらいつでも相談に来なさいといってね。その点では、家族に一番迷惑をかけた

のかもしれませんがね。今は、退職しましたから一人の民間人として、学校や教育、特に都立高校の将来が心配なのです。そこで、いろいろとやっているわけです。」

B副校長　「先生は、今後どのようなことをやろうとしているのですか。」
大河内　「今は、都庁の入試相談の窓口で仕事をしていますから、皆さんからの質問や相談に分かりやすく説明しようと心がけています。都立高校の入試は複雑ですから、一般の人には分かりづらいと思いますよ。それから、個人的には色々ありますが、副校長の皆さんの支援をしたいということです。まあ、民間の学校経営支援センターでも創りますか。(笑)」

B副校長　「副校長のための相談窓口はどうですか。」
大河内　「それはいいですね。声をかけてくれればいつでも相談には乗りますよ。ただ、現職の副校長さんたちから相談があればですがね。相談できない副校長の方が問題ではないですか。退職者副校長の皆さんは、都立高校を良くするために支援を惜しまないと思います。」

司会　「大河内先生、本日は、お忙しいところお時間を割いていただきありがとうございました。先生のお話で、副校長さんも元気が出てきたと思います。今後とも宜しくお願いいたします。」

(文責　事務局)

12. 会　員　異　動

定年退職者（5名）　　平成20年3月31日発令

校　名	氏　名	19年副校長会等役職名・備考
千歳丘	竹内　章	
清瀬	田中　透	
江戸川	木村清治	
国際	三戸雄造	
赤坂	吉田定良	全国教頭会・会計

校長栄進者（23名）　　平成20年4月1日発令

現任校	氏　名	前任校	19年副校長会役職名・備考
田園調布	中野英雄	白鴎	
美原	五石秀治	小石川工	
芦花	柳久美子	青山	
芸術	長津美明	石神井	
荻窪(新)荻窪(兼)	古山光久	足立	
井草	赤羽克巳	小金井北	
第四商業	渡邉淳子	荒川商業	
練馬工業	竹内秀一	駒場	
大山	久永哲雄	豊島	
飛鳥	竹浪隆良	小岩	
上野	佐野誠	晴海総合	
足立西	酒井定克	三田	
葛飾野	赤石定治	墨田川	
葛西南	竹村精治	小松川	都副校長会東部D常任幹事
南平	大塚一雄	八王子北	
町田地区総合	松井薫	若葉総合	
小川	高橋聖一	田園調布	
武蔵村山	清水孝二	秋留台	
秋留台	磯村元信	小平西	
小金井工業	村田和雄	橘	
田無工業	永村隆	永山	
三宅	佐藤栄一	桜町	
江東商業	高田憲一	芝商業	都副校長会・会計

校長長期研修生（1名）　　平成20年4月1日発令

現任校	氏名	転出先・職	19年度副校長会役職名・備考
武蔵	岸田裕二	校長長期研修生	西部C常任幹事

中学校長（4名）

現任校	氏名	転出先・職	19年度副校長会役職名・備考
芦花	小川達夫	板・板橋五中	中部A常任幹事
小石川中等	柴田伊知郎	練・八坂中	
城東	川原博義	江・大島西中	
大島海洋国際	大塚健一	大島町立第二中	

全日制間の異動（21名）　　平成20年4月1日発令

現任校	氏名	前任校	19年度副校長会等役職名・備考
雪谷	都築功	玉川	全国常任理事・研究委員長
田園調布	浅見弘	六郷工科	研究幹事（研究委員長）
青山	有馬利一	松ケ谷	常任研究幹事（研究部長）
深沢	平林博	小金井工業	
芦花	東保明	雪谷	
園芸	後藤哲	農芸	都副校長会・中部D幹事補佐
第四商業	島村栄一	上野忍岡	
豊島	遠藤文雄	日比谷	
赤羽商業	中神孝典	江東商業	
日本橋	福田洋三	深沢	
白鴎	小澤時男	富士森	
青井	三宅英次郎	本所	
荒川商業	高橋進	赤羽商業	
荒川工業	栗田博康	葛西工業	
江戸川	長田真一	新島	
篠崎	美野輪武	杉並	都副校長会・中部A常任幹事代理
松が谷	山下肇	田柄	都副校長会・中部D常任幹事
多摩	輿水美智子	葛西南	
武蔵	錦織政晴	府中	全国高等学校教頭会・会長
小平西	川島直司	園芸	
清瀬	伊藤龍司	野津田	都副校長会・西部A研究幹事

定時制から全日制への転任（24名）

現任校	氏名	前任校	19年度副校長会役職・備考
日比谷	石井茂光	八潮定	
三田	角順二	大森定	
赤坂	矢島賢二	三田定	
六郷工科	坂上眞佐之	大島定	
目黒	橋本昇	福生定	
桜町	計良智子	一橋定	
千歳丘	青木修	戸山定	
西	五十嵐善一郎	砂川定	
石神井	宮地みち子	世田谷泉定	
光丘	能本信行	向丘定	
足立	山本正	文京定	
蔵前工	加藤秀次	工芸定	
葛西南	長船良昭	荻窪(新)定	
江東商業	太田充幸	第一商定	
橘	中村文男	稔ケ丘	
葛西工	橘田進	小石川工定	
富士森	畑中喜八	五日市定	
八王子北	青木モト子	立川定	
翔陽	遠藤紳一郎	大山定	
上水	小田茂	三鷹定	
青梅総合	松木啓展	北豊島工定	
小金井北	小橋川和子	砂川定	
永山	笹沼正美	昭和定	
農業	須賀秀次	農芸定	

他校種から全日制へ転任（6名）

現任校	氏名	前任校	19年度副校長会役職・備考
蒲田	依田文一	府中養護	
新宿山吹	舘野秀靖	光明養護	
杉並	磯部篤	北養護	
忍岡	長江誠	葛飾養護	
府中	川瀬徹	あきるの学園	
三鷹地区中高一貫開設準備室	山下博一	新島村立新島中	

全日制から定時制への転任（15名）　　平成20年4月1日発令

現任校	氏名	前任校	19年度副校長会役職・備考
一橋通	赤羽根行雄	蒲田	
大崎定	金澤利明	小石川	
大森定	神津良雄	篠崎	
世田谷泉定	西山和雄	青井	都副校長会・東部A常任幹事
新宿山吹定	大川登喜彦	新宿	都副校長会・中部B常任幹事代理
総合工科定	北川昇	府中工	
富士定	宮澤良美	八潮	
稔ヶ丘定	中洋一	翔陽	
大山定	大池公紀	青梅総合	都副校長会・西部D常任幹事
北豊島工定	横山芳夫	荒川工	
浅草定	小萱久	日本橋	
立川定	星野純一郎	都立大附	都副校長会・中部B常任幹事
福生定	天野秀人	上水	
五日市定	菊池芳紀	多摩	都副校長会・西部D幹事補佐
砂川定	高橋斉	光丘	都副校長会・中部D常任幹事代理

新任者（30名）　　平成20年4月1日発令

現任校	氏名	前任校	備考
八潮	三保和彦	東部支所支援主事	昇任
小山台	小牟礼和人	小笠原	昇任
太田地区進学型専門・開設準備	平野篤士	中部支所支援主事	昇任
都立大附	笹のぶえ	稔ヶ丘定	昇任
桜修館中等・中	鵜飼敦之	高指課	昇任
中野地区中高一貫・開設準備	高澤功	練馬区立大泉二中	昇任
練馬地区中高一貫・開設準備	渡辺政彦	立川市立立川三中	昇任
田柄	久下尚男	高指課	昇任
杉並総合	松尾龍太郎	北豊島工	昇任
農芸	齋藤義弘	瑞穂農芸	昇任
小石川	幸田諭昭	西部支所支援主事	昇任
小石川中等・中	富川麗子	高指課	昇任
上野	大野哲也	葛飾南	昇任
両国附属中・中	石崎規生	西部所支援主事	昇任
墨田川	室岡誠一	中部支所支援主事	昇任
本所	白井克昌	東部所支援主事	昇任
城東	加藤隆	大島	昇任
小松川	岡田恵吾	足立西	昇任
小岩	清水薫	研修センター	昇任
八王子地区中高一貫・開設準備	大熊一正	日野市教委	昇任
野津田	佐藤和彦	駒場	昇任
八王子桑志	辻信宏	小金井工	昇任

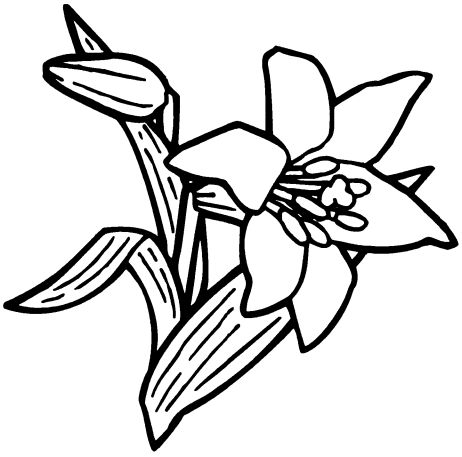
現任校	氏名	前任校	備考
秋留台	内田圭一	西部支所支援主事	昇任
小金井地区科学技術・開設準備	藤井大輔	高指課	昇任
若葉総合	古川直浩	人事部試験室	昇任
調布北	猪又英夫	砂川	昇任
大島海洋国際	倉本武雄	松原	昇任
新島	廣末修	戸山・定・主幹・長期研修生	昇任
芝商業	林努	中部支所支援主事	昇任
葛飾商業	昼間一雄	第四商業	昇任

その他

19年度早期退職者等副校長　3名	氏名	前任校	19年度副校長会役職・備考
	和田吉廣	調布北	都副校長会・会長
	小島透	蔵前工	全国教頭会・副会長
	網谷厚子	忍岡	都副校長会・会計監査
19年度降任副校長　1名			

平成20年度中途発令者

現任校	氏名	前任校	発令日
葛飾野	樋口博文	本所高主幹	20. 8. 1発令
足立西	大塚雅一	葛飾商主幹	20. 12. 1発令
五日市	中川徹	武蔵丘主幹	20. 12. 1発令



編　集　後　記

副校長は学校経営支援センターや経営企画室との連携を図りながら、校長の学校経営計画の具現化のために校務を調整し、授業観察や自己申告書に基づく面接、さらには内部あるいは対外的な様々な対応と、非常に多忙な毎日を過ごしています。それにもかかわらず会報の原稿をお寄せくださった副校長の先生方には深く感謝申し上げます。

今年度になってからも、主任教諭選考、OJT、教員免許更新制度、TAIMS の全教員への配置等、新たに取組が求められる事柄が多数ありました。そんな中、ともすれば日々の業務処理に追われてしまいがちですが、こういう時こそ副校長会の自主的な研修活動を活発にして、学校経営への視野を広げ、人材育成のために自らも常に自己啓発を意識する必要があると思います。

かつてメンタルヘルスの講習会に出席した際、講師の先生が管理職のメンタルヘルスについても言及されました。メンタルヘルス維持のためには、同じ立場の仲間同士で悩みを出し合ったり相談できる場が必要だということでした。副校長連絡会や説明会等で副校長同士が会った折りに情報交換等をする機会も最近減ってきているのではないかと思います。

副校長の仕事が減ることは期待できませんが、少しでも業務が合理的・効率的に行えて、助け合うことによりストレスを緩和することができればと思います。副校長会がそのための助けになればと思っています。1年間の活動をまとめた本会報をご活用ください。

（副会長　都築　功）

会　　報

第 36 号　（平成 20 年度）　非売品

発行日　平成 21 年 3 月 31 日
編集者　東京都立高等学校副校長会事務局
発行所　東京都立高等学校副校長会
〒113-0034　東京都文京区湯島 1 - 5 - 28
ナーベルお茶の水 2 階
電話　5840 - 6104　FAX　5840 - 6108
E-mail: info@zenko-kyotou.jp
印刷所　社会福祉法人　東京コロニー　東京都大田福祉工場
〒143-0015　大田区大森西 2 - 22 - 26　電話　3762 - 7611

横山大観　五郷先生